

(一) 大士 舍利弗等の小士に對せる語。  
 (二) 仁者 文殊をさす。  
 (三) 涅槃 消ゆるといふ語源より來る。消滅、死等の譯あるも、こゝに涅槃菩提とあるは悟りの境界を指す。菩提は覺と譯す。  
 (四) 論廿丁右表、開解十二丁右(十八卷) 快鈔下半二日下。  
 (五) 契經 文殊師利答第一經なり。

の種々の相を見ずや、文殊對へて曰く、我れ實に是くの如く等の相を見ず、唯し微塵をのみ見ると、是くの如く是の如く世尊問詰し、文殊答曰すること一百數に至つて、佛文殊に問玉はく、微塵を見るや、文殊對へて曰く、我れ久遠よりこのかた微塵をも見ずと、余の時に世尊文殊に告げて言はく、善哉善哉、汝は是れ(一)大士なり、能く一相を覺れり、能く一相を覺るは即ち無相の法なり、文殊師利よ、汝(二)仁者のみ是くの如く覺るに非ず、一相門に依る一切衆生は、本よりこのかた常住にして(三)涅槃菩提の法に入れり、乃至智相は見るべきこと無きを以ての故に」と、馬鳴菩薩は彼の經文に依つて同相門を立て玉ふ、文相は明かなるが故に重釋を須るす。

(四) 異相門とは、彼の(五)契經の中に是くの如くの説を作す「佛、身子に告げ玉はく、汝此土を見るに何なる心見をか作す、身子答へて曰さく、我れ此土を見るに、山川林樹沙磧土石、日月宮殿舍宅等の種々の相、各々の形相名字差別不同なりと、佛の言はく、汝が智慧の力下劣狭少にして、心に高下あつて是くの如くの異を見るなり、唯し汝一人のみ是くの如く見るには非ず、一切衆生も亦復是くの如し、乃至諸法も亦復是くの如し、真妄互に熏じ、染淨相待して功德過患の形相名字各々差別なり、凡夫の心に隨つて立つ

(一) 上より論の第二卷(胡蝶論)の釋以下を指す。  
 (二) 本分 立義分なり。  
 (三) 因縁 學者の一分によれば立義の意となす。  
 (四) 已下 生滅因縁段。  
 (五) 心は本覺意は未那、意識は前六識、釋決第十一卷末那内境參照。

る所の名相は、有にして而も實に非ず、皆幻化の法なり」と乃至廣説せり、此文に依るが故に、義を尋ねて述して異相門を立つ、文相明かなるが故に重釋せず、此の二門の中に存する所は初門なり、審かに思惟すべし。(一)上より已來は、(二)本分の中の「是の心生滅」の字句を釋し已んぬ、これより已下は直に(三)「因縁」を釋す、本に曰く。

(四)「復次に生滅の因縁とは、所謂る衆生は、(五)心に依つて意と意識と轉するが故に、この義いかん、阿梨耶識に依つて、説くに無明不覺にして而も起すると(六)能見と、能取の境界と、起念相續とあるを以ての故に説いて意とす、この意に復五種の名あり、云何が五つとする、一つには名けて業識とす、謂く無明の力不覺にして心動するが故に二つには名けて轉識とす、動心に依て能見の相あるが故に、三つには名けて現識とす、所謂る能く一切の境界を現すること猶し、明鏡の色像を現するが如く、現識も亦余なり、その五塵の對至するに隨つて、則ち現じて前後あること無し、一切の時に任運に而も起して常に前に在るを以ての故に、四つには名けて智識とす、謂く染淨の法を分別するが故に、五つには名けて相續識とす、念相應して斷せざるを以ての故に」。

(一) 第三重第四卷  
隨文散說參照。  
(二) 因緣 本論の  
「生滅の因緣」の因  
緣を指す。

(三) 三種不相應  
染業・轉・現・の三  
細なり。

(四) 三種相應染  
法・智相・相應  
執取の三なり。

論じて曰く、即ちこの文の中に自ら二門あり、云何が二つとする、一つには攝義顯宗セツギケンジュウ生解門シヤクゲ、二つには隨文散說決疑門ズイブンサンゼツケツギなり、初門いかん、この中の『因緣』にその二重あり、いかに二つとする、一つには不相應生滅の因緣、二つには相應生滅の因緣なり、初重の因緣その相いかん、頌に曰く。

彼の根本無明と 是の隨緣の本覺とに 各因緣を具足して

三不相應のために 正しく因緣と作るが故に 細生滅の因緣なり

更らに作意し觀察して その義理を審かんすべし

論じて曰く、根本無明と隨緣の本覺とに、各各の因緣の二義を具足して、能く三種の不相應染のために正しく因緣となる、是の故に説て細微生滅の因緣門といふ、具足の形相は散說門の中に其の理自明ならん。次の重の因緣その相いかん、頌に曰く。

現鏡識の自體と 六塵の境界の相とは 三種の相應のために

能く因緣となるが故に

論じて曰く、現鏡識の體と、六塵の境界とは、その次第の如く、彼の三種の相應染

(一) 記には擧一兼  
一せるものなりと  
せり。第四卷廿三  
丁左。  
(二) 論廿一丁左  
表、開解二十丁左  
(十八卷)勸記四之  
三初丁(十三卷)快  
紗下牛三日下。快

(三) 論廿二丁右  
表、開解卷十九の  
初丁、快紗下牛三  
日下十丁。

法のために能く因緣となる、是の故に説いて危重生滅の因緣門といふ、現識の體の中に又緣の義あり、審らかに思惟すべし。復次に、更らに二重の因緣あり、云何が二つとす、一つには本徧の因緣、二つには末徧の因緣なり、本徧といふは根本無明と及び本覺の心とを擧げて六塵の相に望むるに因緣の義あるが故に、末徧といふは業と轉との相を擧げて三相應に望むるに因緣の義あるが故に、復次に更らに二重の因緣あり、云何が二つとする、一つには上下の因緣、二つには下上の因緣なり、上下と言ふは、無明を始めとし果報を終りとして下々に力を與へ、その數を越えず因緣と作るが故に、下上と言ふは、果報を始めとし無明を終りとして、上々に力を與へその數を越えず、因緣と作るが故に、復次に一切の有爲生滅の法は、刹那も住せず因もなく緣もなきが故に、復次に因緣の法は空にして而も主無し、それ實には自性は不可得の故に、復次に不可得の法は、不可得も亦不可得の故に、その次第の如く審らかに、思釋すべし、(三)すでに攝義顯宗生解門を説きつ、次に隨文散說決疑門を説かん、この中に二門あり、云何が二つとする、一つには惣標門、二つには廣釋門なり、「復次に生滅の因緣とは、所謂る衆生は心に依つて意と意識と轉ずるが故に」とは即ち是れ初門なり、この文は

〔二〕所依「心に依つて」の本論の文ないふ。

何の義を明かさんとかする、謂く所依能依の差別を顯示せんと欲ふが故に、云何が〔二〕所依なりや謂く本覺の心なり、云何が能依なりや、謂く即ち衆生なり、衆生と言ふは當さに何れの法ぞや、謂く意と意識となり、何が故にか意と及び意識とを名けて衆生とするや、意と及び意識との一切の衆染合集して而も生ず、故に衆生と名く、而も別の自體無し、唯し心に依つて體とす、是の故に説いて「心に依つて轉ず」と言ふ。

すでに惣標門を説きつ、次に廣釋門を説かん、此の中に二品ボツあり、先づ末那轉を説き後ゴに意識轉を説く、文相見つべし、「此義云何」とは、惣じて二轉を問ふなり、此れより已下は釋を作して散説す、この意識門は、何れの契經に依てか建立する所なりや、謂く顯了經なり、彼の契經の中に當さに何が説くや、謂く顯了契經の中に是くの如くの説を作す、種々の心識は無量ありと雖、唯し末那のみ轉じて餘法あること無し、所以いかんとなれば、是の末那識に十一の義を具足して作さるる所無きが故にと、彼の契經の中には十一の名は略して別説せず、是の故に論には具さに十一種の別名を擧げて分明に顯示す、云何が名けて十二種の名とするや、一つには根本無明、二つには業相、三つには轉相、四つには現相、五つには智相、六つには相續相、七つには業識、八つには轉識、九つ

には現識、十には智識、十一には相續識なり、是を名けて十一と名く、本の如し、「阿梨耶識に依て、説くに無明不覺にして而も起すると、能見と、能取の境界と、起念相續とあるを以ての故に、説いて意とす、この意に復五種の名あり、廣説乃至、五つには名けて相續識とす、念相應して斷せざるを以ての故に」といふが故に、本地契經の中に是くの如くの説を作して「大末那識に十二轉を具す」とは、所依の本覺を以て一とするが故なり。

〔二〕相と識との兩字、何の差別の故にか更らにその數を加へて別に建立するや、甚大はなはだに別なるが故に、云何が差別なる、謂く一切の諸の〔三〕眷屬の染法は、皆悉く各々に二義あるが故に、云何が二つとする、一つには神解の義、二つには闇鈍の義なり、神解の義とは、本覺より流轉ムクランする邊に據るが故に、闇鈍の義とは、無明より流轉する邊に據るが故に、初門に依るが故に識の名を建立し後門に依るが故に、相の名を建立す、二門の差別是くの如く知るべし、何が故にか是くの如くなる、言ふ所の識とは解了の義の故に本覺に順ず、言ふ所の相とは背本の義の故に無明に順ず、是の故に常住佛性契經の中には是くの如くの説を作す、何を以てか一切衆生に悉く佛性ありと知ることを得るや、答へて曰く、一切衆生に皆心識あるが故に〔三〕當さに知るべし佛性あることを、

〔二〕論廿三丁右表、快抄下半四日下。  
〔三〕眷屬 三細六塵等なり。

〔三〕第三重第六非情成佛參照。

(一) 覺者 本覺なり。

(二) 三識 三細なり。

(三) 三相 三細の相なり。

(四) 當卷六龍段を指す。  
(五) 智相々續相の二を攝するやの意。  
(六) 今の文には執取計名等の四を略去するやの意。  
(七) 六相 皆の意。  
(八) 經 當卷次き上に引ける顯了經なり。  
(九) 能依 意識轉なり、所依は末那轉なり。

何を以ての故に佛を覺者と名くるや、能善一切の法を照達するが故に、衆生の身中にこの(一)覺者あるが故に、是の故に、一切衆生に了別識あることを得といふが故に。何の義を以ての故にか名けて意とするや、謂く二義ある故に、云何が二つとする、一つには根の義、二つには身の義なり、根の義と言ふは能生の義の故に、身の義と言ふは依正の義の故に、何の義を以ての故にか根本無明と隨染本覺とに、各の因縁を具するや、互に相望するが故に、この義いかん、謂く本覺と及び無明とを擧げて(二)三識に望むるに、本覺を因とし無明を縁とす、同じく彼の二を擧げて(三)三相に望むるに、無明を因とし本覺を縁とす、所以いかなとなれば、親に因つて因とし疎に因つて縁とするを以ての故に、何が故にか(四)上は分別智相と及び相續相とは意識の細分といひ、今この文の中には末那識に(五)攝するや、末那と意識とは、唯し是れ一體にして二別無きことを成立せんと欲ふがための故に、若し爾らば何が故にか(六)能分を略去して以て意とせざるや、實に約せば(七)皆意なり理盡の故に且く略せるのみ、是の故に(八)經に「作さるる所無し」といふ、然も別に意識轉を建立することは、(九)能依所依の法門を建立せんと欲ふがための故に、この決擇を擧げて三相末那なること廣く通達すべし、復次

(一) 七五 第七識と前五識なり。  
(二) 八六 第八識と第六識なり。

(三) 論廿四丁左表、開解十三丁左(十九卷)鈔下半五日下。

に阿梨耶相は定んで阿梨耶に非ず、末那も定んで末那に非ず、意識も定んで意識に非ず、定無きを以ての故に、藏識も末那なり、末那も藏識なり、意識も藏識なり、藏識も意識なり、亦皆藏識なり、皆是れ末那なり皆是れ意識なり、亦復皆非なり、是くの如く常無きが故に皆是れ無常なり、無常なるが故に眞實に非ず、眞實に非ざるが故に皆是れ幻化なり、幻化なるを以ての故に自性空無なり、自性空なるが故に決定寂滅なり、寂滅なるが故に寂滅も亦寂滅なることを顯示せんと欲ふがために故に、金剛三昧契經の中に是くの如くの説を作す、地藏菩薩の言はく、不可思議の不可思議聚とは、(一)七五不生なり、(二)八六寂滅なり、九相も空無なり、有空にして有なること無し、無空にして有なること無し、乃至上の文に言く、佛の言はく、見をば即ち妄とす、何を以ての故に一切の萬有は無生無相にして、本より自名にあらず、悉く皆空寂なり、一切の法相も亦復是くの如し、一切衆生の身も亦是くの如し、身すら有にあらず、いかに見あらんやといふが故に。

(三) すでに隨文散説決疑門を説きつ、次に相續業用差別門を説かん、本に曰く。  
『過去無量世等の善惡の業を住持して失せざらしむるが故に、復能く現在未來苦樂

等の報を成就して差違なきが故に、能く現在已經の事をして忽然として念じ、未來の事を不覺に妄慮せしむ』

(二) 釋決十一卷妄慮徧緣參照。

(三) 第三重第五卷潤業潤生參照。

論じて曰く、(一)この相續識に即ち三義あり、云何が三つとする、一つには攝前不失の義、二つには感果成就の義、三つには妄慮徧緣の義なり、初の義いかん、この相續識は、而も能く潤業の煩惱を發起し、過去の無明所起の一切種々の善不善の極を住持して、能く成果の力用を作さしむるが故に、本の如し、「過去無量世等の善惡の業を住持して失せざらしむるが故に」といふが故に、中の義いかん、この相續識は(二)又能く潤生の煩惱を發起して、而も能く已成辨いじやせんの業をして果報を決定し安立し屬當せしむるが故に、本の如し、「復能く現在未來苦樂等の根を成就して差違無きが故に」といふが故に、後の義いかん、この相續識は攀緣轉廣はんえんくわん、分別更らに強くして已知いしの境を緣じて樂不樂がくの心を發し、現前の境に對して愛不愛の心を増し、未知の境を緣じて不了に妄計するが故に、本の如し、「能く現在已經の事をして、忽然として念じ、未來の事を不覺に妄慮せしむ」といふが故に、是くの如くこの識は生死を連續して斷絶せざらしむ、是の故に名けて相續識とす。

(二) 論廿五丁左表、開解廿一丁左(十九卷)快抄下六日下。  
(三) 釋決第十五卷唯心廻轉參照。

(一) すでに相續業用差別門を説きつ、次に(二)唯心廻轉諸法門を説かん、本に曰く。

『是の故に三界は虚偽にして唯心の所作なり、心を離れては則ち六塵の境界無し、この義いかんぞ、一切の法は皆心より妄念を起して生ずるを以てなり、一切の分別は即ち自心を分別するなり、心が心を見ず相として得べきこと無し、當さに知るべし世間の一切の境界は、皆衆生の無明と妄心に依て住持することを得、是の故に一切の法は鏡中の像の體として得べきこと無きが如し、唯心の虚妄なり、心生すれば則ち種々の法生じ、心滅すれば則ち種々の法滅するを以ての故に』。

論じて曰く、この文は何の義を明あかさんとかする、一切の諸法は、唯し心の廻轉にして餘法無きことを顯示せんと欲ふがための故に、所以いかなとなれば、心の有無に隨つて諸の差別の法、有と無とあるが故に、諸法唯心ならばこの心は有あなりや、是くの如くの心法も亦不可得なるが故に、(三)若し余らば唯し是れ心なる義いかんが成立する、此れ亦心なるが故に、何を以てか現知するや、經文明かなるが故に、いかんが説くや、謂く(四)分流楞伽契經の中に是くの如くの説を作す、無心の心量を説くを我れ説いて心量とすといふが故に。復次に(五)心不可得の句に由るが故に大空の義を成立し、(六)無心

(三) 第三重第六卷唯心廻轉參照。  
(四) 四卷楞伽第三卷廿二丁。  
(五) 心不可得論の意を取る。  
(六) 楞伽經の意を取る。

の心量の句に由るが故に幻差別の義を成立す。復次に大空の義に由るが故に諸法成ずることを得、幻差別の義に由るが故に空理顯はるゝことを得。復次に相觀に由るが故に定んで二事無し、二事無きが故に一事を成せず、一事無きが故に不成も亦不成なり、その次第の如く審かに觀察すべし。

(二)論廿六丁右  
真、開解卷廿初丁  
快鈔下牛七日目。

(二)すでに廣大末那轉相門を説きつ、次に分別事識轉相門を説かん、本に曰く。

『復次に意識と言ふは、即ち此れ相續識なり、諸の凡夫に依らば、取着轉深くして我々所を計し、種々の妄執事に随つて攀緣し、六塵を分別するを名けて意識とす、亦分離識と名く、又復説いて分別事識と名く、此の識は見と愛との煩惱に依つて増長する義の故に』。

論じて曰く、即ちこの文の中に自ら四門あり、いかんが四とする、一つには簡擇假者同分門、二つには生起龜重轉相門、三つには建立名字差別門、四つには顯示安立所依門なり、簡擇假者門とは、三種の凡夫を擧げて地上の聖に簡ぶが故に、云何が三種の凡夫を、一つには無根盲聾の凡夫、二つには毛頭難角の凡夫、三つには金剛不變の凡夫なり、是を名けて三とす、本の如し、「諸の凡夫に依て」といふが故に。生起龜重門とは、若し

々邪定聚の諸の衆生に據らば、常に戲論分別の識を興して一切種々の境界に取着し、深厚にして邊際あること無く始終あること無し、常恒に増長して斷絶無きが故轉は、本の如し。「取着轉深くして」といふが故に、若し不定聚の諸の衆生に據らば、滅相に定んで是れ不善なりと覺つて不作意を起すと雖、而も人空知未だ現前せざるが故に、諸の境界と及び自分等を緣じて、我々所を計して堅執して捨てざるが故に、本の如し。「我々所を計し」といふが故に、若し三賢位の諸の衆生に據らば、すでに人空般若を成就して異相の夢を覺ますと雖、而も眞の法空智猶し未だ現前せざるが故に、種々の着を起して法實なりと堅執し、事に随つて思慮して、平等の正理を通達すること能はざるが故に、本の如し、「種々の妄執事に随つて攀緣し六塵を分別す」といふが故に、建立名字門とは即ち三種あり、云何が三つとする、一つには所依微細名字、二つには所依龜相名字、三つには隨順境界名字なり、是れを名けて三とす、初の名いかん、この識は彼の微細の末那に依つて以て止根として、而も安立することを得るが故に意識と名く、本の如し「名けて意識とす」といふが故に、中の名いかん、この識は彼の眼等の五根に依つて以て止根として五塵を分別す、是の故に亦名けて分離識とす、本の如し、

(二) 第三重第六種  
于熏習參照。

(三) 論二十七丁左  
裏、開解九丁左(廿  
卷) 快鈔下半八日  
下。生滅の因緣  
(三) 生滅の因緣  
生滅章因緣章の二  
に通ずや、或は因  
緣の一段のみに局  
るや異義なり。快  
鈔初丁左右參照。  
(四) 義下本初丁。

「亦分離識と名く」といふが故に、後の名いかん、この識は全く事の境界を縁じて而も轉分別して未だ如理を以て自境界とせず、是の故に名けて分別事識とす、本の如し、「又復説いて分別事識と名く」といふが故に、顯示所依門とは、見修の二惑本識を熏す、この熏力に由つて麤分の意識建立し増長し、相續し恒轉して住持することを得るが故に、本の如し、「此の識は、見と愛との煩惱に依つて増長する義の故に」といふが故に。

(三) 上よりこのかたは、(三) 生滅の因緣決擇已んぬ、此れより已下は因緣殊勝不可思議の相を顯示す、本に曰く。

(四) 「無明熏習に依つて起する所の識は、凡夫の能く知るに非ず、亦二乗の智慧の覺る所に非ず、謂く菩薩に依れば、初め正信の發心より觀察し、若し法身を證せば少分知ることを得、乃至菩薩究竟地にしても知り盡すこと能はず、唯佛のみ窮了す、何を以ての故に、是の心は本よりこのかた自性清淨なれども而も無明あり、無明の爲めに染せられてその染心あり、染心ありと雖、而も常恒に不變なり、是の故に此の義は唯佛のみ能く知り玉へり、所謂る心性は常に念無きが故に名けて不變とす、一法界

(一) 信相應地 三  
賢なり。

(二) 淨心地 初地  
なり。  
(三) 具戒地 第二  
地なり。  
(四) 無相方便地  
第七地なり。  
(五) 無自在地 第  
八地なり。  
(六) 心自在地 第  
九地なり。  
(七) 菩薩盡地 圓  
滿即ち第十地なり。  
(八) 如來地 果滿  
なり。

(九) 第三重第六即  
心不覺參照。

に達せざるを以ての故に心に相應せずして忽然として念起するを名けて無明とす、染心とは六種あり、云何が六つとする、一つには執相應染、二乗の解脫と及び(三) 信相應地とに依つて遠離するが故に、二つには不斷相應染、信相應地に依つて方便を修學し、漸々に能く捨て、(三) 淨心地を得て究竟して離るゝが故に、三つには分別智相應染、(三) 具戒地に依つて漸く離れ、乃至(四) 無相便地にして、究竟して離るゝが故に、四つには現色不相應染、(五) 無自在地に依つて能く離るゝが故に、五つには能見心不相應染、(六) 心自在地に依つて能く離るゝが故に、六つには根本業不相應染、(七) 菩薩盡地により(八) 如來地に入ることを得て能く離るゝが故に、一法界を了せざる義とは、信相應地より觀察學斷し、淨心地に入つて隨分に離るゝことを得、乃至如來地にして能く究竟して離るゝが故に。相應の義と言ふは、謂く心と念法と異なり、依は染淨差別なれども、而も知相と緣相と異なるが故に。不相應の義とは、謂く(七) 即心と不覺と常に別異無し、知相と緣相とに同せざるが故に。又染心の義とは、名けて煩惱礙とす、能く眞如根本智を障ゆるが故に。無明の義とは名けて智礙とす、能く世間の自然業智を障ゆるが故に、此の義云何、染心に依つて能見し能現し妄りに境界を取つて平等性に

違するを以ての故に、一切の法は常靜にして起相あること無きも、無明不覺にして妄りに法と違するが故に、世間一切境界の種々の智に隨順すること得ること能はざるを以ての故に』。

論じて曰く、即ちこの文の中に、故に五門あり、いかに五つとする、一つには舉人顯示殊勝門、二つには顯示深緣決疑門、三つには舉障示治配當門、四つには顯應不應差別門、五つには立二礙別障用門なり、是を名けて五とす、第一の門の中に即ち三人あり、云何が三つとする、一つには分滿俱絶の人なり、邪定の凡夫と一切の二乗とは愚癡深きが故に、智慧劣なるが故に、本の如し、「無明の熏習に依つて起する所の識は、凡夫の能く知るに非ず、亦二乗の智慧の覺る所に非ず」といふが故に、二つには有分無滿の人なり、五十位の人始覺の般若未だ圓滿せざるが故に、本の如し、「謂く菩薩に依れば、初め正信の發心より觀察し、若し法身を證せば少分知ることを得、乃至菩薩究竟地にしても知り盡すこと能はず」といふが故に、三つには有滿無分の人なり、佛果の位の中には、大圓鏡智徧く現前するが故に、本の如し、「唯佛のみ窮了するを以ての故に」といふが故に是を名けて三とす。

(二) 論三十九丁右裏、開解十三丁左、(廿) 卷快鈔下牛九日下。

(三) 所謂以下の本論を指す、之に就て異義なり、快鈔五丁左已下對見。

(三) 六種の隨相三相應、三不相應なり、(四) 發心、十住の初心なり。

(二) すでに舉人顯神殊勝門を説きつ、次に顯示深緣決疑門を説かん、此の中に二意あり、云何が二とする、一つには常無常門、二つには無常常門なり、常無常門とは、自相本覺の心は、無始よりこのかた決定常住にして體性不變なれども、無常に非ざる時無く變化に非ざる處無きが故に、本の如し、「何を以ての故に、是の心は本よりこのかた自性清淨なれども而も無明あり、無明の爲めに染せられてその染心あり」といふが故に、無常々門と言ふは、此の本覺の心は、無始よりこのかた常恒に無常に、常恒に變異なれども、常住に非ざる時無く不變に非ざる處無きが故に、本の如し、「染心ありと雖、而も常恒に不變なりといふが故に。」是の故に此の義は唯佛のみ能く知り玉へり」とは總じて殊勝を結す、(三) 此れより已下は、更らに二句を以て上の二句を稱す文相見つべし。すでに顯示深緣決疑門を説きつ、次に舉障示治配當門を説かん、即ち此の門の中に自ら二意あり、云何が二つとする、一つには隨轉對治分位門、二つには根本對治分位門なり、隨轉對治門とは、(三) 六種の隨相は、その次第の如く、(四) 發心を初めとし妙覺を後として應に隨つて離るゝが故に、本の如し、「染心とは六種あり、云何が六とする、一つには執相應染、二乗の解脫と及び信相應地に依つて遠離するが故に」、廣説乃至、



二〇 極喜 初地なり。

「六つには根本業不相應染、菩薩盡地により如來地に入ることを得て能く離るが故に」といふが故に、根本對治門とは、大力無明は、(一)極喜を初めとし妙覺を後として應に隨つて離るゝが故に、本の如し、「一法界を了せざる義とは、信相應地より觀察學斷し、淨心地に入つて隨分に離るゝことを得、乃至如來地にして能く究竟して離るゝが故に」といふが故に、極喜地の中の根本と隨相と對治の形相、當さに如何が別つべき、謂く後得智の所斷をば名けて無明とし、及び正體智の所斷をば名けて隨相とす、是くの如く知るべし、極喜を説くが如く、上の一切の地も亦復是くの如し。

(二)すでに舉障示治配當門を説きつ、次に顯應不應差別門を説かん、云何が名けて相應の義とするや、相應の義と言ふとは、所謂る心品及び念法と異なり、云何が心品ぞ、所謂る本覺隨染の心なり、云何が念法ぞ、所謂る直に無明に依て生長する妄法なり、何の義を以ての故にか名けて相應とするや、謂く相に力を與ふるが故に、是くの如くの二法は何の故にか異とするや、本より各別なるが故に、本の如し、「相應の義とは謂く心と念法と異なり」といふが故に。念法の依は染なり、心品の依は淨なり、是くの如くの二依は各々差別なること猶し水火の如し。何故にか相應の義を成すと言ふや、知相と

(三)論三十丁右裏、開解二十四丁右(第廿卷)快鈔下牛十日下。

(一)釋決第八卷、根本無明二智所斷參照。  
(二)眞如智 根本正體智なり。  
(三)作業智 後得智なり。

緣相と合して契同するが故に、云何が名けて知相契同とする、心品と念法と相捨離せず和會して轉するが故に、云何が名けて緣相契同とするや、是くの如くの二品は所緣同なるが故に、本の如し、「依は染と淨と差別なれども而も知相と緣相と同なるが故に」といふが故に、大本金剛三昧契經の中に是くの如くの説を作す、三種の相は同なり、異の故に同を成す、若し同ならば不同なるが故に、若し爾らば何が故にか部宗契經の中に是くの如くの説を作す、三種の染は二義の故に轉ず、云何が二轉ぞ、一つには相違轉、二つには隨順轉、乃至廣說、上に逆へ下に順じて是くの如くの説を作す、別の意趣無し、不相應の義は相應と相違せり、審かに觀察すべし。

すでに顯應不應差別門を説きつ、次に立二礙別障用門を説かん、(一)彼の煩惱礙は多く散動の性なり、是の(二)眞如智は直に寂靜の性なり、是くの如く相違せり、故に立て、障とす、本の如し、「又染心の義とは名けて煩惱礙とす、能く眞如根本智を障ゆるが故に」といふが故に、彼の智慧礙は漠冥の性なり、是の(三)作業智は聰明の性なり、是くの如く相違せり、故に立て、障とす、本の如し、「無明の義とは名けて智礙とす、能く世間の自然業智の故に」といふが故に。「此の義云何」の下はその因縁を顯示す、審かに思擇す

治門の二障は擧勝示  
て門の中は立二礙  
門の二礙は立二礙  
就の第三重第六障  
礙の第一重第六障  
五礙の第一重第六障  
照二礙の第一重第六障

べし、二障二礙と復何の別がある、二障門を立つることは一向斷に據り、二礙門を立つることは斷と不斷とに據る、是くの如く知るべし、是くの如く觀すべし、上よりこのかたは因縁殊勝決擇分已んぬ。

### 國譯釋摩訶衍論卷第四終

### 國譯釋摩訶衍論卷第五

龍樹菩薩の造

これより已下は生滅の相の差別を顯示す、本に曰く。

『復次に、生滅の相を分別すとは、二種あり。云何が二つとする、一つには魚と心と相應するが故に、二つには細と心と相應せざるが故に、又魚が中の魚は凡夫の境界なり、魚が中の細及び細が中の魚は菩薩の境界なり、細が中の細は是れ佛の境界なり、この二種の生滅は、無明熏習に依て而も有なり、所謂る因に依り縁に依る、因に依るとは不覺の義の故に、縁に依るとは妄りに境界と作る義の故に、若し因滅すれば則ち縁滅す、因滅するが故に不相應の心滅し、縁滅するが故に相應の心滅す。問て曰く、若し心滅すといは云何ぞ相續せん、若し相續すといは云何ぞ究竟滅と説かん、答へて曰く、言ふ所の滅とは唯し心相の滅にして心體の滅には非ず、風は水に依て動相あり、若し水滅すれば即ち風斷絶して依止する所無けん、水滅せざるを以て風相々續す、唯し風滅するが故に動相隨つて滅すれども、是れ水の滅するに

疏四卷廿一丁右、  
記三卷初丁、  
廿四卷初丁、  
初日下本七丁左、  
初日下本七丁左、  
義記下本七丁左、  
初日下本七丁左、  
初日下本七丁左、  
初日下本七丁左、

は非ざるが如く、無明も亦爾なり、心體に依て動ず、若し心體滅せば則ち衆生斷絶して依止するところ無けん、體滅せざるを以て心相續することを得、唯し癡滅するが故に心相隨つて滅すれども心智の滅するに非ず。』

論じて曰く、即ちこの文の中に、自ら五門あり、云何が五つとする、一つには標釋俱成示相門、二つには率相屬當假人門、三つには顯示龜細所依門、四つには本覺對治次第門、五つには發起問答決疑門なり、標釋俱成示相門と言ふとは、龜重生滅は心と相應するが故に、微細生滅は心と相應せざるが故に、云何が名けて龜重生滅とする、當さに何の識と相當すべきや、謂く末が末の故に、分別事識と而も共に相應するが故に、云何が名けて微細生滅とする、當さに何の識と不相應なるべきや、所謂る末の故に、(一)三位の本識と而も不相應なるが故に、馬鳴菩薩は何れの經本に依つてこの解釋を作し玉ふや、謂く楞伽經なり、彼の契經の中に如何が説くや、(二)謂く一本の分流楞伽契經の中に是くの如くの説をなす、余の時に大慧菩薩(三)摩訶薩、復佛に白して言さく、世尊よ、諸識に幾ばく種の生住滅かある、佛大慧に告げ玉はく、諸識に二種の生住滅あり、思量の所知に非ず、諸識に二種の生ありとは、謂く流注生と及び相生となり、二種の

(一)三位業轉現の三細にして本識とは第八識なり

(二)一本分流楞伽第一卷の文

(三)摩訶薩 摩訶薩は佛の略、大有情と譯す、大慧菩薩を形容せるもの。

(一)一本十卷楞伽第二卷の文。

(二)唐本には文殊師利の次に即の字あり。  
(三)業識なり。  
(四)轉識なり。  
(五)現識なり。  
(六)第六識なり。  
(七)分離面鏡三相應染は能なる故に假能所の相に顯にて恰も鏡に顯るが如き故に云ふ。

(九)第三重第六與心相應參照。

住ありとは、謂く流注住と及び相住となり、二種の滅ありとは、謂く流注滅と及び相滅となりと。又(一)一本の分流楞伽契經の中に、是くの如くの説を作す、大慧よ、諸識に二種の滅あり、何等をか二つとする、一つには相滅、二つには相續滅なり、二種の生あり、何等をか二つとする、一つには相生、二つには相續生なり、二種の住あり、何等をか二つとする、一つには相住、二つには相續住なりと。又大本楞伽契經の中に是くの如くの説を作す、余の時に文殊師利(二)佛に白して言はく、世尊よ、諸の心識の法に幾くの無常の相がある、佛文殊に告げ玉はく、若し(三)第一有の細識には上品の非離生滅あり、若し(四)中傳縛の細識には中品の非離生滅あり、若し(五)遠傳縛の細識には下品の非離生滅あり、若し(六)遍分別の龜識には(七)分離面鏡の生滅ありと。是くの如くの三本楞伽契經の中には何の義をか明さんとする、龜重と微細との二種の生滅の差別の相を顯示せんと欲ふがための故に、契經の中に於ては唯し名字を出だしてその義を示さず、此の義を以ての故に馬鳴菩薩は、契と不契とを分つて龜細二種の生滅を顯示し玉ふ、本の如し(一)復次に、生滅の相を分別すとは、二種あり、云何が二つとする(二)一つには龜と心と相應するが故に、二つには細と心と相應せざるが故に」といふが故に。

(一)不退凡夫 三  
 (二)分清淨者 十  
 (三)滿清淨者 妙  
 (四)後の二 智相  
 (五)初の二 轉現  
 (六)業識の一分 業識の一分  
 (七)業識の一分 業識の一分  
 (八)業識の一分 業識の一分  
 (九)業識の一分 業識の一分  
 (十)業識の一分 業識の一分

(九)因とは無明、縁とは境界なり。

すでに標釋俱成示相門を説きつ、次に率相屬當假人門を説かん、この中の假人に即ち三種あり、云何が三つとする、一つには(一)不退の凡夫、二つには(二)分清淨者、三つには(三)滿清淨者なり、是れを名けて三とす、初人は何れの相應を以て而も自の境界とするや、謂く執相應染を以て自の境界とするが故に、本の如し、「又龜が中の龜は凡夫の境相なり」といふが故に、中人は何等の染を以て而も自の境界とするや、謂く(四)後の二の相應と(五)初の二の不相應と及び(六)業識の一分とを以て自の境界とするが故に、本の如し、「龜が中の細と及び細が中の龜とは菩薩の境界なり」といふが故に、後人は何の不相應染を以てか自の境界とするや、謂く俱合動相の(七)一分と及び獨力業相の(八)全分とを以て自の境界とするが故に、本の如し、「細が中の細は是れ佛の境界なり」といふが故に。

すでに率相屬當假人門を説きつ、次に顯示龜細所依門を説かん、この中の所依に即ち二種あり、云何が二つとする、一つには是通、二つには是別なり、通とは、二種の生滅は皆無明を以て所依とするが故に、別とは、二種の生滅はその次第の如く各の(九)因と及び縁とを所依とするが故に、本の如し、「この二種の生滅は、無明熏習に依て而も有なり、

(一)四卷楞伽第一  
 (二)不思議熏  
 (三)不思議變  
 (四)不思議染  
 (五)不思議變  
 (六)不思議染  
 (七)不思議變  
 (八)不思議染  
 (九)不思議變  
 (十)不思議染

(已上是通) 所謂る因に依り縁に依る、因に依るとは不覺の義の故に、縁に依るとは妄りに境界と作る義の故に」といふが故に、今この論文は何の經に依てか起する、謂く(一)楞伽經なり、彼の契經の中に如何が説くや、謂く分流楞伽契經の中に是くの如くの説を作す大慧よ、(二)不思議熏と及び(三)不思議變とは是れ(四)現識の因なり、(五)取種々の塵と及び(六)無始妄想熏とは、是れ分別事識の因なりと、又大本楞伽契經の中に是くの如くの説を作す、復次に(七)不離染の因とは、可思議と不可思議熏と及び可思議と不可思議變となり、復次に(八)分離染の因とは、(九)種々の猛風と(十)妄想現鏡識となり、乃至廣説。何の法をか名けて不思議熏とする、所謂る是れ根本無明なり、何の義を以ての故にか名けて不思議と名くるや、謂く甚深なるが故に、云何が甚深なるや、謂く金剛已還の一切衆生はこの處を了せず、是の故に名けて不思議熏とす、(十一)熏の如く變も亦余なるが故に。大本經の中に是くの如くの説を作す、(十二)可思議、不可思議とは金剛還上の人に就くが故にと。(十三)すでに顯示龜細所依門を説きつ、次に本覺對決次第門を説かん、謂く本覺智は根本無明を始とし(十四)滅相を終とす、その(十五)次第の如く漸く對治するが故に、然もこの中の斷は(十六)無明を捨てざるを以てその斷とす、(十七)斷除を以て而も斷とするには非ざる

議熏變、不可思議  
 熏變なり。  
 三論四丁左表、  
 開解十七丁左(廿  
 一)下(廿八)冊  
 日下(廿八)冊  
 報なり。起業果  
 報なり。下轉逆  
 次第なり。下轉逆  
 次第なり。下轉逆  
 不捨無明參照。  
 三三煩惱等の斷除  
 斷には非ずとの意

(二)答へて曰く  
 以下の文を指す即  
 ち開通決疑門な

るが故に、若し爾らば何んが斷の義成するや、謂く煩惱の心を斷ず、斷除して起せざる  
 が故に、是を本覺治道の次第と名く、本の如し、「若し因滅すれば則ち緣滅す、因滅する  
 が故に不相應の心滅す、緣滅するが故に相應の心滅す」といふが故に。

すでに本覺對治次第門を説きつ、次に發起問答決疑門を説かん、即ちこの門の中に自  
 ら二意あり、云何が二つとする、一つには兩難閉關門、二つには開通決疑門なり、文  
 相見つべし、本覺の明智が根本無明を斷せば、三種の細染永滅して起せじ、すでに三細  
 無くば六塵の心亦發すること能はじ、三六種の心永滅して起せずば、本覺性の智自ら有  
 なること能はじ、所以いかんとなれば、三六種の心は但し無明のみに非ず、亦本覺と  
 俱なり、眞妄和合するを三六の心と名くるが故に、然も若し三六の心滅すといはば、  
 本覺も同じく滅して所有無けん、豈本覺の心而も相續することを得て、邪定に至ると  
 いふことを得べけんや、故に「問て曰く、若し心滅すといはば云何を相續せん」とい  
 ふ、即ち是れ初關なり、若し本覺は是れ功德の法にして非斷の法なれば、常恒に相續  
 して斷絶無しといはば、豈に三六種の心永滅して起せずといふことを得べけんや、故に  
 「若し相續すといはば云何が究竟滅と説かん」といふ即ち是れ第二の關なり、(二)是れ

より已下は釋を作して疑を決す、文相明かなるが故に重釋を須るす。

上より已來は生滅相の決擇分已ぬ、此れより已下は、染淨の相熏相生して斷絶せざ  
 る義を顯示す、本に曰く。

「復次に、四種の法の熏習の義あるが故に、染法淨法起つて斷絶せず、云何が四つと  
 する、一つには淨法、名けて眞如とす、二つには一切の染因、名けて無明とす、三つ  
 には妄心、名けて業識とす、四つには妄境界、所謂る六塵なり、熏習の義とは、世間  
 の衣服は實には香無けれども、若し人香を以て熏習するが故に、則ち香氣あるが如く  
 此れも亦是くの如し、眞如の淨法は、實には染無けれども、但し無明を以て而も熏  
 習するが故に則ち染相あり、無明染法は、實には淨業無けれども但し眞如を以て而  
 も熏習するが故に則ち淨用あり。云何を熏習して染法を起して斷せざるや、所謂る眞  
 如の法に依るを以ての故に無明あり、無明染法の因あるを以ての故に即ち眞如を熏  
 習す、熏習を以ての故に即ち妄心あり、妄心あるを以ての故に即ち無明を熏習す、  
 眞如と法とを了せざるが故に、不覺の念を起して妄境界を現す、妄境界の染法の緣  
 あるを以ての故に即ち妄心を熏習す、その念着をして種々の業を造り一切身心等の

苦を受けしむ、此の妄境界熏習の義に即ち二種あり、云何が二つとする、一つには增長念熏習、二つには增長取熏習なり。安心熏習の義に二種あり、云何が二つとする、一つには業識根本熏習、能く阿羅漢と辟支佛と一切菩薩とに生滅の苦を受けしむるが故に、二つには增長分別事識熏習、能く凡夫に業繫の苦を受けしむるが故に。無明熏習の義に二種あり、云何が二つとする、一つには根本熏習、能く業識を成就する義を以ての故に、二つには所起見愛熏習、能く分別事識を成就する義を以ての故に、云何が熏習して淨法を起して断せざるや、所謂眞と如と法とあるを以ての故に能く無明を熏習す、熏習の因縁力を以ての故に、則ち安心をして生死の苦を厭ひ涅槃を樂求せしむ、此の安心に馱求の因縁あるを以ての故に、即ち眞如を熏習して自ら己れが性を信じ、心の妄動を知り、前の境界無く遠離の法を修し、如實を以て前の境界無しと知るが故に、種々方便をもて隨順の行を起して取らず念せず、乃至久遠熏習力の故に無明則ち滅す、無明滅するを以ての故に起あること無し、起無きを以ての故に境界隨つて滅す、因縁俱に滅するを以ての故に、心相皆盡るを涅槃を得て自然の業を成すと名く。安心熏習の義に二種あり、云何が二つとする、一つには分別事識熏習、諸の凡夫と

二乗の人等生死の苦を厭ふに依て、力の所能に隨つて漸く無上道に趣向するを以ての故に、二つには意熏習、謂く諸の菩薩發心勇猛にして速かに涅槃に趣くが故に。眞如熏習の義に二種あり、云何が二つとする、一つには自體相熏習、二つには用熏習なり、自體相熏習とは、無始世よりこのかた無漏法を具す、用熏習とは、備に不思議の業あつて境界の性となる、此の二義に依て恒常に熏習す、熏習力あるを以ての故に能く衆生をして生死の苦を厭ひ、涅槃を樂求して自ら己身に眞如の法ありと信じて發心し修行す。問て曰く若し是くの如くの義ならば、一切衆生に悉く眞如あつて等しく皆熏習す、云何が有信と無信と無量に前後差別なるや、皆一時に自ら眞如の法ありと知て、方便を勤修して等しく涅槃に入るべし、答へて曰く、眞如は本より一なれども無量無邊の無明あつて、本より已來自性差別にして厚薄不同なるが故に、過恒河沙等の上煩惱、無明に依て起して差別あり、我見愛染の煩惱、無明に依て起して差別あり、是の如く一切煩惱は無明に依て起されて前後無量の差別あるをば唯し如來のみ能く知り玉ふが故に、又諸の佛法は因あり縁あり、因縁具足して乃ち成辨することを得、水中の火性は是れ火の正因なり、若し人知ること無く、方便を假らずして能く自ら木



門、二つには立名略示門、三つには通釋熏習門、四つには分割散說門、五つには盡不盡別門なり、第一の門の中に自ら六意あり、云何が六つとする、一つには相待相成似有意、謂く染淨の諸法は皆悉く相待して而も成立することを得て、唯し自建立の法あること無きことを顯示せんと欲ふが故に、二つには本無性空非有意、謂く染淨諸法の種々の名字は、本無の中に於て、權假に建立して、一切皆悉く自名に非ざることを顯示せんと欲ふが故に、三つには相待相成顯空意、謂く染淨の諸法は相觀に由るが故に、本よりこのかた自體あること無く、自性空なることを顯示せんと欲ふが故に、四つには自然虛空無礙意、謂く一切の諸法は、有と非有とに非ざるが故に自然作の空なり、礙と非礙とに非ざるが故に常に無障礙を作す義を顯示せんと欲ふが故に、五つには非作非造自然意、謂く一切の諸法は、有佛無佛に相熏相生して斷絶無き義、法爾道理として性はくの如くなることを顯示せんと欲ふが故に、六つには不守自性無住意、謂く一切の諸法は、緣起陀羅尼を作す義を顯示せんと欲ふが故に、惣じて是くの如く等の無量の義を標す、故に名けて總標綱要門とす、本の如し、「復次に、四種の法の熏習の義あるが故に染法淨法起つて斷絶せず」といふが故に。

(二) 緣起陀羅尼の義、陀羅尼とは無住の義なり。

(二) 論九丁左表、二十二卷初丁、快紗上牛三日下。

(三) 離體相本上無明、本とは根本の無明なり、枝末の無明は、上とは體相に多義ある中一義に多義あるは、眞如相は本覺にして淨法を體相といふ(快二十丁)境、現相なり。

(四) 第三重第六舉一後有參照。(五) 士夫惣じて人を指す。

(六) 斑多伽耶婆及提郎林、鬼集林と譯せり。

(七) 會末那提、怖香と譯せり。

(八) 梵檀只多那、仙居林と譯せり。

(九) 陀摩健多、仙香と譯せり。

(二) すでに總標綱要門を説きつ、次に立名略示門を説かん、此の門の中に於て即ち二門あり云何か二つとする、一つには淨眞法相門、二つには染妄法相門なり、言ふ所の眞とは、自性清淨本覺藏智なり、言ふ所の妄とは、離體相本上の無明なり、染妄門の中に即ち三種あり、云何が三つとする、一つには無明、二つには業識、三つには境、境界なり、一眞と三妄と是くの如くの四法は能く熏事を作す本數の名字なり、今此の文の中には(一)を擧げたり後に中有を併兼することあり、審かに觀察すべし、所以いかなとなれば、一切の染法は皆悉く熏習の事あるが故に、本の如し、「云何が四つとする、一つには淨法、名けて眞如とす、二つには一切の善因、名けて無明とす、三つには妄心、名けて業識とす、四つには妄境界、所謂六塵なり」といふが故に。

すでに立名略示門を説きつ、次に通釋熏習門を説かん、此の門の中に於て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには比量譬喻善巧門、二つには法喻合說安立門なり、比量譬喻善巧門とは、譬へば衣服は本よりこのかた亦芬香も無く亦鄙香も無く一向無記なり、而も(五)士夫の衆あつて(六)斑多伽耶婆及提郎林に入る時には(七)會末那提を以て熏習するが故に而も穢香あり、(八)梵檀只多那林に入る時には(九)陀摩健多を以て熏習するが故に



而も香氣あるが如くなるが故に、本の如し、「世間の衣服は實には香無けれども、若し人香を以て熏習するが故に則ち香氣あるが如く」といふが故に、法喻合説安立門とは、勝義の道理も亦復是くの如し、自性清淨の無漏の性徳は無始よりこのかた一向明白にして、亦垢累も無く亦染汗も無し、而も無明を以て而も熏習するが故に則ち垢累あり、無明藏海は無始よりこのかた一向闇黒にして、亦智明も無く亦白品も無し、而も本覺を以て而も熏習するが故に則ち淨用あり、是くの如くの染淨は但し是れ假立なり、染も實の染に非ず、淨も實の淨に非ず、皆是れ幻化なり、實の自性無し、本の如し、「此れも亦是くの如し、真如の淨法は、實には染無けれども、但し無明を以て而も熏習するが故に則ち染相あり」無明染法は、實には淨業無けれども、但し真如を以て而も熏習するが故に則ち淨用あり」といふが故に。すでに通釋熏習門を説きつ、次に分割散説門を説かん、此の門の中に於て即ち四門あり、云何が四つとする、一つには黒品相熏有力門、二つには白品相熏有力門、三つには發起問答決疑門、四つには舉緣廣説開通門なり、第一門の中に則ち二門あり、云何が二つとする、一つには惣問惣答顯宗門、二つには歸惣作別散説門なり、第二門の中にも此の二門を具せり、審かに觀察すべし、第

(二)第三重第六無明淨用參照。

(一)所謂已下の文を指す。  
 (二)淨妙藏、真如本覺自性なり、塵染は業果なり、(記五卷八丁左)  
 (三)至部實主、法譬何れか不明、但し、實は眞なり、生は依なり、猶し虚空の至極眞實にして、部類萬物の主となるが如く、眞如の性も之に準じて知れとせり、之は法譬に通ず、見たる説なり、(鈔三の廿七丁右)  
 (四)障礙、染法なり、無障礙は淨法なり。  
 (五)自所、眞如に依つて立し已れば、自の力を展べて還つて眞如を熏じて、業識の意を流成するの業識の自體なり。

四門の中に自ら二門あり、云何が二つとする、一つには惣標軌則決定門、二つには因緣各示生解門なり、その次第の如く説相見つべし。「云何が熏習して染法を起して斷せざるや」とは、即ち是れ惣問なり、通惣して一切の黒品の相熏相生して斷せざる義を問ふが故に、(一)此れより已下は即ち惣答分なり、即ち此の答説分の中に就て、(二)淨妙藏より乃し龜熏に至るまで、本に背き末に向て漸次に轉勝するその次第を説けり、説相の次第審かに觀察すべし、根本無明は自ら有なること能はず、當さに眞如に依つて方に止住することを得べし、所以いかなとなれば、眞如の性は虚空界の如く、(三)至部實主として、障礙及び無障礙の中に於て、爲めに歸依と作つて所礙無きが故に、本の如し、「所謂る眞如の法に依るを以ての故に無明あり」といふが故に、是くの如くの無明は、(四)自所得已ぬれば、氣力殊勝功能自在にして、能く眞如を熏じて妄法と作さしめ、不了の相を増し闇鈍の用を加ふること、譬へば愛父の諸の男女を生ずるが如し、本の如し、「無明染法の因あるを以ての故に即ち眞如を熏習す、熏習を以ての故に即ち妄心あり」といふが故に。是くの如くの微細業識の妄心は無明に因るが故に、(五)自體生じ已んぬれば、還つて無明を熏じて能く増長せしむること、譬へば生子の能生の父を養ふ

(一)第三重第六生死之海參照

(二)識眼 七識眼なり。  
(三)三有 欲、色、無色の三界なり。  
(四)四毒 貪、瞋、癡、慢なり。  
(五)境界 實には妄境界とすべきなり。  
(六)論十二丁右表開解十五丁左(廿二卷)快鈔上半四日下(三十册)。  
(七)初とは無明、後とは境界なり。  
(八)初重境界熏習なり、第三重第七二執俱起參照。  
(九)法執 智相相續なり。  
(一〇)人執 執取、計名なり。

が如し、是くの如くの熏力更らに轉増するが故に平等の如理と圓滿の一心とに通達すること能はざるが故に、轉識の惑念を起し、現相の妄境を生じて(一)生死の海更らに深く涅槃の岸彌高し、本の如し、「妄心あるを以ての故に即ち無明を熏習す、真如と法とを了せざるが故に、不覺の念を起して妄境界を現す」といふが故に、是くの如くの境界の風、還つて現識の海を熏じて七識の波浪を起す、此の識が境界の塵に樂著し、彼の境が面り(二)識眼の前に向つて、通じて諸惡の業を造り、具さに一切の苦報を受けて、(三)三有の輪循環し、(四)四毒の賊浪起す、本の如し、「(五)境界の染法の緣あるを以ての故に即ち妄心を熏習す、その念着をして種々の業を造り一切身心等の苦を受けしむ」といふが故に。

(六)すでに惣問惣答顯宗門を説きつ、次に歸惣作別散說門を説かん、此の門の中に就て即ち三重あり、云何が三つとする、一つには境界、二つには妄心、三つには無明なり、是を名けて三つとす、是くの如くの三種に各二つあるが故に即ち六數と成る、その次第の如く(七)初めを以て後とし、後を以て初めとして漸次に顯示す、(八)初重云何、この妄境界に如實熏習の力あるが故に(九)法執の念を増し、如有熏習の力あるが故に(一〇)人執

(一)上煩惱 枝末の惑なり。

(二)中重 妄心熏習なり。  
(三)上熏 無明なり。  
(四)第三重第七、釋決十三、三賢分段參照。  
(五)阿羅漢 尊敬を受くべき人の意、古來應供と譯す、但し茲に阿羅漢とあるは小乘の果を得たる人を指す。  
(六)後重 無明熏習なり。  
(七)初末 業識なり、枝末の最初の故に爾かいふ。  
(八)通達遍 本編の因縁に同じ。  
(九)初後 業識と事識を指す。  
(一〇)邊得の有 初後兩邊の業識事識なり。  
(一一)中有 轉、現、未那なり。  
(一二)後義 空成就意を指す。

の着を長す、人法二執具足して起するが故に、過於恒沙の(一)上煩惱の類皆悉く發起す、是の故に名けて境界熏習とす、本の如し、「此の妄境界熏習の義に即ち二種あり、云何が二つとする、一つには增長念熏習、二つには增長取熏習なり」といふが故に、(二)中重いかん、業識の妄心に(三)上熏の力あるが故に、(四)すでに出離を得たる三乘の聖人に而も能く變易の細苦を受けしめ、下熏の力あるが故に未だ出離を得ず、一切の凡夫に而も能く分段の危苦を受けしむ、是の故に名けて妄心熏習とす、本の如し、「妄心熏習の義に二種あり、云何が二つとする、一つには業識根本熏習、能く(五)阿羅漢と辟支佛と一切菩薩とに生滅の苦を受けしむるが故に、二つには增長分別事識熏習、能く凡夫に業繫の苦を受けしむるが故に」といふが故に、(六)後重いかん、無明住地は自體本の故に(七)能く初末を熏じて成就することを得しむ、(八)通達遍の故に能く事識を熏じて成就することを得しむ、何が故にか唯し(九)初後を舉げて中間を顯はさる、二意あるが故に。云何が二とする、一つには有成就意、二つには空成就意なり、云何が名けて有成就意とする、(一〇)邊得の有を舉げて(一一)中有を顯はすが故に、云何が名けて空成就意とする、中空の無を舉げて邊空を顯はすが故に、(一二)後義いかん、契經の中に於て是くの如く説くが故に、

(二) 中成就 中間の三法なり。

(三) 論十三丁右裏、開解廿三卷初丁、快鈔廿八丁右(四日下)

(三) 次の所謂以下の本論の文を指す

(四) 因果 因は三賢十地、果は佛地

當さに何れの契經ぞや、謂く熏習經なり、彼の契經の中にいかに説くや、謂く熏習契經の中に是くの如くの説を作す、轉識と現識と末那との三識は、無明に従つて而も成就を得るに非ず、所以いかにとなれば、根本無明は、唯し邊成就にして(二)中成就に非ずと、此の文の後の義は、直に彼の經を釋したるものなり、是の故に明かに知んぬ、此の義成することを得、本の如し、「無明熏習の義に二種あり、云何が二つとする、一つには根本熏習、能く業識を成就する義を以ての故に、二つには所起見愛熏習、能く分別事識を成就する義を以ての故に」といふが故に。(三)すでに黒品相熏有力門を説きつ、次に白品相熏有力門を説かん、「云何が熏習して淨法を起して斷せざるや」とは、即ち是れ惣問なり、謂く通惣して一切の白品の相熏相生して斷せざる義を問ふが故に、(四)此れより已下は即ち惣答分なり、即ち此の答説分の中に就て、自ら二熏あり、いかに二とする、一つには無始自然熏、二つには始有建立熏なり、無始熏とは、無始よりこのかた(五)因果の二位あるが故に、始有熏とは修力に因るが故に、因果の二位あるが故に、本因果とはその相いかに、謂く無始よりこのかた三賢十聖の位あるが故に、三身四徳の果あるが故に、始因果とはその相いかに、今修行する時、方に乃ち無始の十

(二) 十種の本覺 正體智なり、十地に約して十種といふ本論の眞の字に當る。

(三) 十地所説の眞如なり、十地に約して十種といふ。本論の如の字に當る。

(四) 信前邪定聚の位なり。

(五) 十住。

(六) 十行。

(七) 十廻向。

(八) 十地。

(九) 乃しは第二地より第九地迄、金剛は第十地、久遠以下は佛果をいふ。

(一〇) 解脱道 佛果なり。

(一一) 始地 始有地位の略なり。

地あるが故に、本有の圓果を顯はすが故に。本因果とは次第いかに、無始よりこのかた(二)十種の本覺の眞智及び、(三)十種の如實法界とあるを以ての故に、能く十種の枝末の無明を熏じ、一種の法界心あるを以ての故に、能く根本無明を熏習するが故に是を本地と名く、本の如し、「所謂眞と如と法とあるを以ての故に能く無明を熏習す」といふが故に。始因果とは次第いかに、謂く(四)未だ十信の位を得ずと雖、而も本熏習の力を以ての故に即ち自心の中に生死の苦を厭ひ涅槃の樂を求む、此の力を以ての故に而も即ち眞如の自性を熏習し、自ら佛性を信じて十信の位に入り、(五)心の虛妄を知て十解の位に入り、(六)境界の空を知て十行の位に入り、(七)出向の法を修して十向の位に入り、(八)如實般若を以て境界の空を知るが故に、無量の方便をもて法界性に隨順する行を發起して涅槃をも取らず生死をも念せず極喜地に入り、(九)乃し金剛に至る、久遠より熏習するが故に、(一〇)解脱道を發して無明頓に斷ず、根本盡るが故に枝末皆無し、本末の黒品所有無きが故に、法身涅槃を得て應化の業用を成ずるが故に、是を(一一)始地と名く、本の如し、「熏習の因縁力を以ての故に、則ち妄心をして生死の苦を厭ひ涅槃を樂求せしむ、此の妄心に厭求の因縁あるを以ての故に、即ち眞如を熏習して自ら己れが性を信

(一)論十四丁左  
表、開解八丁右(廿  
三卷)快鈔上半五  
日下(卅一册)

(二)四十心 十信  
三賢なり。

(三)初地は相續  
第二地より第七地  
迄は智相、第八地  
は現相、第九地は  
轉相。  
(四)清淨分 能斷  
の智品にして染汚  
分は所斷の惑品  
なり。

じ、心の妄動を知り、前の境界無く遠離の法を修し、如實を以て前の境界無しと知るが故に、種々方便をもて隨順の行を起して取らず念せず、乃至久遠熏習力の故に無明則ち滅す、無明滅するを以ての故に起ること無し、起無きを以ての故に境界隨つて滅す、因縁俱に滅するを以ての故に心相皆盡るを涅槃を得て自然の業を成すと名く」といふが故に、(一)すでに惣問惣答顯宗門を説きつ、次に歸惣作別散說門を説かん、此の門の中に就て則ち二門あり、云何が二つとする、一つには妄染熏習門、二つには淨法熏習門なり、染法門の中に即ち二種あり、いかんが二つとする、一つには是れ(二)は是れ細なり、言ふ所の(三)是れ即ち是れ意識なり、言ふ所の細とは十一末那なり、意識熏とはその相いかん、(四)四十心の凡夫と及び諸の二乗とは、意識の中の本覺の智分を以て意識の中の無明の癡分を熏じて、生死の苦を厭ひ涅槃の樂を欣ひ、漸々に轉勝して佛道に向ふが故に、本の如し、「妄心熏習の義に二種あり、云何が二つとする、一つには分別事識熏習、諸の凡夫と二乘の人等生死の苦を厭ふに依て、力の所能に隨つて漸く無上道に趣向するを以ての故に」といふが故に。十一末那熏習の義とはその相いかん、(五)初の聖地より乃し金剛に至るまで、その次第の如く、(六)清淨分を以て染汚分

(一)第三重第六卷  
法身應化參照。

(二)自然作の跡な  
自と名け、自然作  
の相を自と名く、  
梵王等の所作に由  
るに非ざる故に他  
力無しといふ。

を熏じて無上菩提の道に證入するが故に、菩薩の無明を斷するに等しきを以ての故に、本の如し、「二つには意熏習、謂く諸の菩薩發心勇猛にして速かに涅槃に趣くが故に」といふが故に。すでに妄染熏習門を説きつ、次に淨法熏習門を説かん、此の門の中に就て、自ら二門あり、云何が二つとする、一つには惣標門、二つには開釋門なり、惣標門とは惣じてその名を標す、本の如し、「真如熏習の義に二種あり、云何が二つとする、一つには自體相熏習、二つには用熏習なり」といふが故に、開釋門の中に自ら二門あり、云何が二つとする、一つには(一)法身自然熏習門、二つには應化常恒熏習門なり、言ふ所の法身熏習門とは、本覺性智は、無始よりこのかた功德を圓滿し智慧を具足して、(二)自々が自を作して他力無きが故に、本の如し、「自體相熏習とは、無始世よりこのかた無漏法を具す」といふが故に、言ふ所の應化熏習門とは、是くの如くの本覺は過恒沙の無量無邊不可思議の種々の業用を發して、一切衆生の諸の心相の中に、應に隨つて教化して、一切の惡を斷じ一切の善を修し、百行の因を具し萬徳の果を滿せしむるが故に、本の如し、「用熏習とは、備さに不思議の業あつて境界の性となる」といふが故に、是くの如くの二門は相ひ捨離せず、一切の時に於て一切の處に於て、常恒に

(二) 信を起しとは、  
十信、次は十住、  
次は十行、次は十  
廻向、正後地は十  
地なり。

(三) 第三重第八卷  
三身本有參照。  
(四) 論十六丁右  
表、開解八丁右(廿  
三卷)快鈔六日下  
初丁。

(四) 説處不明。

熏習して(二)信を起し、解を生じ、修行を建立し、不轉を造作し、正後地に到り、眞俗の境に達して無礙ならしむるが故に、本の如し、「此の二義に依て恒常に熏習す、熏習力あるを以ての故に能く衆生をして、生死の苦を厭ひ涅槃を樂求して、自ら己身に眞如の法ありと信じ、發心修行す」といふが故に、此の義に由るが故に(三)三身本有の理、故に顯了なり。(四)すでに白品相熏有力門を説きつ、次に發起問答決疑門を説かん、此の決疑門は、義理解し難く文教更らに閉たり、釋を作して散するに非ざるよりんば定めて通ずる人無く、明了なること能はず、是の故に今更らに種々の釋を作して具足し開示して行者の心を曉さん、その次第の如く問答の相審かに觀察すべし、一切衆に皆本覺あり、有ひは衆生數に而も本覺無し、皆理あるが故に、所以いかんとなれば(五)大覺尊者是くの如く説き玉ふが故に、此の義いかん、一切衆生は、無始よりこのかた本覺を具足し、無始よりこのかた本覺無しといふが故に、若し初門に依らば、一切衆生に悉く本覺あり、是くの如くの本覺は唯し是れ一體にして諸の衆生に遍するが故に、一々の衆生に各別覺ありや、一切衆生には唯し一覺のみあつて別覺無きが故に。若し爾らば、衆生は唯し是れ一なるべし、所有の本覺一なるが故に。本覺は非一なるべし、能

(二) 頌文なり。

(一) 同一相續の義  
明の同一相續の義  
にして一無明の  
意。差別 多無明  
の意。  
(四) 初の義 一無  
明の義を指す。  
(五) 頌文なり、勸  
註第十五卷初丁。

有の衆生多なるが故に、此の事爾らず、所以いかんとなれば、意趣別なるが故に、謂く本覺の心は平等の性なるが故に異種なること能はず、一切衆生は差別の性なるが故に同種なること能はず、異なること能はざるが故に一なり、同なること能はざるが故に多なり、若し爾らば此の文いかんが通せんや、謂く、馬鳴尊者の大宗地立文本論の中に是くの如くの説を作す、「譬へば虚空の中の、清淨の滿月輪は、獨一にして二體無けれども、遍く千器に現はるゝが如く、本覺も亦是くの如し、獨一にして二體無けれども、諸の衆生の、種々の心相の中に遍せり、譬へば一段の雲の彼の滿月輪を覆へば、千器の諸の月輪、皆隠没して現せざるが如く、無明も亦是くの如し、唯し一體にして二つ無し、遍く諸の衆生に到つて、能く熏習の事を作す」と、二義あるが故に相違の過無し、云何が二つとする、一つには自宗決定、二つには引攝決定なり、自宗決定と言ふは、(一)同一相續の義を顯示するが故に、引攝決定と言ふは(二)差別相續の義を顯示するが故に、彼の立文論は、(三)初の義を顯はさん爲めにして、是の起信論は後の義を顯はさんが爲めなり。此の義を以ての故に相違の過無し、是の故に馬鳴尊者の虚空地々論の中に、是くの如くの説を作す、「譬へば蓮葉を以て、一器の月輪を覆ふに

(二) 頌文なり。

而も餘器の月輪は、終に隠れずして現前するが如く、無明も亦是くの如し、惑人の覺を覆ふ時、已覺の人の本覺をば、終に隠覆すること能はず」と、此の文は何の義を明さんとかする、差別相續の義を顯示せんと欲ふがための故に、復次に。文殊師利論議第一神力殊勝慈悲圓滿虛空功德契經の中に、是くの如くの説を作す、「(一)無量無邊の、無明煩惱の障あつて、遍く衆生の身に到つて、能く障礙の事を作す」と、此の文は何の義をか明さんとかする、謂く、精進修行の義を顯示せんと欲ふが故に、云何が顯示する、謂く、衆生あつて是くの如くの念を作す、若し無明の體は唯し是れ一種にして、一切の諸の衆生に遍せば、無明は唯一にして衆生は衆多なれば斷除すべきこと易し、何ぞ敢勞を須めて修行すべきや、如、世間の相を見るに多人一事を作す、之を難しとするに足らずとおもつて勤めて修行せず、是くの如くの懈怠癡の衆生を對治せんと欲ふが爲めの故に如來說いて「無量無邊の無明あつて、能く佛性を覆ふ」とのたまふ、此の義を以ての故に、一無明の義而も成立することを得、若し爾らば、一衆生の煩惱盡きる時の中に、餘の一切衆生も皆悉く亦盡くべし、所以いかなとなれば、唯一の無明なるが故に、若し一人斷する時に餘人斷すること能はずば、同一の無明と言ふこと

を得べからず。復次に衆生界斷絶の過失あるが故に、此事爾らず、無明は一なりと雖相續別なるが故に、この相いかん、頌に曰く。

譬へば夜闇は一なれども 遍く十室の中に到る 一室の闇を滅する時に  
餘も滅すと言ふ可らざるが如し。

論じて曰く、夜闇は一なりと雖、而も能く遍く十室の中に到る、闇一なれば室も一なりとは亦言ふべからず、室十なれば闇も十なりとは亦説くべからず、一室の中に於て、人明燈を以て室の中を照すに、闇盡く滅して餘無し、明圓に顯れて遍く一室の中を照すに、闇盡く滅して餘無ければ、九室の中の闇も盡く滅して餘無しとは亦言ふべからず、餘の九室の闇具さにあつて滅せざれば、燈一室を照すに闇滅せずとは亦説くべからず、無明煩惱も亦復是くの如し、夜闇と言ふは無明に喩ふ、十室と言ふは衆生の身に喩ふ、明燈と言ふは智慧に喩ふ、是の故に當さに知るべし、無明は一なりと雖、相續別なるが故に、斷と及び不斷と各々不同なり、(二)若し一衆生の煩惱盡る時、餘の諸の衆生斷すること能はずといはば、煩惱未盡の衆生の身中の本覺の佛性は無明の爲めに覆はれ、煩惱已盡の衆生の身中の本覺の佛性は、無明の所覆已に盡く出離せり、障を離

(二) 論十八丁右  
裏、快鈔七下(卅  
二册)

(二) 現量 凡情度量の心の意。

(三) 頌文なり。

(四) 以下の文二教論上卷所引。

(五) 第三重第七無明厚薄參照。

れたる佛性と、障へられたる佛性とは、天殊地別なり、何が故にか今同一の佛性にしてその體を分たすして諸の衆生に遍すと云ふや、本覺の佛性は虚空界に等くして遍せざる所無く至らざる所無く通せざる所無く當らざる所無し、平等々々一味一相にして差別あること無し、而も無明藏の中の本覺の佛性は染の爲めに覆障せられ、法界の外の本覺の佛性は染覆を離れたりといふは、此れ俱に攀緣慮知の心、(二) 現量の境界なり、是れ自性中實の理心に非ず、是の故に、當さに知るべし、佛性の理は唯し是れ一種にして等しくして差別無し、是の故に馬鳴尊者の大宗地立文本論の中に是くの如くの説を作す、(三) 「月輪は千器に顯るれども、若し濁水の器にあれば、現すれども而も分明なるに非ず、若し清水の器にあれば、圓かに顯はれて而も明了なり、晦と明と不同なりと雖、唯し一の満月輪なり、本覺も亦是くの如し」と、(四) 一切衆生に無始よりこのかた、皆本覺あつて捨離する時無し、何が故にか衆生先に成佛するあり、後に成佛するあり、今成佛するあり、亦勤行あり、亦不行あり、亦聰明あり、亦闇鈍あつて無量に差別なるや、同じく一覺あらば、皆悉く一時に發行修行して無上道に到るべし、本覺の佛性强劣別の故に是くの如く差別なるか、(五) 無明煩惱厚薄別の故に是くの如く差別なるか、若し

(一) 一地斷 無明を佛果の一地にて斷する義成立せしむ。至理 本覺なり。(二) 以上正問答、以下五重問答、先づ第一問答、大師は此の文を第六の住心に引證し玉へり。(秘藏寶鑰)(三) 第二問答、大師は此の文を第七の住心に引證し玉へり。(四) 五邊 増益、損減、相違、愚痴、戲論の五。(五) 第二問答、大師は此の文を第八の住心に引證し玉へり。(六) 第一問答、大師は此の文を第九の住心に引證し玉へり。(七) 中道なり、天に背けり、天は第一義天の略、一法界は第一義天とも云ふべからずとの意。(八) 演水 懸河と同じ。(九) 第四問答 大

初めの如く言はば、此事則ち爾らず、所以いかんとなれば、本覺の佛性は、過恒沙の諸の功德を圓滿して増減無きが故に、若し後の如く言はば、此事亦尔らず、所以いかんとなれば、(一) 一地斷の義成立せざるが故に、是くの如くの種々無量の差別は、皆無明に依て而も住持することを得、(二) 至理の中に於て關ること無し、(三) 若し是くの如くならば、一切の行者、一切の惡を斷じ一切の善を修して、十地を超え無上地に到つて、三身を圓滿し四徳を具足す、是くの如くの行者は明とやせん無明か、是くの如くの行者は無明の分位にして明の分位に非ず、(四) 若し尔らば清淨本覺は、無始よりこのかた修行を觀ず、他力を得るに非ず、性徳圓滿し本智具足せり、亦四句を出で、亦(五) 五邊を離れたり、自然の言も自然なること能はず、清淨の心も清淨なること能はず、絶離々々せり、是くの如くの本處は、明とやせん無明か、是くの如くの本處は無明の邊域にして明の分位に非ず、(六) 若し尔らば一法界心は、百非に非ず、千是に背けり(七) 中に非ず、中に非ざれば(八) 天に背けり、天に背きぬれば、(九) 演水の談、足斷つて止まり、審慮の量、手亡じて住す、是くの如くの一心は明とやせん無明か、是くの如くの一心は、無明の邊域にして明の分位に非ず、(一〇) 三自一心摩訶衍の法は、一も一なること能

はず、(一)能入の一を假る、心も心なること能はず、能入の心を假る、實には我の名に非ざれども而も我に目く、亦自の唱へに非ざれども而も自に契へり、我の如く名を立つれども而も實の我に非ず、自の如く唱へを得れども而も實の自に非ず、立々として又立なり、遠々として又遠なり、是くの如くの勝處は明とやせん無明か、是くの如くの勝處は無明の邊域にして明の分位に非ず、(二)不二摩訶衍の法は、唯是れ不二摩訶衍の法なり、是くの如くの不二摩訶衍の法は、明とやせん無明か。(三)すでに右覺門を説きつ、次に無覺門を説かん、何が故にか一切衆生に本覺あること無きや、本覺無きが故に、何が故にか本覺無きや、衆生無きが故に、何が故にか衆生無きや、本覺無きが故に、この二門を率て廣く通達すべし、本の如し、「問て曰く、若し是くの如くの義ならば、一切衆生に悉く真如あつて等しく皆熏習す、云何が有信と無信と無量に前後差別なるや、皆應に一時に自ら真如の法ありと知て、方便を勤修して等しく涅槃に入るべし、答へて曰く、真如は本より一なれども、無量無邊の無明あつて、本よりこのかた自性差別にして厚薄不同なるが故に、過恒河沙等の上煩惱無明に依て起して差別あり、我見愛染の煩惱無明に依て起して差別あり、是くの如くは一切煩惱は、無明に依て起さ

師はこの文を第九  
の住心に引證し玉  
上へり、而して三自  
さいは自體、自相、自  
入の能入より名滅門所  
名の能入せしむる所の  
相應せざるは、絶一は  
相も故に、絶一は多  
ること能はざる、能  
心も心なること能は  
はざるなり。(三)以下第五問  
答、大師は此の引文  
證し玉の住心にこの引  
文の分位なきは、此の  
明の分位なること能  
理在絶言なればなり  
(三)論廿丁右表、  
開解三十八丁左、  
下(廿三卷)快鈔八日

(二)論二十丁右裏  
終行、開解廿四卷  
初丁(十四册の内)

れて、前後無量の差別あるをば、「唯し如來のみ能く知り玉ふが故に」といふが故に。すでに發起問答決疑門を説きつ、次に舉緣廣説開通門を説かん、此の門の中に就て則ち二門あり、云何が二つとする、一つには惣標軌則決定門、二つには緣相散示生解門なり、第一の門に於て即ち三種あり、云何が三つとする、一つには法體説、二つには譬喩説、三つには契合説なり、「又諸の佛法は、因あり縁あり、因緣具足して成辨することを得」とは、即ち是れ法説なり、謂く、諸の佛法は、當きに因縁を待つて自立の法無し、所以いかなとなれば、法爾なるを以ての故に、言ふところの「因」とは、本覺の性種なり、言ふところの「縁」とは、權實の別用なり、此の二事を以ての故に、もろくくの法成立することを得、審かに觀察すべし。(一)すでに法説を説きつ、次に喩説を説かん、「木中の火性は是れ火の正因なり、若し人、知ること無く、方便を假らずして、能く自ら木を焼くといは、是の處りあること無きが如く」とは、即ち是れ喩説なり、此の中の譬喩に即ち四種あり、云何が四つとする、一つには木喩、二つには火喩、三つには人喩、四つには焼喩なり、言ふ所の「木」とは染法に喩ふ、言ふ所の「火」とは智慧に喩ふ、言ふ所の「人」とは衆生に喩ふ、言ふ所の「焼く」とは對治に喩ふ、



(二) 阿梨羅多掩尸木、龍舌木と譯せり、甘四丁左には第五卷に毒なる木にして、毒の棲息する木とせり。

(三) 伏火 木中にある火の性ないふ

(三) 隨無 木無ければ火も無きない

第一の譬喩その意いかん、所謂る(二)阿梨羅多掩尸木に即ち五事を具す、云何が五つとする、一つには根原深固にして能く超過するもの無し、二つには幹枝花葉より乃し菓實に至るまで利なる銛刺を生ず、三つには香氣極めて穢し、四つには毒虫樂着す、五つには眷屬無盡なり、是を名けて五とす、無明染法も亦復是くの如し、根本無明は、甚深廣大にして能く過ぎたるもの無きが故に、一切種々の枝末不覺は、迷惑の過失量あること無きが故に、第二の譬喩その意いかん、所謂る(三)伏火に七事あり、云何が七つとする、一つには乾亡の義、能く木を枯らし、乃し死に至らしむるが故に、二つには生長の義、能く寒氣を礙へて生を得しむるが故に、三つには莫測の義、所を知らざるが故に、四つには隱藏の義、見ること能はざるが故に、五つには出現の義、火炎を出すが故に、六つには隨有の義、木に隨つて有なるが故に、七つには(三)隨無の義、木に隨つて無なるが故に、是を名けて七とす、本覺の般若も亦復是くの如し、染法を熏習して盡滅に至すが故に、境を受けて流轉するが故に、所住の處不思議なるが故に、無明藏の中に密に隱没するが故に、具足して出現すること所餘無きが故に、染の有無に隨つて覺有無なるが故に、第三の譬喩その意いかん、謂く、假人に二種あるが故に、い

(二) 婆羅利多提記には有巧方便那戸阿多羅無巧方便譯せり(三) 攢轉の義、攢は攢なり、轉は火を得るなり(四) 漸頓の義、火を得るの速なり(五) 止住の義、木の何れの部分に火性があるかを知るなり(六) 成就の次で火を燃すに就ての順序なり

(七) 論廿二丁右表、快鈔九日下初丁

かんが二つとする、一つには(二)婆羅利多提假人、二つには(三)那戸阿多羅假人なり、彼の第一の人は即ち五事を知る、云何が五とする、一つには出火の木を知り、二つには(三)攢轉の木を知り、三つには(四)漸頓の時を知り、四つには(五)止住の所を知り、五つには(六)成就の次でを知る、是を名けて五とす、若し第二の人は、此の事を知らざれば終に火を得ず、修行の諸人も亦復是くの如し、亦方便あると方便無きとの故に、第四の譬喩その意いかん、謂く、火が木を焼くに即ち三事あり、いかんが三つとする、一つには利を捨て鈍と作すこと、謂く、火焼き已んぬれば、もろくの刺木等害する能はざるが故に、二つには異を捨て同と作すこと、謂く、鈍に作し已んぬれば、都合して灰となるが故に、三つには末に背いて本に還ること、謂く相を同じ已んぬれば地と等しきが故に、是を名けて三とす、治道の次第も亦復是くの如し、謂く、障を斷するが故に、理を證得するが故に、一心に歸するが故に、(七)すでに喩説を説きつ、次に合説を説かん、この合説の中に二門あり、いかんが二つとする、一つには惣説、二つには別説なり、惣説とは所爲を惣するが故に、本の如し、「衆生も亦亦なり」といふが故に、別説とは所爲を別するが故に、此の別説の中に即ち三門あり、云何が三つとする、一

つには縁闕單因無力門、二つには因闕單緣無力門、三つには因縁具足圓成門なり、縁闕單因無力門とは、譬へば木中の火性は、本よりこのかた伏藏の火ありと雖、而も方便を假らざれば、以て火を得ること無きが如く、是くの如く無明藏の中の如來の性は、本よりこのかた自性清淨心ありと雖、而も修行の功を待たざれば、以て佛を得ること無きが故に、本の如し、「正因熏習の力ありと雖、諸佛菩薩善知識等に遇ひ、之を以て縁と爲さずして、能く自ら煩惱を斷じて涅槃に入るといはゞ則ち是の處り無けん」といふが故に。因闕單緣無力門とは、譬へば人あつて方便を具すと雖、而も彼の木の中に、若し火性無くば終に火を得ざるが如く、是くの如く一切の行者も、修行の無量の方便を具すと雖、而も我生の心中に若し本覺の佛無くんば、終に佛を得ざるが故に、本の如し、「若し外縁の力ありと雖、而も内の淨法の未だ熏習力あらざれば、亦究竟して生死の苦を厭ひ涅槃を樂求すること能はず」といふが故に、因縁具足圓成門とは、譬へば木中に火性あり、亦方便を具すれば、火炎出現して木を焼くに餘無きが如く、因縁具足する者も亦復是くの如し、内の中に本覺の火性あり、外の中に修行の機能を具すれば、百行の因を圓んじ、万徳の果を滿じて、三智俱に行じ、四徳雙へ開く、本

(二) 論廿三丁右裏、開解十丁右(廿四卷)快鈔七丁左(九日下)

(三) 第三重第七卷用熏習者参照。

の如し、「若し因縁具足するものは、所謂る自ら熏習の力あり、又諸佛菩薩等の慈悲願護のための故に、能く厭苦の心を起し、涅槃ありと信じて善根を修習す、善根を修すること成就するを以ての故に、則ち諸佛菩薩の示教利喜に値て、乃し能く進趣して涅槃の道に向ふ」といふが故に、(二)すでに惣標軌則決定門を説きつ、次に縁相散示生解門を説かん、此の門の中に就て、則ち二説あり、云何が二とする、一つには惣説、二つには別説なり、惣説の中に就て即ち二意あり、云何が二つとする、一つには能縁、二つには所縁なり、能縁と言ふは即ち應化身なり、能く衆生のために成覺の境界を造作するが故に、本の如し、「(一)用熏習」といふが故に、所縁と言ふは則ち衆生界なり、一切諸佛の所化の徒なるが故に、本の如し、「即ち是れ衆生外縁の力なり」といふが故に、別説の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには有簡擇縁、二つには無簡擇縁なり、本の如し、「是くの如くの外縁に無量の義あれども、略説するに二種あり、云何が二つとする、一つには差別縁、二つには平等縁なり」といふが故に、言ふ所の有簡擇縁とは、即ち二意あり、云何が二つとする、一つには能縁の人、二つには所縁の境なり、能縁の人とはその分齊いかん、所謂る、發心を以てその初とし、如來の

(二) 釋決第十二卷、差別緣通佛菩薩、第三重第七卷、別緣所化、釋決十卷、差別緣所化參照。

地を以てその後として、能くこの縁と作る、所縁の境とは、その分齊いかん、所謂る、邪定と不定との二の衆生に通ずるが故に、復次に正定聚に通ずるが故に、本の如し、  
「差別縁とは、此人は諸佛菩薩等に依るに、初發意に始めて道を求むる時より、乃至佛を得るに至るまで、中に於て若は見、若は念じ、或は眷屬父母諸親となり、或は給使となり、或は知友となり、或は怨家となり、或は四攝を起し、乃至一切の所作無量の行縁に至るまで、大悲熏習の力を起すを以て、能く衆生をして善根を増長し、若は見、若は聞き、利益を得しむるが故に」といふが故に、此より已下は、善根の已成熟と未成熟との差別を明かす、謂く、衆生あつて、善根已に熟すれば、應化の身、即便時に應じて速かに得度せしめ、亦衆生あつて、善根未だ熟せざれば、應化の身、時節久遠にして得度せしめ玉ふ、本の如し、「此縁に二種あり、云何が二つとする、一つには近縁、速かに度を得るが故に、二つには遠縁、久遠に度を得るが故に」といふが故に、  
此れより已下は、近遠の縁に於て、各二縁を開いて、因果の差別の相を顯示す、云何が二とする、一つには増因縁、二つには増果縁なり、増因縁とは、彼の二種の縁は、各々に十地萬行を増長するが故に、増果縁とは、彼の二種の縁は、各々に如來の地の

(三) 下の是の近遠以下の本論の文を指す。

(二) 論廿四丁左表、開解十八丁下(廿四卷)快抄十日(廿三册内)

(一) 應化の上佛疏記の意は三身の中(疏四の四丁)は應化即上佛(記五の廿八丁)は應化即上佛(一説には應化を擧げて報身及び菩薩を兼れる意と(快抄八丁)左の利益(八相)なり(疏記の意なれば文は因みに應用の徳を擧げし迄に見るなり(四)奢摩他寂止の意、定さも譯せ

圓滿の果を増長するが故に、本の如し、「是の近遠の二縁を分別するに復二種あり、云何が二つとする、一つには増長行縁、二つには受道縁なり」といふが故に、(二)すでに有簡擇縁を説きつ、次に無簡擇縁を説かん、この文の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには是總、二つには是別なり、總説の中に、「平等縁とは、一切の諸佛菩薩は、皆一切衆生を度脱せんと願ふて、自然に熏習して恒常に捨てず」と言ふは、即ち是れ慈悲願力の縁なり、所謂る、一切の諸佛菩薩は、一切の時に於て、一切の處に於て、常恒に一切無量の諸の衆生の中に熏習して、而も能く境と作つて伏藏の善根の氣を發起して、常に捨てざるが故に。「同體の智力を以ての故に、應に隨つて見聞せしめて作業を現す」とは、即ち是れ實行なり、所謂る、應化の上佛は、隨轉自在無礙の力を以ての故に、時に隨ひ處に隨ひ、宜しきに隨ひ事に隨ひ、樂ひに隨つて、順々如々に、八種の利益の業を顯示して、衆生を教化して餘あること無きが故に、「所謂る、衆生三昧に依て、乃ち平等に諸佛を見ることを得るが故に」とは、即ち是れ佛の正法を觀ることを顯示す、謂く、一切諸佛の衆生界の中に出現し玉ふこと、譬へば角の中の毛の如し、重々無數なり、不可説に於て、是くの如く無量無邊ありと雖、而も若し(四)奢摩他

(一) 一義によれば、異なると見らるるは、唯自の性、皆自性とす。此の門の中に就て、即ち二門あり、云何が二つとする、一つには未入正位、二つには已入正位なり、云何が名けて未入正位とする、謂く十信の凡夫と一切の二乗と三賢の菩薩等とは、未だ正體智を得ず、未だ如理を證せざるが故に、本の如し、「此の體用熏習を分別するに復二種あり、云何が二つとする、一つには未相應、謂く、凡夫と二乗と初發意の菩薩等は、意と意識との熏習を以て、信力に依るが故に而も修行す、未だ無分別心と體と相應することを得ざるが故に、未だ自在業の修行と用と相應することを得ざるが故に」といふが故に。云何が名けて已入正位とする、謂く、十地の菩薩は内に正智を得、外に後智を得て、一分の智用は如來と等し、唯し本熏力をもて、自然に修行して眞如を増長し、能く無明を滅するが故に、本の如し、「二つには已相應、謂く、法身の菩薩は、無分別の心が諸佛の智用と相應することを得て、唯し法力に依て自然に修行して眞如

を修せざれば、終に佛を見ず、是の故に、發心已後の一切の諸菩薩等は、三昧力を以て、諸佛法性の身は、平等平等にして差別あること無く、同一眞如、同一法身なりと觀見して、(二) 異をも唯し自と見て、我自にして別なること無し、是の故に「平等に佛を見る故に」といふ。(三) すでに惣說門を説きつ、次に別說門を説かん、此の門の中に就て、即ち二門あり、云何が二つとする、一つには未入正位、二つには已入正位なり、云何が名けて未入正位とする、謂く十信の凡夫と一切の二乗と三賢の菩薩等とは、未だ正體智を得ず、未だ如理を證せざるが故に、本の如し、「此の體用熏習を分別するに復二種あり、云何が二つとする、一つには未相應、謂く、凡夫と二乗と初發意の菩薩等は、意と意識との熏習を以て、信力に依るが故に而も修行す、未だ無分別心と體と相應することを得ざるが故に、未だ自在業の修行と用と相應することを得ざるが故に」といふが故に。云何が名けて已入正位とする、謂く、十地の菩薩は内に正智を得、外に後智を得て、一分の智用は如來と等し、唯し本熏力をもて、自然に修行して眞如を増長し、能く無明を滅するが故に、本の如し、「二つには已相應、謂く、法身の菩薩は、無分別の心が諸佛の智用と相應することを得て、唯し法力に依て自然に修行して眞如

(二) 論廿五丁左裏  
快鈔廿五丁右

を熏習し無明を滅するが故に」といふが故に。  
(三) すでに分割散說門を説きつ、次に盡不盡別門を説かん、此の門は何の義を明さんとかする、一切の妄法は道理に非ざるが故に無始有始なり、一切の淨法は道理に契ふが故に有始無始なることを顯示せんと欲ふがための故に、復次に眞妄の二法は極めて相違するが故に、俱行せざることを顯示せんと欲ふがための故に、復次に眞妄の二法は勝劣あること無し、其體相等しくして廣狹あること無く、その作業同なることを顯示せんと欲ふがための故に、本の如し、「復次に染法は無始よりこのかた熏習して斷せず、乃し佛を得るに至つて後ち則ち斷あり、淨法熏習は則ち斷あること無し未來を盡くす、此の義云何ぞ、眞如の法常に熏習するを以ての故に、妄心則ち滅して法身顯現し、用熏習を起すが故に斷あること無し」といふが故に。

### 國譯釋摩訶衍論卷第五 終

# 國譯釋摩訶衍論卷第六

龍樹菩薩の造

疏第四卷四十二丁左記第五卷三十丁  
左記第五卷三十丁左記第五卷三十丁  
丁左記第五卷三十丁左記第五卷三十丁  
丁左記第五卷三十丁左記第五卷三十丁  
丁左記第五卷三十丁左記第五卷三十丁  
丁左記第五卷三十丁左記第五卷三十丁  
丁左記第五卷三十丁左記第五卷三十丁  
丁左記第五卷三十丁左記第五卷三十丁

上よりこのかたは、染淨の諸法の、相熏相生して斷絶せざる義の決擇分已んぬ、此れより已下は、分明に生滅門の中の三種の大義を顯示す、本に曰く。

「復次に眞如自體と相とは、一切の凡夫と、聲聞と、緣覺と、菩薩と、諸佛とに増減あること無し、前際の生にも非ず後際の滅にも非ず、畢竟常恒なり、本よりこのかた、性として自ら一切の功德を満足せり、所謂る、自體に大智惠光明の義あるが故に、遍照法界の義の故に、眞實識知の義の故に、自性清淨心の義の故に、常樂我淨の義の故に、清凉不變自在の義の故に、是くの如くの過於恒沙の不離・不斷・不異・不思議の佛法を具足し、乃至満足して少たる所あること無きが故に、名けて如來藏とし、亦如來法身と名く。問て曰く、上に「眞如は其體平等にして一切の相を離れたり」と説きつ、

起る無きはとせり心性  
下解は釋に起る  
唐本に依れるか  
胡蝶綴十丁左表  
參照

云何が復體に是くの如くの種々の功德ありと説くや、答て曰く、實に此の諸の功德の義ありと雖、而も差別の相無く、等同一味にして唯し一眞如なり、此の義云何ぞ、無分別、分別の相を離るを以ての故に、是の故に無二なり。復何の義を以て差別を説くことを得るや、依と業と識とを以て生滅の相を示す、此れ云何が示すや、一切の法は、本よりこのかた唯心にして、實には念無し、而も妄心あつて覺せず、念を起して諸の境界を見るを以ての故に無明と説く、(一)心性起らざるは即ち是れ大智惠光明の義なるが故に、若し心見を起せば則ち不見の相あり、心性見を離れぬれば、即ち是れ遍照法界の義なるが故に、若し心動あれば眞の識知に非ず、自性あること無し、常に非ず、樂に非ず、我に非ず、淨に非ず、熱惱衰變して則ち自在ならず、乃至具さに過恒沙等の妄染の義あり、此の義に對するが故に、心性動無ければ則ち過恒沙等の諸の淨功德の相の義示現することあり、若し心起することあつて、更に前の法を見て念すべき者は則ち少たる所あり、是くの如くの淨法の無量の功德は、即ち是れ一心にして更らに念する所無し、是の故に満足するを名けて法身如來の藏とす。復次に眞如用とは、所謂る、諸佛如來は本因地に在して大慈悲を起し、諸波羅

(一) 唐本には未來  
世あり。

二五〇

蜜を修し、衆生を攝化して、大誓願を立て、盡く等く衆生界を度脱せんと欲して、亦劫數を限らず、(二) 未來を盡すまで一切衆生を取ること己身の如くなるを以ての故に、而も亦衆生の相を取らず、此れ何の義を以てぞ、謂く、實の如く一切衆生と及び己身と眞如平等なりと知ればなり、是くの如くの大方便智あるを以ての故に、無明を除滅し、本法身を見、自然に不思議の業、種々の用あり、即ち眞如と等しく一切處に遍せり、又亦用相の得べきことあること無し、何を以ての故に、謂く諸佛如來は唯し是れ法身なり、智相の身なり、第一義諦にして世諦の境界あること無し、施作を離れたり、但し衆生の見聞に隨つて益を得るが故に説いて用とす、此の用に二種あり、云何が二つとする、一つには分別事識に依る凡夫と、二乗の心の所見をば名けて應身とす、轉識より現すと知らざるを以ての故に、外より來ると見て、色の分齊を取つて、盡く知ること能はざるが故に、二つには業識に依る、謂く、諸菩薩は初發意より乃し菩薩究竟地に至るまで、心の所見をば名けて報身とす、身に無量の色あり、色に無量の相あり、相に無量の好あり、所住の依果にも亦無量種々の莊嚴あり、示現する所に隨つて即ち邊あること無し、窮盡すべからず、分齊の相を離れ

(一) 異本には報身とす。  
(二) 異本には應身とせり。

たり、その所應に隨つて常に能く住持して毀せず失せず、是くの如くの功德は、皆諸波羅蜜等の無漏の行熏と及び不思議熏との成就する所なるに因つて、無量の樂相を具足す、故に説いて(一) 報とす。又凡夫の所見は是れその麁色なり、六道の各見不同なるに隨つて、種々の異類にして受樂の相に非ざるが故に、説いて(二) 應とす。復次に初發意の菩薩の所見は、深く眞如の法を樂信するを以ての故に、少分而も彼の色相莊嚴等の事は、來無く去無く分齊を離れて、唯し心に依つて現す、眞如を離れずと見知す、然れども此の菩薩は、猶し自ら分別して未だ法身の位に入らざるを以ての故に、若し淨心を得れば、所見は微妙にしてその用轉勝せり、乃し菩薩地盡に至るまで之を見ること究竟せり、若し業識を離るれば、則ち見相無し、諸佛の法身は、彼此の色相、迭に相見ることあること無きを以ての故に。問て曰く、若し諸佛の法身は色相を離れたりといはば、云何ぞ能く色相を現せん、答へて曰く、即ち此の法身は、是れ色の體なるが故に能く色を現す、所謂る、本よりこのかた、色心不二なり、色性即ち智なるを以ての故に、色體に形無ければ説いて智身と名く、智性即ち色なるを以ての故に、説いて法身と名く、一切處に遍して現する所の色は分齊

あること無し、心に随つて能く十方世界の無量の菩薩と、無量の報身と、無量の莊嚴と、各々差別にして皆分齊あること無く、相妨せざることを示す、此れは心識の分別の能く知るに非ず、真如自在の用の義なるを以ての故に。』

論じて曰く、此の文の中に自ら三門あり、云何が三つとする、一つには顯示自體大義門、二つには顯示義相大義門、三つには顯示自用大義門なり、初の大義の中に即ち二門あり、云何が二つとする、一つには人平等門、二つには時不轉門なり、是を名けて二とす、中の大義の中に即ち三門あり、云何が三つとする、一つには圓滿功德門、二つには問答決疑門、三つには別釋廣說門なり、是を名けて三とす、後の大義の中に自ら六門あり、云何が六つとする、一つには本願無盡門、二つには離相不着門、三つには能所平等門、四つには無相現應門、五つには隨見龜細門、六つには問答決疑門なり、是を名けて六つとす、今當さに釋を作して、その次第の如く分明に散說すべし、大聰明の審かに思擇すべし、「復次に真如自體と相」とは、即ち是れ惣じて體相の二義を標す、(一)是れより已下は別釋散說なり、初めに體大を說かん、云何が名けて人平等門とする、謂く、真如の自體は、五人に通じて平等平等にして差別無きが故に、云何が名

(一)一切以下の本論の文を指す。

(一)一自ら一を成  
じさは、五數に對  
する故に一の名を  
得、同自ら同を作  
すは、人異に對す  
(二)異を厭ひ別を  
捨て、とは疏には  
凡小の異を厭ひ因  
果の別を捨つるの  
意とせり。

(三)論五丁右裏、  
快抄二丁下初丁。  
(四)唐本には眞體  
を眞如とし、圓滿  
を圓有とせり。

けて五種の假人とする、一つには凡夫、二つには聲聞、三つには緣覺、四つには菩薩、五つには如來、是を名けて五とす、是くの如くの五名、人は自ら是れ五つなれども眞は自ら唯一なり、所以いかなとなれば、真如の自體は、増減あること無く、亦大小無く、亦有無なく、亦中邊無く、亦去來無し、本よりこのかた(一)一自ら一を成じ、同自ら同を作し、(二)異を厭ひ別を捨て、唯し一眞なるが故に、是の故に諸法眞如一相なり、三昧契經の中には是くの如くの說を作す、譬へば金剛をもて五趣の像を作るが如し、五人の平等も亦復是くの如し、諸人の中に於て増減あること無きが故に、本の如し、「一切の凡夫と、聲聞と、緣覺と、菩薩と、諸佛とに増減あること無し」といふが故に、云何が名けて時不轉門とする、謂く、真如の自體は自然常住決定不變にして、三際にも動せず、四相にも遷らず、寂滅の又寂滅なり、眞實の又眞實なるが故に、本の如し、「前際の生にも非ず、後際の滅にも非ず、畢竟常恒なり」といふが故に、

(三)すでに顯示自體大義門を説きつ、次に顯示自相大義門を說かん、圓滿功德門とはその相いかな、謂く(四)眞體の中には、一切の功德を圓滿して少けたる所無きが故に、何等の功德ぞ、所謂る、六種性義の功德なり、云何が六つとする、一つには大智慧光明の

(一) 契經 一道清淨經なり。

二五四

(二) 契經 因緣無主經なり。  
(三) 契經 具足性德經なり。

(四) 契經 甚深如來藏經なり。

(五) 四障 慧行は變易の四種生死とし普觀は無常無我若不淨すとす。  
(六) 四種の自然の德、常樂我淨なり。  
(七) 契經 大寶無盡經なり。  
(八) 第三重第七卷 清淨不變參照。  
(九) 南北 鏡の表裏なり。  
(一〇) 契經 通達法門經なり。  
(一一) 以下に述ぶる十七義二十五義は六義を開きしものなり。

義、本覺の般若は、能く無明の闇夜を除くが故に、(一) 契經の中に於ては、廣大圓滿殊勝般若實智光明性義と名く、二つは遍照法界の義、本覺の般若は、一法界の源を照達するが故に、(二) 契經の中に於ては、周遍通達一法界藏自然性義と名く、三つには眞實識知の義、本覺の般若は、虛假の解量を遠離するが故に、(三) 契經の中に於ては、離妄想解決了知實際實性義と名く、四つには自性清淨心の義、本覺の般若は、無量の性功德、自然本有にして他力を得るに非ず、塵累を遠離して中實に契ふが故に、(四) 契經の中に於ては、本有明白離邊中々性義と名く、五つには常樂我淨の義、本始の二覺は、無始よりこのかた、(五) 四障を遠離して(六) 四種の自然の德を圓滿するが故に、(七) 契經の中に於ては、如來正覺自然德遠離炎幻不修行性義と名く、六つには(八) 清涼不變自在の義、二種の本覺は、譬へば明鏡の(九) 南北の相の隨違を具するが如くなるが故に、(一〇) 契經の中に於ては、具足隨順逆違無礙陀羅尼全遍性義と名く、是を名けて六とす、本の如し、「本よりこのかた、性として自ら一切の功德を満足せり、所謂る、自體に大智恵光明の義あるが故に、遍照法界の義の故に、眞實識知の義の故に、自性清淨心の義の故に、常樂我淨の義の故に、清涼不變自在の義の故に」といふが故に(一一) 廣大圓滿自性

(一) 初の二つ六義の中の第一と第二なり。

(二) 最後の六義の中の第六なり  
(三) 三數 六と十七と廿五なり  
(四) 本數 六種性義を指す。

本德契經の中は是くの如くの説を作す、自性の功德の本數の名に十七ありとは(一) 初の二つの中に於て、各二種を開き、次の二の中に於て各三種を開き、後の二つの中に於て、その次第の如く、四と三とを開くが故に、復次に清淨心地無垢陀羅尼契經の中に是くの如くの説を作す、自性の功德の本數の名に二十五ありとは、(二) 最後の二つの中に十一を開くが故に、是くの如くの(三) 三數の別相いかん、馬鳴菩薩の摩訶衍論の(四) 本數の名字は、名略義廣の惣持の相を顯示せんと欲ふがための故に、是の故に散を攝して惣立して六つとす、復次に所依の別本を惣持して説くが故に、復次に名字、數多ければ眞實に迷ふが故に、此の義を以ての故に惣立して六つとす、十七と言ふは、名字いかんぞ、一つは大智恵の義、二つは大光明の義、三つは遍一法界の義、四つには照一法界の義、五つには眞實の義、六つには識の義、七つには知の義、八つには自性の義、九つには清淨の義、十には心の義、十一には常の義、十二には樂の義、十三には我の義、十四には淨の義、十五には不の義、十六には變の義、十七には自在の義なり、是れを十七と名く、二十五とは名字いかんぞ、所謂る、前の數の「不」の功德の中に八種を開くが故に、「變」の功德の中に二種を開くが故に、二變と言ふは、一つには上流轉



變、二つには下流轉變なり、八不と言ふは、中觀論の中に分明に説くが如し。すでに有名數量功德分を説きつ、次に無名過量功德分を説かん、本覺の體の中の自性の功德は、無量無邊にして、言量を離れ心行を過ぎたり、何の義を以ての故にか數量を止めず、是くの如くの割を作すや、本有の功德は、量ることあること無しと雖三數に出せず、故に本を擧ぐるなり、本の如し、「是くの如くの過於恒沙の(不離以下の釋は次に見ゆ)具足し」といふが故に、是くの如くの無量無邊の功德は、各各に別々に體相ありや、唯一心量にして別の法體無く、唯一心量にして終に心を離れず、所以いかんとなれば、心法は一なりと雖、而も二種の陀羅尼自在の用あるが故に、云何が二つとする、一つには自不離彼陀羅尼自在、二つには彼不離自陀羅尼自在なり、是を名けて二つとす、本の如し、「不離」といふが故に、是くの如くの性徳は、無始よりこのかた、一向妙有にして除遣の法に非ず、所以いかんとなれば、自性々々にして他と俱なるに非ざるが故に、本の如し、「不斷」といふが故に、是くの如くの一切の功德は唯一なれば、自が一と作る、終に異ならば自は一と作ること能はじ、所以いかんとなれば、一法界の故に、本の如し、「不異」といふが故に、是くの如くの深理は、一切の菩薩と、一切の二乗と、一切の

三人 菩薩と  
二乘と凡夫となり

具縛地 邪定  
無上大覺智  
佛果なり

論七丁左裏、  
開解二十二丁右、  
(廿五卷)快鈔三日

當論第二卷所  
明の眞如廣説分を  
指す。

凡夫は、心にも思惟せられず、言にも論量せられず、絶の又絶、遠の又遠なり、本の如し、「不思議」といふが故に。三人の境に非ず、當さに何れの人の言思の境界ぞや、唯し大覺者のみ乃自ら軌則とし玉ふ、本の如し、「佛法」といふが故に。是くの如くの無量の性の功德は、具縛地より、乃し無上大覺智地に至るまで、具足し圓滿して少闕する所無し。所以いかんとなれば、是の如くの諸徳は、無始よりこのかた、自然本有にして、縁力を假つて而も建立するに非ざるが故に、本の如し、「乃至満足して少たる所あること無きが故に、名けて如來藏とし、亦如來法身と名く」といふが故に。すでに圓滿功德門を説きつ、次に問答決疑門を説かん、此の門の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには發起略問難達門、二つには發起廣答解釋門なり、問者の難意その相いかん、謂く、説文の相違と前後の雜亂とを擧げて、その理を審さにするが故に。前後の文いかんが相違するや、所謂る、眞如決擇分の中に是くの如くの説を作す、「心眞如とは、即ち是れ一法界大惣相法門體なり、所謂る、心性は不生不滅なり、一切の諸法は唯し妄念に依つて而も差別あり、若し心念を離れぬれば則ち一切境界の相無し、是の故に一切の法は、本よりこのかた、言説の相を離れ、名字の相

(二) 當段所明を出して違文を擧げたるなり。

(三) 第三重第八卷發起廣答參照。

を離れ、心縁の相を離れて、畢竟平等にして變異あること無し、破壊すべからず、唯し是れ一心なり、故に真如と名く」と。(二) 自相大義決擇分の中に是くの如くの説を作す「本よりこのかた、性自ら一切の功徳を満足せり、所謂る、自體に大智慧光明の義あるが故に、遍照法界の義の故に、眞實識知の義の故に、自性清淨心の義の故に、常樂我淨の義の故に、清涼不變自在の義の故に、是くの如くの過於恒沙の不離不斷不異不思議の佛法を具足し、乃至満足して少たる所の義あること無し、故に如來藏と名く、亦是は如來法身と名く」と。是くの如く相違するが故に以て難とす、本の如し、「問て曰く上に真如は其體平等にして一切の相を離れたりと説きつ、云何が復、體に是くの如くの種々の功徳ありと説くや」といふが故に。すでに發起略問難違門を説きつ、次に(三) 發起廣答解釋門を説かん、此の門の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには是惣、二つには是別なり、惣門の中に於て即ち二種あり、云何が二つとする、一つには真如惣、二つには生滅惣なり、その次第の如く説相見つべし。「答て曰く、實に此の諸の功徳の義ありと雖、而も差別の相無く、等同一味にして一真如なり」とは、即ち是れ真如惣なり、謂く自相大義門の中に是くの如くの説を作して、種々の徳を具して過於恒沙

(二) 此の義云何ぞ以下の本論の文を指す。

(三) 復何の義を以て以下の本論の文を指す。

(三) 二重 略さ廣との二重なり。

(四) 異門 眞如なり。  
(五) 異門 生滅なり。  
(六) 依と業と以下の本論の文を指す。

といふと雖、而も是れ生滅門の界量なり、眞如門には非ず。眞如門の中には差別の相無く、平等平等一相一味にして、獨り眞如の淨法界をのみ存すが故に。此の義を以ての故に相違の過無し。(二) 此れより已下は、その緣由を作して疑惑を決斷す。「無分別、分別の相を離るゝを以ての故に、是の故に無二なり」とは、眞如門の中には、唯し同同のみあつて異異無きが故に。(三) 此れより已下は生滅惣を釋す、此の文の中に於て即ち二種あり、云何が二つとする、一つには是問、二つには是答なり、廣説あるが故に、(四) 二重の問答不同なること知るべし、初重の問答その相いかん、「復何の義を以て、差別を説くことを得るや」とは、即ち是れ開問なり。謂く、若し諸法は、本よりこのかた平等平等一味一相にして、獨り眞理を存して二體無しといはば、復何れの法の而も非平等なるあつてか、之を以て依となして差別を建立せんと。即ち是れ(五) 異門を擧げて(六) 異門を疑ふ。(七) 此れより已下は、答説を發起して此の疑を決斷す、文相見つべし。「依と業と識とを以て生滅の相を示す」とは、即ち是れ惣答なり、謂く眞如門の中には、過恒沙の一切の染法の、以て所治とする無く、能治の過於恒沙の一切の淨法の、以て對量とする無し、是の故に眞如門の中に、是くの如くの説を作して「一切の諸法

は平等平等一味一相にして二體あること無し」等といふなり、而も此の生滅門の中には、所治の染法無量無邊なれば、能治の淨法も亦無量無邊なり、是の故に生滅門の中に是くの如くの説を作して、「本覺の體の中に、種々の徳を具して、無量無邊にして恒沙に過ぎたり」等といふなり、即ち是れ大意なり。次に當きに釋を作して別々に散説すべし、言ふ所の「依」とは即ち是れ根本無明住地なり、一切染法の所依なるが故に、言ふ所の「業」とは即ち是れ業相なり、言ふ所の「識」とは轉等の諸識なり、「生滅の相とは門の惣稱なり、言ふ所の「示す」とは相返して顯示す、此の中の「以て」の字は遠流して三字に至るべし、是くの如くの三法は、功徳の起する當きに緣由なるべきが故に、(一)すでに略説門を説きつ、次に廣説分を説かん、此の分の中に就て即ち二種あり、云何が二つとする、一つには是問、二つには是答なり、此の中には、問は略し答は廣なること知んぬべし、「此れ云何が示すや」とは、即ち是れ詰問なり、所謂る、その所由を詰問するが故に、此れより已下は、直に此の問を答す、此の答釋の中に即ち三種あり、云何が三つとする、一つには自宗正理、二つには非道邪行、三つには具擧對量なり、是れを名けて三つとす、その次第の如く説相觀つべし、「一切の法は、本より

(一)論九丁左裏、開解第廿六卷初丁(十五册の内)快鈔四丁下初丁。

(一)本末二根本無明なるが故に(二)上にあるが故に(三)爾が(四)心性以下の本論の文を指す(五)六相大智慧光明等の六種性義なり

(四)第二の徳遍照法界の義を指す(五)達異本には違せり。

このかた唯心にして、實には念無し」とは、即ち是れ第一の自宗正理なり、所謂る、法性は無始よりこのかた、唯し是れ一心にして一々の法として、而も心に非ざること無きが故に、「而も妄心あつて覺せず、念を起して諸の境界を見る(を以ての)故に無明と説く」とは、即ち是れ第二の非道邪行なり、所謂る、惣じて(一)本と上との諸の無明住地を擧ぐるが故に、(二)此れより已下は、直に具擧對量の差別を顯はす、如上所説の本覺の體の中の(三)六相の功徳は、各各に何等の過患に待觀してか、之を以て對として建立し顯示するや、所謂る、根本無明は、一心の海を熏習して、業等の種々の諸識を發起し、般若實智の明を隱覆して、愚癡迷亂の暗を増長す、即ち是れ不覺無明の界量なれば、明之を以て對とす、一心の性は寂滅にして起無きは、即ち是れ本覺惠明の安立の徳なるが故に、建立し、顯示す、本の如し、「心性起る無きは即ち是れ大智慧光明の義なるが故に」といふが故に。此れより已下は、(四)第二の徳を顯はす、文相見つべし、是くの如く妄心、見を起して境に(五)達するは、一向に唯し虛妄の境の中に轉じて、眞實の境界に通達すること能はず、所以いかんとなれば、眞と偽と相違して契當せざるが故に、本の如し、「若し心、見を起せば則ち不見の相あり」といふが故に、此れより已下は遍觀の義を

(二) 第三の徳 眞實知識の義を指す

(三) 第四の徳 自性清淨心の義を指す

(四) 第五の徳 常樂我淨の義を指す

(五) 三種の苦 苦々壞苦行苦の三種

(六) 二種の自在 鈔は身心の二種とし記は身心の二種ともせり

明かす、而して眞實の心は、轉見を離れたるが故に諸法を通達して至らざる所無く、當らざる所無く、盡さざる所無し、所以いかにとなれば、眞實智の見は、能見所見の邊見を離れたるが故に。本の如し、「心性、見を離れぬれば、即ち是れ遍照法界の義なるが故に」といふが故に。此れより已下は、(三) 第三の徳を明かす、所謂る、若し心に動轉の相あるは、即ち是れ無明熏習の氣なるが故に、虛妄の轉なるは明之を以て對とす、心性寂靜にして喧動あること無く、正直にして顛倒の解あること無きは、即ち是れ實智の照なり、道理に隨順して倒無きをもて建立し顯示す、本の如し、「若し心、動あれば眞の識知に非ず」といふが故に。此れより已下は、(四) 第四の徳を顯はす、所謂る、妄法は無始よりこのかた、自體無ければ、明之を以て對とし、自性清淨の本有の功徳を建立し顯示す、本の如し、「自性あること無し」といふが故に。此れより已下は、(五) 第五の徳を顯はす、所謂る、妄法は四相に遷さるゝが故に「常」に非ず、(六) 三種の苦と俱に轉するが故に「樂」に非ず、(七) 二種の自在無きが故に「我」に非ず、一道清淨無きが故に、「淨」に非ず、此の四種の過を以て對量として、本覺體の中の四種の功徳建立し顯示す、本の如し、「常に非ず、樂に非ず、我に非ず、淨に非ず」といふが故に。此れより

(一) 第六の徳 清涼不變自在の義を指す

(二) 變壞 慧行所覽の本には變壞ありしが如し(鈔の六丁右)

(三) 論十一丁左裏 快鈔五丁下初丁

(四) 結縛 具縛と同一、但し文段によりてその義異なるも今茲に結縛とあるは廣く金剛已還の一切衆生に通ず(快鈔三丁右)

已下は、(一) 第六の徳を顯はす、所謂る、妄法は眞心を燒く故に、是の故に「熱」と名く、又是れ諸の衆生を惱亂するを以ての故に、是の故に「惱」と名く、(二) 變壞を破滅して作さしむるが故に、是の故に「衰變なり、此の事に由るが故に 一切衆生は自在なるを得ず、是の故に亦名けて「自在ならず」とす、此の事に待觀して以て對とするが故に、清涼不變自在の徳建立し顯示す、本の如し、「熱惱衰變して則ち不自在ならず」といふが故に。(三) 此れより已下は、無邊の功徳の相の義を顯示す、所謂る、若し所對治の染法無量無數なれば、能治の淨法も亦無量無邊なるを以ての故に、本の如し、「乃至具さに過恒沙等の妄染の義あり、此の義に對するが故に、心性動無ければ則ち過恒沙等の諸の淨功徳の相の義示現することあり」といふが故に、此れより已下は、圓滿の徳を結す、所謂る若し一心の法に動轉の相あつて、更らに前の境を見て縁すべきことあらば、「能見の心と所見の境との二つの差別あるが故に、本覺の功徳則ち圓滿せじ、而も本性の徳は恒沙に過ぎたりと雖、唯一心量にして終に二體無し、所以いかにとなれば、是くの如くの諸徳は、悉く皆各々にその體を分たず、一法界に於てその量等しきが故に、是の故に圓滿自性の功徳は、(四) 結縛、解脱の二位の中に、常恒に具足する

を名けて法身とし如來藏と名く、本の如し、「若し心起することあつて、更らに前の法を見て念すべき者は則ち少けたる所あり、是くの如くの淨法の無量の功德は、即ち是れ一心にして更らに念する所無し、是の故に満足するを名けて、法身如來の藏とす」といふが故に。染淨の數量の平等の決擇は、何れの契經に依てか解釋せらるゝや、所謂る、文殊師利善巧方便相似譬喻大陀羅尼經なり、彼の契經の中に如何が説くや。謂く彼の經の中には是くの如くの説を作す、余の時に文殊師利、佛の神力を承けて、即ち(一)唵陀南の頌を説いて曰く、(二)譬へば阿只多遮那尸帝樹の、その菓は多きこと無數にして、表と實とに十等あるが故に、染と淨との數量の等しきことも、亦是くの如く知るべし、行者此の喩へに依つて、眞と妄との理を了すべしと。今此の經文は、何の義を明さんとかする、假は當さに實を待ち、眞は定めて妄に頼るべし、獨孤自立の法あること無きことを顯示せんと欲ふがための故に。言ふ所の「表」とは何れの法にか喩ふる、謂く、妄法に喩ふ、妄は假にして實無きこと菓の外ゴノほかの如くなるが故に、言ふ所の「實」とは何れの法にか喩ふ、謂く眞法に喩ふ、眞は實にして假無きこと菓の中の如くなるが故に、云何が名けて十種の等とするや、一つには數等なり、表と實と契當してそ

Uddāna  
(一) 嚩吒南 攝頌  
(二) 阿只多遮那尸  
帝樹 無邊一從樹  
と譯す

(一) 嗽食 開解等  
多くは塵食とせる  
は非なり

(三) 論十三丁右  
表、疏第五卷初丁、  
開解十一丁左(廿  
六卷)快鈔六日下  
(卅五册)  
(二) 僧那 阿世耶  
Asiyah  
Sambhah  
sambadha  
僧那は僧那僧涅陀  
の略、私誓、大誓、  
譯す、快鈔は誓願  
の譯を用ゆ又被願  
とも譯す是れ四弘  
誓等を鏡に喩へし  
による。阿世耶は  
音樂と譯す。

の數等しきが故に、二つには塵等なり、表と實と細末してその數量を配するに等しふして差無きが故に、三つには量等なり、表と實と稱量するに、終に差別無くして輕重等しきが故に、四つには色等なり、表と實と校量するに同じく白色なるが故に、五つには香等なり、表と實と熏することその香等しきが故に、六つには味等、表と實とを(一)嗽食するに差別無きが故に、七つには觸等なり、表と實と身に觸るゝに別無きが故に、八つには本等なり、表實同じく樹木に依つて出づるが故に、九つには俱等なり、表と實と一時にして前後無きが故に、十には同等なり、表と實と終に一味なるが故に、是を十等と名く、喩を擧げて法に合すことは、説相明かなるが故に重釋を須ゐず。復次に、若し鈍根の者は、此の事に達せず、功德黑暗の譬喩に依つて「等」の意を知るべし。(一)すでに顯示自相大義門を説きつ、次に顯示自用大義門を説かん、此の中に六門あり、その次第の如く審かに觀察すべし、本願無盡門と言ふは、清淨(三)僧那阿世耶廣大圓滿にして邊際無きが故に、謂く、諸の如來は、無量無邊不可思議不可稱量微塵劫の中に於いて、十方世界の微塵數量の大慈悲心海を興し、十方世界の微塵數量の大圓滿因海を修し、十方世界の微塵數量の一切衆生海を攝し、十方世界の微塵數量の廣大の誓願海

(二) 實々と假々の  
二理。實は自性、  
假は受用、假は  
よれば、實は假に  
次は變化して、假  
は流にして、假は  
等流にして、假は  
なり。四身所證の理  
なり。四身所證の理  
下九丁右以下參  
照。

を立て、十方世界の微塵數量の自在果海を成じ玉ふが故に、所以いかんとなれば、  
實の如く同一無異相續の義を知るを以ての故に、本の如し、「復次に眞如用とは、所謂る  
諸佛如來は、本因地に在して大慈悲を起し、諸波羅蜜を修し、衆生を攝化して、大誓  
願を立て、盡く等しく衆生界を度脱せんと欲して、亦切數を限らず、未來を盡くすま  
で、一切衆生を取ることを己身の如くなるを以ての故に」といふが故に。すでに本願無  
盡門を説きつ、次に離相不著門を説かん。離相不著門と言ふは、所作の中に於て所作  
を遠離して著を生ぜざるが故に、謂く、諸の如來は、無量無邊の大悲を發して、一切  
恒沙の衆生を攝化し玉ふと雖、而も諸の如來一々佛として、而も生を攝し玉ふこと無き  
が故に、所以いかんとなれば、實の如く一切衆生と及び自身とは、唯一眞如、唯一法身に  
して、増減あること無く差別無しと了知し玉ふが故に、本の如し、「而も亦衆生の相を  
取らず、此れ何の義を以てぞ、謂く實の如く一切衆生と及び己身と眞如平等なりと  
知ればなり」といふが故に。すでに離相不著門を説きつ、次に能所平等門を説かん、  
能所平等門と言ふは、人法體用理智平等にして差別無きが故に、謂く、法身と應と化  
との三身及び(一)實々と假々と(二)理と、平等一體にして差別無きが故に、自性の本

(三) 甚深  
釋論及び胡蝶  
は甚染とせり非  
なり。

(三) 此文の釋異  
なり。快抄十一丁右  
以下參照。異本  
(四) 非觀偽法  
唐本には非觀偽法  
あり。唐本に  
(四) 明法  
は法の字無し。唐本に  
は法の字無し。唐本に  
師と學者の不同あ  
り。且らく通法の  
無明、同は明、異は  
法に、同は明、異は  
法に、同は明、異は  
法に、同は明、異は  
法に、同は明、異は

身と、及び枝末の身と、平等一體にして差別無きが故に、能證の正智と所證の如理と、平  
等一體にして差別無きが故に、一體を以ての故に一體あること無し、二體無きが故に亦  
一體無し、二も無し一も無ければ亦無も無し、此の義を以ての故に、自然本性に功德  
を具足して他力を假らず、(一)甚深極妙契經の中に是くの如くの説を作す、余の時に文  
殊師利、即ち佛に白して言さく、云何が名けて異異異相とし、云何が名けて同同同相と  
するや、佛の言はく、言ふ所の異異異相とは、即ち是れ無明なり、言ふ所の同同同相と  
は、即ち是れ明法なり、是くの如くの二法は、牛の兩角の如し、對治の相にして、(二)  
消融の體の兩つの空絶せるが如くには非ず、是の故に此の二法を名けて(三)非觀偽とす、  
こゝに於て文殊師利、佛の神力を承けて、即ち座より起て佛に白して言さく、世尊よ、  
云何が名けて非觀偽の法とする、その相説く可しや説くべからざるや、何を以てか門  
として覺知すべきやと。爾の時に世尊、即ち文殊師利に告げて言はく、我れ諸の一切  
契經海中に是くの説を作す、異とは無明にして、同とは(四)明法なり、愚癡の凡夫を度  
脱せんと欲ふがために權りに此の説を作す、而も今日、汝がために眞實を言説せん、  
文殊師利よ、言ふ所の非觀偽法とは、(五)異を同じて同に歸し、同を同じて空に歸し、

(一) 論十四丁左裏、快鈔七丁初

(二) 阿々を作すが故に自然作に於て自然なるを云ふ二の阿は法身智身に通ず(快鈔五丁右第三義)上の自は法身、下の自は智身なり。他受變化なり。  
(三) 關る 開解等は關を開とせり非なり。  
(四) 第三重第八卷智身色相參照。  
(五) 勘注六之二、(第十七卷)

空を空じて絶に歸す、乃至廣説の故に、本の如し、「是くの如くの大方便智あるを以ての故に、無明を除滅し、本法身を見、自然に不思議の業、種々の用あり、即ち眞如と等しく一切處に通せり」といふが故に、(一)すでに能所平等門を説きつ、次に無相現應門を説かん、無相現應門とは、自性身の體は空寂にして像無けれども、能く諸像を現すること、譬へば兎角の自體は空無なれども、善能一切の角を出生するが故に、謂く、法身の佛は唯し是れ一々なり、唯し是れ寂々なり、亦一々に非ず、亦寂々に非ず、心行處滅し言語道斷せり、滅を滅し斷を斷じて、唯し(二)阿阿を作すが故に、所以いかなとなれば、諸佛如來は唯し(三)自自の身にして(四)他身無きが故に、而も諸の衆生見聞して益を得るは、自の心量の中に利益を獲得するなり、法身の體の中には(五)關ることあること無きが故に、本の如し、「又亦用相の得べきことあること無し、何を以ての故に、謂く、諸佛如來は唯し是れ法身なり、智相の身なり(六)第一義諦にして世諦の境界あること無し、施作を離れたり、但し衆生の見聞に隨つて益を得るが故に説いて用とす」といふが故に、(七)すでに無相現應門を説きつ、次に隨見龜細門を説かん、此の門の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには應身用相差別門、二つには報身用相差別門

(一) 初門 應身章なり。

(二) 第三重第七卷應化常住同第八應化心法參照。

(三) 次の門 報身章を指す。  
(四) 解 唐本には十解あり、第三重第八卷賢位見佛參照。  
(五) 釋決第七卷、應身周遍參照。

(六) 是くの如く以下の本論を指す。

なり、(一)初門いかに、所謂る、一切の凡夫と二乗とは、一切の諸法は唯一心の量なりといふところの甚深の宗を了達すること能はざるが故に、遍分別忘想事識に依つて應化身を見、外の量解を作す、分界あること無しと通達すること能はずして分々に轉するが故に、本の如し、「此の用に二種あり、云何が二つとする、一つには分別事識に依る凡夫と二乗の心の所見をば、名けて應身とす、轉識より現すと知らざるを以ての故に、外より來ると見て、色の分齊を取つて、盡く知ること能はざるが故に」といふが故に、(二)次の門いかに、所謂る、(三)解より乃し金剛に至るまで、一切の菩薩は明了に、一切の諸法は一切の諸法は唯一心量なりといふところの、甚深の宗を通達するが故に、(四)彼の業識に依つて報身の佛を見、唯識の解を作す、依と正と分際無しと通達するが故に、本の如し、「二つには業識に依る、謂く、諸菩薩は、初發意より乃し菩薩究竟地に至るまで、心の所見をば名けて報身とす、身に無量の色あり、色に無量の相あり、相に無量の好あり、所住の依果にも亦無量種々の莊嚴あり、示現する所に隨つて即ち邊あること無し、窮盡すべからず、分齊の相を離れたり、その所應に隨つて常に能く住持して毀せず失せず」といふが故に、(五)此れより已下は報應の差別の相を顯示す、

言ふところの「報」とは、勝妙の因を具し、極樂の果を受けて、自由自在決定安樂にして、苦相を遠離するが故に、名けて報とす、本の如し、「是くの如くの功德は、皆諸波羅蜜等の無漏の行熏と及び不思議熏との成就する所なるに因つて、無量の樂相を具足す、故に説いて報とす」といふが故に、言ふ所の「應」とは、機根に隨順して而も相違せず、時に隨ひ、處に隨ひ、趣に隨ひ、出現して安樂の相に非ざるが故に、名けて應とす、本の如し、「又凡夫の所見は、是れその龜色なり、六道の各見不同なるに隨つて、種々異類にして受樂の相に非ざるが故に、説いて應とす」といふが故に。此れより已下は、更らに重釋を作して前の所説を明かす、所謂る、位々各々に佛を見ること増減別なるが故に、この義いかん、若し三賢位の諸の菩薩は、眞如を信するが故に、分に報身を見て、色相の無分際ぶんげいの量を觀知すれども、而もこの菩薩は、分別の心を離脱すること能はず、所以いかんとなれば、未だ眞如の位に入ることを得ざるを以ての故に、本の如し、「復次に初發意の菩薩の所見は、深く眞如の法を樂信するを以ての故に、少分而も彼の色相莊嚴の事は、來無く去無く、分齊を離れて、唯し心に依つて現す、眞如を離れずと見知す、然れども此の菩薩は、猶し自ら分別して未だ法身の位に

(二)論十六丁右裏  
開解廿七卷初丁、  
快鈔十三丁左(七  
日下)

入らざるを以ての故に」といふが故に。若し十地を得る諸の菩薩は、その次第の如く轉勝し究竟す、本の如し、「若し淨心を得れば、所見は微妙にしてその用轉勝せり、乃至菩薩地盡に至るまで之を見ること究竟せり」といふが故に、若し佛果の中には、業識の本種所有無きが故に、能見も所見も亦復空無なり、所以いかんとなれば、一切の諸佛は、眞如と眞如と平等平等なり、法身と法身と平等平等なり、此れも無く彼れも無く、我れも無く、他も無く、大も無く小も無く、高も無く下も無く、無も無く有も無し、戲論都て盡して慮知亦空なり唯一大空の眞如本智のみ、遮伽利婆那提衣を服し、鍵戸多陀摩宮に於て、自性身坐して、獨り存して無二なるが故に、本の如し、「若し業識を離るれば、則ち見相無し、諸佛の法身は、彼此の色相迭に相見ることある無きを以ての故に」といふが故に。何が故にか應身章の中に是くの如くの説を作して「分別事識に依つて而も彼の佛を見る」といひ、報身章の中に是くの如くの説を作して「業識に依つて而も彼の佛を見る」といふ、識の龜細に隨つて所見の佛見隨つて龜細なることを顯示せんと欲ふがための故に。すでに隨見龜細門を説きつ、次に問答決疑門を説かん、是れに於て二つあり、いかに二つとする、一つには是問、二つには是答

(一)眞如の本智  
如の本智は文點  
すべしなり。點  
遮伽利婆那提  
衣玉光耀羅衣と  
譯せり。鍵戸多陀摩  
宮安樂轉宮を譯  
せり。快樂の記す  
るところは不可な  
り。自性身疏は  
之を所住すとす  
て疏によれば、自  
性身に座してと文  
點すべきなり(五  
丁)論十七丁右  
裏、快鈔八日下初



なり、答説分の中に即ち五門あり、いかんが五つとする、一つには法身出現色相門、二つには顯示智身形相門、三つには顯示法身形相門、四つには廣大圓滿無際門、五つには、不可思議殊勝門なり、是を名けて五とす、その次第の如く説相觀つべし、問者の意樂その相いかん、所謂問者は是くの如くの疑を作す、その法身眞實の身體に尅すれば、湛々として慮絶し、寂々として名絶えたり、色相作業誰れに由つてか而も有らん、  
(一) 無相現應決擇分の中に是くの如くの説を作して「法身は無相なれども能く色相を現す」と、若し能く種々の色相を出現せば、法身は空寂にして色像の域を離れたりと、是くの如く疑ふが故にこの問を發起す、本の如し、「問て曰く、若し諸佛の法身は、色相を離れたりといはゞ、云何ぞ能く色相を現せん」といふが故に、此れより已下は即ちこの疑を決す、法身出現色相門と言ふは、自性法身は、能く色相のために所依止と作つて、善く色相を出だすに障礙無きが故に、所以いかんとなれば、能依の色法と、所依の心法とは、無始よりこのかた平等平等にして、二體あること無く唯一心量の故に、本の如し、「答へて曰く、即ち此の法身は、是れ色の體なるが故に能く色を現す、所謂る、本よりこのかた色心不二なり」といふが故に。顯示智身形相門と言ふは、智を

(一) 三相現應決擇分當卷所明なり之に就て開解六丁右參照(廿七卷)取意の文なり

以て色を攝するに、一々の色として智に非ざること無きが故に、説いて智身と名く、本の如し、「色性即ち智なるを以ての故に、色體に形も無ければ、説いて智身と名く」といふが故に。顯示法身形相門と言ふは、色を以て智を攝するに、一々の智として色に非ざること無きが故に、説いて法身と名く、本の如し、「智性即ち色なるを以ての故に、説いて法身と名く」といふが故に。廣大圓滿無際門と言ふは、是くの如くの二身所現の色相は、等しく一切衆生界と、一切非情界と、一切虚空界と、一切涅槃界と、一切如來界との中に遍じて、通せざる所無く、至らざる所無く、當らざる所無く、會せざる所無く、作らざる所無く、亦分際も無く障礙も無く、純々一々にして相亂無きが故に、本の如し、「一切處に遍じて現する所の色は分齊あること無し、心に隨つて能く十方世界の無量の菩薩と、無量の報身と、無量の莊嚴と、各々差別にして皆分齊あること無く、相妨せざることを示す」といふが故に。不可思議殊勝門と言ふは、是くの如くの業用は、甚深極妙にして獨尊殊勝なり、凡夫二乗の能く知るところに非ざるが故に、本の如し、「此れは心識の分別の能く知るに非ず、眞如自在の用の義なるを以ての故」といふが故に、是くの如くの(二) 三種の甚深の大義は、(三) 二種の門の中には、云

(一) 三種當卷所明の體相用三大義を指す(二) 二種の門(三) 眞生二門なり

(一) 一を立つ 眞如門の三大は、  
平等一全收の故に、  
就て有鈔十二丁左  
參照。  
Mahendrarh  
(二) 大印陀羅大  
帝と譯すべき字に  
彼釋天の宮殿に  
掛かる玉網を  
大印陀羅網といひ  
佛の喩に用ひ  
眞如門無雙立を述  
ぶ。  
(三) 第一の一は  
大なり、第二の一  
は相大なり、第三  
は生滅雙立を述ぶ。  
(四) 結惣持決擇  
分第七卷所明の中  
四門の決擇の中な  
り。  
(五) 論十九丁右表  
開解十二丁右(廿  
七卷)快鈔九日下  
初丁。

何が安立するや、謂く、眞如門の中の三種の大義とは、唯し各(一)一を立つ雙立無きが故に、若し生滅門の中の三種の大義は、三種の大義具足して雙立す、前後無きが故に、之を以て別とす、是の故に。(二)大印陀羅網譬喩契經の中に是くの如くの説を作す、(三)體大の義のみあつて相及び用無し、相大の義のみあつて體及び用無し、用大の義のみあつて體及び相無し、是くの如くの三大は、(四)第一の一のみあつて、第二の一無し、(五)復次に、體大の義あれば、當さに相と用とあるべし、相大の義あれば、當さに體と用とあるべし、用大の義あれば、當さに體と相とあるべし、是くの如くの三大は、第一の一に隨つて第二の一あり、相捨離せざるが故に、餘の種々の相は、(六)結惣持決擇分の中に自ら當さに理明なるべし。

(七)すでに顯示三種大義門を説きつ、次に門自入門破異門を説かん、本に曰く。

『復次に、生滅門より即ち眞如門に入ること顯示す、所謂る、五陰の色と心とを推求するに、六塵の境界畢竟して無念なり、心形相無きを以ての故に、十方に求むるに終に不可得なり、人の迷の故に東を謂て西とすれども、方は實には轉せざるが如く、衆生も亦爾なり、無明の迷の故に、心を謂て念とすれども、心は實には動せざるな

り、若し能く觀察して、心は起無しと知れば、即ち隨順して眞如門に入ることを得るが故に。』

論じて曰く、今この論文は何の義を明さんとかする、廣狹と大小との諸の異執を治せんと欲ふがための故に、云何が異執する、謂く、衆生あつて是くの如くの執を作す、一法界心は是れその本法なり、亦是廣亦是大なり、眞妄二門は是れその末法なり、亦是狹亦是小なりと、この執着を對治せんと欲ふがための故に、是くの如くの説を作す、(一)門も亦所入なり、(二)本と量等しと、復次に眞如門内の中には(三)有爲の法の差別の相無きことを顯示せんと欲ふがための故に。復次に、五陰を空する智も、所空の陰の如く自體空無なり、この能空と所空と皆空なるを以て、眞如平等門に入ることなすことを顯示せんと欲ふがための故に。復次に、生滅門は假なり、眞如門は實なることを顯示せんと欲ふがための故に、本の如し、「復次に、生滅門より即ち眞如門に入ること顯示す、所謂る、五陰の色と心とを推求するに、六塵の境界畢竟して無念なり、心形相無きを以て、十方に之を求むるに、遂に不可得なり」といふが故に、何の義を以ての故にか、譬喩門の中に、東方を覺に喩へ、西方を念に喩ふる、本覺の般若清淨智慧の光明

(一) 第三重第八卷  
門亦所入參照。  
(二) 本と本法な  
り。  
(三) 有爲の法五  
蘊なり。

を出現して、幽冥生死の暗夜を照輝すること譬へば日輪の出現し已訖つて世間の闇を破するが如く、無明住地種々染法の眷屬を出生して、無量の無漏の性清淨の惠明を隠覆すること、譬へば日輪の隠没し已訖つて、大暗夜を發して分別了知の清淨の眼を障覆するが如くなることを顯示せんと欲ふがための故に、本の如し、「一人の迷の故に東を謂て西とすれども、方は實には轉せざるが如く、衆生も亦爾なり、無明の迷の故に、心を謂て念とすれども、心は實には動せざるなり」といふが故に、(二)此れより已下は、得益の相を明す、謂く、衆生あつて、心法は能起所起の別相あること無しと了知しぬれば、即ち眞如隨順を成就することを得、即ち眞如得入を成就することを得、隨順あること無ければ得入無きが故に、本の如し、「若し能く觀察して心は起無しと知れば、即ち隨順して眞如門に入ることを得るが故に」といふが故に。

(三)すでに門自入門破異門を説きつ、次に對治邪執正解門を説かん、本に曰く。

「對治邪執とは、一切の邪執は皆我見に依る、若し我を離れぬれば則ち邪執無し、是の我見には二種あり、云何が二つとする、一つには人我見、二つには法我見なり、人我見とは諸の凡夫に依る、説くに五種あり、云何が五つとする、一つには修多羅に、

(二)第三重第八卷入門得益參照此能く以下の本論の文を指す。

(三)論二十丁右裏、義記下末初丁七卷、快鈔十日下初丁。

如來の法身は畢竟寂寞なること猶し虚空の如しと説くを聞て、著を破せんが爲めなりと知らざるを以ての故に、即ち虚空は是れ如來の性なりと謂へり、云何が對治する、虚空の相は是れその妄法なり、躰無にして不實なり、色に對するを以ての故に、是の可見の相あつて、心をして生滅せしむ、一切の色法は、本よりこのかた是れ心なるを以ての故に、實に外色無し、若し色無くば則ち虚空の相も無けん、所謂る一切の境界は唯心なれども妄起の故に有なり、若し心妄動を離れぬれば則ち一切の境界滅し、唯一眞心にして遍せざるところ無し、此れを如來廣大性智究竟の義と謂ふ、虚空相の如くには非すと明かすが故に。二つには修多羅に世間の諸法は畢竟して躰空なり、乃至涅槃と眞如との法も亦畢竟して空なり、本より已來自空にして一切の相を離れたりと説くを聞て、著を破せんが爲めと知らざるを以ての故に、即ち眞如と涅槃との性は、唯し是れそれ空なりと謂へり、云何が對治する、眞如法身は自體不空にして無量の性功德を具足すと明すが故に。三つには修多羅に如來の藏は増減あること無し、躰に一切功德の法を備へたりと説くを聞て、解せざるを以ての故に、即ち如來の藏に色心の法の自相差別ありと謂へり、云何が對治する、唯し眞如の義

に依て説くが故に、生滅の染の義に因つて示現して差別を説くを以ての故に。四つには修多羅に一切世間の生死の染法は、皆如來藏に依つて而も有なり、一切の諸法は眞如を離れずと説くを聞いて、解せざるを以ての故に、如來藏の自體に具さに一切世間の生死等の法ありと謂へり、云何が對治する、如來藏は本より已來唯し過恒沙等の諸の淨功德の不離不斷不異の眞如の義のみあるを以ての故に、過恒沙等の煩惱染法は、唯し是れ妄有にして、性自ら本無なり、無始世よりこのかた、未だ曾て如來藏と相應せざるを以ての故に、若し如來藏の體に妄法あり、而も證會せしめて永く妄を息むといはば、是の處り爲し。五つには修多羅に、如來の藏に依るが故に生死あり如來の藏に依るが故に涅槃を得と説くを聞いて、解せざるを以ての故に、衆生始めありと謂へり、始を見るを以ての故に、復如來所得の涅槃にもその終盡あつて、還つて衆生と作ると謂へり、云何が對治する、如來藏は前際無きを以ての故に、無明の相も亦始めあること無し、若し三界の外に更らに衆生始めて起するありと説かば、即ち是れ外道の經説なり、又如來藏は後際あること無し、諸佛所得の涅槃も之と相應して則ち後際無きが

故に。

法我見とは二乘の鈍根に依るが故に、如來は但し爲めに人無我を説き玉ふ、説究竟せざるを以て、五陰生滅の法ありと見て、生死を怖畏して妄りに涅槃を取る、云何が對治する、五陰の法は、自性不生にして則ち滅あること無し、本より來涅槃なるを以ての故に、復次に究竟して妄執を離るとは、當さに知るべし、染法と淨法とは皆悉く相待せり、自相として説くべきことあること無し、是の故に一切の法は本よりこのかた、色に非ず心に非ず、智に非ず識に非ず、有に非ず無に非ず、畢竟して不可得の相なり、而も言説あるは、當さに知るべし如來善巧の方便なり、假て言説を以て衆生を引導す、その旨趣は皆念を離れて眞如に歸せしめんがためなり、一切の法を念すれば、心をして生滅せしめ、實智に入らざるを以ての故に。』

論じて曰く、即ち此の文の中に自ら四門あり、云何が四つとする、一つには顯示根本惣相門、二つには顯示人見對治門、三つには顯示法見對治門、四つには顯示俱非絶離門なり、是れを名けて四つとす、顯示根本惣相門と言ふは、無量無邊の過恒沙數の一切の(一)邪道と、無量無邊の過恒沙數の一切の(二)定執とは、皆我見を以て自の所依とし

(一) 邪道 邪定聚  
 (二) 定執 二乘所  
 (三) 過失 八丁右  
 (四) 起の過失 八丁右  
 (五) 因なり  
 (六) 起すところの染  
 (七) 中の一切異生及  
 (八) 初學大乘の人々  
 (九) 及び

二、第三重第八卷  
邪執所化參照。

て出生し増長して、更らに餘あること無し、この邪執のために根本と作るが故に、是の故に無明住地無邊際契經の中に是くの如くの説を作す、一切無量の種々の虚妄邪論の海は、我見の岳を以て依として而も轉ず、譬へば一切の無量無邊の種々の林樹、種々の草木は、皆悉く山を以て依として而も轉ずるが如くなるが故に、本の如し、「對治邪執とは、一切の邪執は皆我見に依る、若し我を離れぬれば則ち邪執無し、是の我見に二種あり、云何が二つとする、一つには人我見、二つには法我見なり」といふが故に。すでに顯示根本惣相門を説きつ、次に顯示人見對治門を説かん、(一)顯示人見對治門と言ふは、直に邪定聚と及び不定聚との一切の凡夫の謬執の過失を對治して勝妙の解を生せしめんが爲めの故に、五種の人見の治障の別相は、文相明かなるが故に重釋を須のす、復次に、(二)大要無きが故に、本の如し、「人我見とは、諸の凡夫に依る、説くに五種あり、乃至廣説、又如來藏は後際あること無し、諸佛所得の涅槃も之と相應して則ち後際無きが故に」、すでに顯示人見對治門を説きつ、次に顯示法見對治門を説かん。顯示法見對治門と言ふは、直に二乘の衆生の實有の過失を對治して、法空の大理を成就することを得しめんが爲めの故に、二種の法見の治障の別相は、文相明かな

三、大要無きが故に  
當段に人見對治の相無きない

二、斷を斷じ言  
語道斷を遣るない  
三、滅を斷じ心  
行處滅を遣るなり

るが故に重釋を須のす、本の如し、「法我見とは、二乘の鈍根に依るが故に、如來は但し爲めに人無我を説き玉ふ、乃至廣説、則ち滅あること無し、本よりこのかた、涅槃なる(を以ての)故に」といふが故に。すでに顯示法見對治門を説きつ、次に顯示俱非絶離門を説かん。顯示俱非絶離門とは、若し衆生あつて、二執を除遣して二空を證得すれば、諸法は言語道斷し、心行處滅し、(一)斷を斷じ、照寂(二)滅を滅して、慮止して達する所無しと通達するが故に、本の如し、「復次に、究竟して妄執を離るとは、當さに知るべし、染法と淨法とは皆悉く相待せり、自相として説くべきことあること無し、是の故に一切の法は、本よりこのかた色に非ず、心に非ず、智に非ず、識に非ず、有に非ず、無に非ず、畢竟して不可得の相なり、乃至廣説、心をして生滅せしめ、實智に入らざるを以ての故に」といふが故に。

國譯釋摩訶衍論卷第六 終

疏五卷十二丁、義  
記下卷初丁、開鈔四  
卷十六卷初丁、開鈔四  
廿八卷初丁、開鈔四  
册八卷初丁、開鈔四  
丁、快鈔七之十初  
下(二十六册)初日

## 國譯釋摩訶衍論卷第七

龍樹菩薩の造

二八二

すでに對治邪執正解門を説きつ、次に分別發趣道相門を説かん、本に曰く。

『分別發趣道相とは、謂く、一切諸佛所證の道に、一切の菩薩發心修行し趣向する義の故に、略して發心を説くに三種あり、云何が三つとする、一つには信成就發心、二つには解行發心、三つには證發心なり、信成就發心とは、何等の人に依り何等の行を修してか、信成就することを得て、發心に堪能なるや、所謂る不定聚の衆生に依る、善根を熏習する力あるが故に、業と果報とを信じて能く十善を起し、生死の苦を厭ふて、無上菩提を求めんと欲ひ、諸佛に値ひたてまつることを得て、親承し供養して信心を修行し、一萬劫を遷て信心成就するが故に、諸佛菩薩は教へて發心せしめ、或は大悲を以ての故に能く自ら發心し、或は正法の滅せんと欲するに因つて、護法の因縁を以て能く自ら發心す、是くの如くの信心、發心を成就し得る者は、正定聚に入つて畢竟して退せざれば、如來種の中に住して正因に相應すと名く、若し

衆生あつて、善根微少にして久遠より已來、煩惱深厚なれば、佛に値て亦供養することを得と雖、然も人天の種子を起し、或は二乗の種子を起す、設ひ大乘を求むる者あれども、根則ち不定なり、若しは進み若しは退き、或は諸佛を供養することあれば、未だ一萬劫を遷ざれども、中に於て縁に遇て亦發心することあり、所謂る、佛の色相を見て而もその心を發し、或は衆僧を供養するに因つて而もその心を發し、或は二乗の人の教令に因つて發心し、或は他に學んで發心す、是くの如く等の發心は悉く皆不定なり、惡の因縁に遇へば、或は便ち退失して二乘地に墮す。復次に信成就發心とは何等の心をか發すや、略して説くに三種あり、云何が三つとする、一つには直心、正しく眞如の法を念するが故に、二つには深心、樂つて一切の諸の善行を集むるが故に、三つには大悲心、一切衆生の苦を抜かんと欲ふが故に。問て曰く、上には「法界は一相なり、佛體無二なり」と説く、何が故にか唯し眞如を念せずして、復諸善の行を求學することを假るや、答へて曰く、譬へば大(一)摩尼寶は體性明淨なれども而も鑛穢の垢あり、若し人、寶性を念すと雖、方便を以て種々に磨(二)鍊せざれば、淨を得ること無きが如く、是くの如くの衆生の眞如の法は、體性空淨なれど

Manih  
(一)摩尼 寶珠と  
譯す。  
(二)鍊 異本には  
治せり。

も、而も無量の煩惱の染垢あり、若し人真如を念すと雖、方便を以て種々に修習せざれば亦淨を得ること無し、垢無量無邊にして一切の法に遍するを以て、一切の善行を修して以て對治とす、若し人一切の善法を修行すれば、自然に真如の法に歸順するが故に、略して方便を説くに四種あり、云何が四つとする、一つには行根本方便、謂く、一切の法は自性無生にして妄見を離れたりと觀じて生死に住せず、一切の法は、因縁和合して業果失せずと觀じて、大悲を起し諸の福德を修し、衆生を攝化して涅槃に住せず、法性の無住に隨順するを以ての故に、二つには能止方便、謂く、慚愧して過を悔ひ、能く一切の惡を止めて增長せしめず、法性の諸の過を離れたるに隨順するを以ての故に、三つには發起善根增長方便、謂く、懃ろに三寶を供養し禮拜し、諸佛を讚歎し隨喜し勸請す、三寶を愛敬する淳厚の心を以ての故に、信增長することを得、乃し能く無上の道を志求す、又佛法僧の力に護らるゝに因るが故に、能く業障を消して善根を退せず、法性の癡障を離れたるに隨順するを以ての故に、四つには大願平等方便、所謂る、願を發して未來を盡くし、一切衆生を化度して餘あること無からしめ、皆無餘涅槃に畢竟せしむ、法性の斷絶無さに隨順するを以

Asankheyaṃ-  
 (二)阿僧祇劫  
 僧祇は無數劫  
 央波略に於て  
 劫波の長きに  
 時問の長きに  
 子語の長きに  
 喻あり、佛智  
 卅八及び、五  
 四十九、五十  
 對見。

ての故に、法性は廣大にして一切衆生に遍じて平等無二なり、彼此を念せず究竟して寂滅の故に、菩薩是の心を發すが故に則ち少分法身を見ることを得、法身を見るを以ての故に、その願力に隨つて能く八種を現じて衆生を利益す、所謂る、兜率天より退すると、入胎と、住胎と、出胎と、出家と、成道と、轉法輪と、涅槃に入るとなり、然れども是の菩薩をば未だ法身と名けず、その過去の無量世よりこのかた、有漏の業未だ決斷すること能はざるを以て、その所生に隨つて微細の苦と相應す、亦業繫に非ず、大願自在力あるを以ての故に、修多羅の中に、或は惡趣に退墮するありと説くは、それ實の退には非ず、但し初學の菩薩の未だ正位に入らず、而も懈怠なる者を恐怖せしめて勇猛ならしめんがための故に、又是の菩薩は一たび發心して後は、怯弱を遠離し畢竟して二乘地に墮せんことを畏れず、若し無量無邊阿僧祇劫に勤苦難行して、乃し涅槃を得と聞けども亦怯弱せず、一切の法は本よりこのかた自から涅槃なりと信知するを以ての故に、解行發心とは、當さに知るべし、轉勝なり、是の菩薩は初め正信よりこのかた、第一阿僧祇劫に於て、將さに滿せんとするが故に、真如の法の中に於て深解現前して所修に相を離る、法性は體に慳貪無しと知





△以下の文異譯は、異なる。

無量の方便あつて、諸の衆生の解を得べき所に随つて、皆能く種々の法義を開示す、是の故に一切種智と名くることが得△又問て曰く、若し諸佛に自然の業あつて、能く一切處に現じて衆生を利益せば、一切衆生若しは其の身を見、若しは神變を觀、若しは其の説を聞て利を得ずといふこと無かるべし、云何が世間多く見ること能はざるや、答へて曰く、諸佛如來の法身は、平等に一切處に遍して作意あること無し、故に自然と名く、但し衆生の心に依つて現す、衆生の心は猶し鏡の如し、鏡若し垢あれば色像現せず、是くの如くの衆生の心に若し垢あれば法身現せざるが故に。』論じて曰く、即ちこの文の中に二門あり、云何が二つとする、一つには惣標惣説門、二つには別釋散説門なり、是れを名けて二つとす、第二の門の中に、自ら三門あり、云何が三つとする、一つには三種發心分割門、二つには發起問答決疑門、三つには因論生論問答門なり、是れを名けて三つとす、説相觀つべし。惣標惣説門と言ふは、即ち此の分別發趣道相門の中には、無量無邊の三世の諸佛の所誓の願海と、所行の因海と所證の果海と、所化の徒海とに、無量無邊の三世一切の諸の菩薩衆の、是くの如くく々の如々に隨踐し順行して轉すべきこと其の次第の如く、數量を超えず位地を過ぎ

△第三重第八卷發趣通局參照。則法則なり

ず、趣入する義を顯示せんと欲ふがための故に、復次に△一切の佛の趣向無き△則の如く、一切の菩薩も彼の趣向あること無き則の中に於て如々に行することを顯示せんと欲ふがための故に、本の如し、「分別發趣道相とは、謂く一切諸佛所證の道に、一切の菩薩發心修行し趣向する義の故に」といふが故に。すでに惣標惣説門を説きつ、次に別釋散説門を説かん、この中に三門あり、その次第の如く審かに思擇すべし、第一の三種發心分割門の中に就て即ち三種あるが故に、自ら三種の門あり、云何が三つとする、一つには信成就發心門、二つには解行發心門、三つには證得發心門なり、是れを名けて三つとす、本の如し、「略して發心を説くに三種あり、云何が三つとする、一つには信成就發心、二つには解行發心、三つには證發心なり」といふが故に、初門の中に就て即ち三門あり、云何が三つとする、一つには發起問惣標門、二つには顯示答釋廣説門、三つには發起問答決疑門なり、是を名けて三つとす、第一二の門に二種の重あり、審かに觀察すべし、第一の發起問惣標門の中に就て即ち四の意あり、云何が四つとする、一つには假者意、能修の人を問ふが故に、二つには行相意、所修の行を問ふが故に、三つには自分意、成就を得ることを問ふが故

(二)論六丁左裏、  
開解十二丁左(廿)  
八卷快鈔二日下。

に、四つには向上意、勝進の相を問ふが故に、是を名けて四とす、本の如し「信成就發心とは、何等の人に依り、何等の行を修してか、信成就することを得て、能く發心に堪能なるや」といふが故に。(一)すでに發起開問惣標門を説きつ、次に顯示答釋廣說門を説かん、この門の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには隨問次第答釋門、二つには擧劣顯勝生解門なり、是を名けて二とす、隨問次第答釋門の中に就て即ち六門あり、云何が六とする、一つには顯示修行假者門、二つには自然本有熏習門、三つには顯示修行功德門、四つには信心成就時量門、五つには顯示發心因緣門、六つには顯示得益位勝門なり、是れを名けて六とす、顯示修行假者門といふは、謂く所化の衆生は無量無邊なりと雖、而も今この處の中には、(三)且く不定聚攝の十信の衆生を取るが故に、所以いかんとなれば、不定聚の三品の衆生を化して、十種の信心を具足し成就せしめ、決定して十住の菩薩の初發心住の金剛不變の位の中に安立せしめんと欲ふがための故に、本の如し、「所謂る、不定聚の衆生に依る」といふが故に。自然本有熏習門といふは、謂く、是くの如くの衆生の相續の中に、無始世よりこのかた、常に本覺藏の佛あつて、衆生の善根を常恒に熏習して増長せしむるが故に、本の如し、「善根を熏習する力ある

(三)第三重第九卷  
釋決第十四卷十信  
劫內參照。

(一)染淨不同なれ  
ど、皆因縁和合し  
て非有似有なる  
を釋せざるものに  
て、似有は空の  
義を、不空とは有  
の義を顯はす。  
(二)第三重第八卷  
十信新業參照。  
(三)繫縛地邪定  
聚に當る。

が故に」といふが故に、顯示修行功德門といふは、謂く、不定聚の種々の衆生は、因果果報の(二)似有空の因縁和合の道理を信するが故に、(三)十惡の過失を知て不應作の意ろを起し、十善の功德を觀じて當應作の意を起して、(四)繫縛地を厭ひ、解脱の域を求めて、漸々に出離して菩提に向ふが故に、本の如し「業と果報とを信じて能く十善を起し、生死の苦を厭ふて、無上菩提を求めんと欲ひ、諸佛に値ひたてまつることを得て、親承し供養して信心を修行し」といふが故に。信心成就時量門と言ふは、謂く、その信心成就の時節の遠近の差別の相を顯示するが故に、即ちこの門の中に、十五の契經各々に異說せり、云何が名けて十五の異說とする、一つには一切諸法因縁無主契經の中に是くの如くの說を作す、余の時に、文殊師利即ち佛に白して言さく、尊者よ、具縛地より不定聚に入る一切の行者は、幾くの時節を経てか十種の信心具足し成就して、漸々に轉勝して不退位定まるや、こゝに尊者、文殊師利に告げて言はく、善男子よ、諦かに聽きく善く思ひ之を念せよ、我れ當に汝が爲めに、信成の時節の分際を解説すべし、善男子よ、一切の行者、具縛地より不定聚に入て、一萬三千劫を經已訖て、即便十種の信心を成就して、菩薩の初發心住に決定すと、二つには攝無量大

(一) 信樂地 十信を  
 (二) 毛頭 輕少の  
 譬不定聚の凡夫は  
 信心輕少の故に余  
 (三) 難角地 角は  
 競なり、十信の位  
 は善惡の心敵闘す  
 る故に余いふ。

Kashyapa  
 (一) 剎那 印度に  
 於ける時の最も短  
 き名にして一彈指  
 の六十五分の一を  
 一剎那といふ、之  
 を十倍せるを十剎  
 那量とす。  
 (二) 信地平坦等  
 邪見等の株杭を離  
 る、故に余いふ。

乘契經の中に是くの如くの説を作す、復次に佛子よ、信地の假名の菩薩は、六萬四千  
 劫量すでに滿じて、即便十愛樂の心を成就して金剛地に定まると、三つには惠明陀羅  
 尼契經の中に是くの如くの説を作す、不定聚の衆生は、多く八萬一千五十劫を經已訖  
 つて信心成就して不退に決定すと、四つには法門名字契經の中に是くの如くの説を作  
 す、復次に(一)信樂地の位の(二)毛頭の凡夫は、二萬六千劫を經已訖つて便ち信成就して  
 闕失する所無しと、五つには清淨三昧契經の中に是くの如くの説を作す、若し衆生あ  
 つて(三)難角地に入つて信心を修行せば、當さに九萬劫を満足し已訖つて信品成就すべ  
 しと、六つには金剛陀羅尼契經の中に是くの如くの説をなす、信成就の量は、四萬八  
 千六十劫量なりと、七つには大智惠光明契經の中に是くの如くの説を作す、復次に善  
 男子よ、若し衆生あつて功德善根の父母天地を成就せんと欲ふがためには、當さに(四)  
 十剎那量を經已訖つて、即便ち(五)信地平坦にして草無かるべしと、八つには實相本  
 決定不動契經の中に是くの如くの説をなす、信位成就することは、信心の發起する初  
 剎那の中に十種の信心具足し圓滿すと、九つには文殊師利圓滿因海大惣持契經の中に  
 是くの如くの説をなす、三阿僧祇の大無量劫を經過し已訖つて、即便ち信位具足し成

(一) 論九丁右表、  
 八卷(一)快鈔三日下  
 初丁。

(二) 種子地 十信  
 を指す。

Kashyapa  
 (一) 地蔵菩薩大  
 地蔵菩薩の實を藏  
 する如く法界衆生  
 の善根の種子を有  
 し玉ふ故に地藏を  
 名く。

立すと、十には甚深菩提因緣契經の中に是くの如くの説を作す、信地を建立するには  
 唯し三萬劫なりと、(二)十一には大方便智善巧契經の中に是くの如くの説を作す、信行  
 の菩薩は、九千劫量に清淨の信心を決定し成就して、その思極樂なりと、十二には菩  
 薩光明遍照契經の中に是くの如くの説を作す、余の時に金剛惠菩薩摩訶薩、即ち佛に  
 白して言さく、世尊よ、無上菩提の初の(三)種子地は、幾くの時節を經てか決定淳熟し  
 て、菩提の牙を出生し增長するや、佛の言はく、若し初めの種子地を成就せんが爲め  
 には、當さに七萬五千六十劫を經て、初めの種子地を具足し建立すべしと、十三には  
 授記平等契經の中に是くの如くの説を作す、信心成就することは、遠に非ず近に非ず、  
 無に非ず有に非ず、高に非ず下に非ず、本に非ず末に非ず、去に非ず來に非ず、大に  
 非ず小に非ず、三世に非ず非三世に非ず、位に非ず地に非ず、善に非ず惡に非ず、是  
 に非ず非是に非ず、言語道斷し心行處滅せり、是の故に名けて眞實信心とすと、十四に  
 は如來藏本識契經の中に是くの如くの説を作す、余の時に(四)地蔵菩薩摩訶薩即ち佛に  
 白して言さく、世尊よ、云何が名けて廣大圓滿功德父母信地品とするや、佛の言はく、十  
 信の十信、十解の十信、十行の十信、十向の十信、十地の十信、佛地の十信、乃至、具縛

(二) 下卷十七丁取  
意の文なり。

(三) 本業 本業瓌  
珞經なり。

(三) 第一住心通  
じて十住を指す三  
賢の中の第一の故  
に。

惡種子地及び一切の二乘に皆悉く十信あり、無量無邊の一切の諸法、一々の法として十信に非ざること無し、この義を以ての故に、名けて廣大圓滿信地とすと、十五には菩薩瓌珞大本業契經の中に是くの如くの説を作す、信相の菩薩は、十千劫に於て十戒の法を行じて、信成就の處に決定し安立すと、是れを十五の異説の契經と名く、是くの如くの諸經は何の義を以ての故にか、是くの如く差別なるや、謂く衆生の心無量無邊にして各差別なるが故に、その心品に隨つて、信の行相を説くこと、是くの如く不同なり、審かに思擇すべし、今この文の中には、且らく(三)本業に依つて解釋すまくの如く、本の如し、「一萬劫を逕て信心成就するが故に」といふが故に。顯示發心因緣門と言ふは、謂く、すでに信心成就せる行者、(三)第一住の心を發起せんと欲ふがためには、當さに緣力を待つて發起すべきが故に、この文の中に於て自ら三種あり、云何が三つとする、一つには勸請の因緣、二つには救度の因緣、三つには護法の因緣なり、是れを名けて三とす、勸請の因緣といふは、所謂る、無量無邊の一切の諸佛及び大菩薩衆、種々の勝妙の教法の契經の海を出現し、信位の行者を勸請し教化して、不定地を超えて不動の域に決定し安立せしむるが故に、本の如し、「諸佛菩薩は殺へて發心せしめ」

(一) 本論は大悲を  
能發の緣として末  
論は所發として是  
れ大悲は能發に是  
如くせるものなら  
ん(快三日下十二  
丁右)

(三) 論十丁左裏、  
開解廿五丁左(廿  
八卷)快鈔四日下  
初丁。

といふが故に、救度の因緣といふは、所謂る、無量無邊の種々の衆生の一切の苦海を緣じて、之を以て因として(一)金剛不退廣大清淨の大慈悲心を發起するが故に、本の如し「或は大悲を以ての故に能く自ら發心し」といふが故に、護法の因緣と言ふは、所謂る、諸佛の教法の破滅せんと欲する時、種々の方便を以て、宜しきに隨ひ、應に隨ひ、當るに隨ひ、時に隨ひ、處に隨ひ、身に隨ひ、身を惜まず、佛法を救護する大因緣の力の故に、自ら能く金剛不退廣大清淨の大久住の心を發起するが故に、本の如し「或は正法の滅せんとするに因つて護法の因緣を以て、能く自ら發心す」といふが故に。(三)顯示得益位勝門と云ふは、所謂る信成就して解を得る行者は、十名を具足して退失無きが故に、云何が十とする、一つには名けて無憂惱人とす、退還して凡夫の縛煩惱地に墮する怖畏の心を遠離するが故に、二つには名けて大富貴人とす、煩惱の荒穢を蠲除して涅槃の菓を收藏するが故に、三つには名けて種性高勝人とす、凡夫の下劣の種を遠離してすでに如來の尊高の種性の中に入るが故に、四つには名けて手足具人とす、般若の炬を執つて法界廣大の庭に遊行するが故に、五つには名けて作大江水人とす、無礙に直に薩婆般若の大海の中に流入するが故に、六つには宮殿建立人とす、すでに不定を

(二)第三重第九卷  
舉劣顯勝參照。

超えて決定して如來家中に安住するが故に、七つには名けて眞實佛子人とす、凡胎を遠離してすでに聖胎に入るが故に、八つには大福田人とす、煩惱を出離して獨り清淨なるが故に、九つには名けて徒衆無量人とす、法界の衆生を皆悉く以て自眷屬とするが故に、十には名けて無障礙人とす、心に隨つて轉ずるが故に、是れを名けて十とす、本の如し「是くの如くの信心、發心を成就し得る者は、正定聚に入つて畢竟して退せざれば、如來種の中に住して正因に相應すと名く」といふが故に、すでに隨問次第答釋門を説きつ、次に舉劣顯勝生解門を説かん、(三)この門の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには舉劣顯劣形相門、二つには舉勝顯勝形相門なり、是れを名けて二とす、舉劣顯劣形相門と言ふは、所謂る、善根微薄にして煩惱深厚なる凡夫衆生は、摩訶衍の因縁に値ふと雖、而も小善根の種子を起すが故に、本の如し「若し衆生あつて善根微少にして久遠より已來、煩惱深厚なれば、佛に値て亦供養することを得と雖、然も人天の種子を起し、或は二乗の種子を起す」といふが故に。舉勝顯勝形相門と云ふは、所謂る、若し衆生、摩訶衍の甚深微妙の法門を求むることあれども、その心即便ち決定すること能はず、順の因縁に値へば怛忽として若しは進み、逆の因縁に遇

(一)勝高人 舉勝  
顯勝の科名を指す

(三)論十二丁右表  
開解廿九卷初丁、  
(十七册)  
(四)十四經 前の  
十五經の中の瓔珞  
經を除きたる十四  
なり。

(四)所謂以下の文  
を指す。

へば自然に若しは退して定心無きが故に、本の如し、「設ひ大乘を求むる者あれども、根則ち不定なり、若しは進み若しは退す」といふが故に、若し定まること能はずば(一)云何が名けて勝高人とするや、定まる能はずと雖、而も望む所の法極めて勝高なるが故に、復次に天人二乗の種子を起すが故に、(二)これより已下は、信心成就の定時無きことを顯示し(三)十四經の大意を解釋す、所謂る、若し衆生あつて、諸佛を供養すれども、信心成就することその時不定なり、或は極々に遠く、或は極々に近く、或は中間の故に、所以いかんとなれば、縁の有無に隨つて信熟生するが故に、本の如し、「或は諸佛を供養することあれば、未だ一萬劫を遷されども、中に於て縁に遇て亦發心することあり」といふが故に。(四)此れより已下は、別釋を造作して發心の因縁の相を顯示す、此の文の中に於て即ち四種の發心の因縁あり、云何が四つとする、一つには見佛の因縁、如來妙色の身を見てまつるに因つて、而も能く廣大の心を發起するが故に、本の如し、「所謂る、佛の色相を見て而もその心を發し」といふが故に、二つには供僧の因縁、種々の具を以て衆僧を供養す、此の因縁に因つて、而も能く廣大の心を發起するが故に、本の如し、「或は衆僧を供養するに因つて而もその心を發し」といふが故に、三つには慚愧の因

(二) 是くの如く以下の文を指す。

(三) 逆違 鈔には逆違とせり (四卷廿四丁左)

(四) 論十二丁左裏、快鈔五日下初丁。

(四) 一つには以下の文を指す。

縁、二乗の人の教法を見聞してその劣なるを慚愧す、此の因縁に因つて而も能く廣大の心を發起するが故に、本の如し、「或は二乗の人の教令に因つて發心し」といふが故に、四つには隨兼の因縁、隨他の兼心なり、此の因縁に因つて而も能く廣大の心を發起するが故に、本の如し、「或は他に學んで發心す」といふが故に、是れを名けて四つとす、(二) 此れより已下は、その因縁を作して十種の信心の不定聚の形相を顯示し、及び前の所説の十信の決擇分を總結す、何の義を以ての故にか十種の信品に不定の稱を立つるや、所謂る、若し順當の因縁に値へば、隨て善趣に向ひ、若し(三) 逆違の因縁に遇へば惡道に趣くべし、譬へば輕毛の風に隨つて吹かれて東西に轉するが如くなる故に、本の如し、「是くの如く等の發心は悉く皆不定なり、惡の因縁に遇へば、或は便ち退失して二乘地に墮す」といふが故に、(三) 已に第一重の二種の門を説きつ、次に第二重の二種の門を説かん、「復次に信成就發心とは何等の心をか發すや」とは、即ち是れ發起開問惣標門なり、謂く開問を發して惣じて所爲を問ふが故に、「略して説くに三種あり」とは、即ち是れ惣じて惣答を標す、「云何が三つとする」とは、即ち是れ惣じて惣問を擧ぐ、(四) 此れより已下は、直に顯示答釋廣説門を明す、此の門の中に就て即ち三種あり、云

何が三つとする、一つには正智方便門、二つには福德具足門、三つには安樂成就門なり、是を名けて三つとす、此の三つが中に於て、初めは二利に通ず、中は唯し自利、後は唯し利他なり、復次に初の二つは唯し自利の分、後の一つは利他なり、復次に三つ皆二つに通ずるが故に、皆悉く各々に標釋を具足せり、審かに思擇すべし、正智方便門と言ふは直心なり、正體智のための有作の方便なるが故に、本の如し、「一つには直心、正しく眞如の法を念するが故に」といふが故に。福德具足門と言ふは深心なり、一切の功德のための有住の方便なるが故に、本の如し、「二つには深心、樂つて一切諸の善行を集むるが故に」といふが故に、安樂成就門と言ふは悲心なり、能善く一切衆生の無量の苦惱を救度して安穩廣大の樂を得しむるが故に、本の如し、「三つには大悲心、一切衆生の苦を抜かんと欲ふが故に」といふが故に。

すでに第二重の二種の門を説きつ、次に發起問答決疑門を説かん、此の門の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには前後相違難問門、二つには開通會釋消難門なり、是れを名けて二とす、前後相違難問門と言ふは、謂く上下の二文の相違の擧げて、その差別の相を難するが故に、云何が相違する、謂く(二) 上の文の中に是くの如くの説を

(二) 第三卷を指す

作して「言ふ所の覺義とは、謂く、心體は念相を離れたり、念相を離れたる者は虚空界に等くして、徧せざる所無く法界と一相なり、即ち是れ如來の平等法身なり、此の法身に依つて説いて本覺と名く」といひ、下の文の中に於て是くの如くの説を作して「二つには深心、樂つて一切諸の善行を集むるが故に」といふ、上下の二文是くの如く相違せり、是の故に問を發してその異相を難す、審かに思擇すべし。已に前後相違難問門を説きつ、次に開通會釋消難門を説かん、此の門の中に就て、即ち七門あり、云何が七つとする、一つには正答決斷彼難門、二つには修善行者得益門、三つには修行善巧方便門、四つには顯示發心功德門、五つには簡擇上下顯異門、六つには通契經文決疑門、七つには讚歎發心功德門なり、是れを名けて七つとす、初門の中に就て即ち三門あり、云何が三つとする、一つには開示譬喻善巧門、二つには合說契當安立門、三つには顯示法說生解門なり、是れを名けて三つとす、譬喻門の中に就て即ち四種あり、云何が四つとする、一つには寶喻、二つには性淨喻、三つには垢染喻、四つには人衆喻なり、是れを名けて四つとす、寶喻と言ふは、謂く、即ち大摩尼珠の寶なり、是くの如くの珠寶は當さに何れの處にかあるべき、是くの如くの珠寶は當に

寶石にあるべし、是くの如くの珠寶、その色如何、謂く深黃の色なり、その身の形相當に如何ぞ、謂く方坐の如し、長短無きが故に、大小の相その量いかん、謂く一丈なるが故に、是くの如くの珠寶は、諸の寶石の中に皆悉く具足して、寶石として摩尼無きはあること無し、その止住の相次第いかん、謂く第一には珠、第二には黃金、第三には石體なり、この摩尼珠一丈量ならば、彼の諸の寶石或は極小なるあり、或は極大なるあり、各々差別せり、豈皆一切に遍すと云ふことを得べけんや、この摩尼珠に殊勝の力あつて、一丈量なりと雖、大中小の中に遍じて餘無く障礙する所無し、亦一切處に遍すと説くことを得べし、彼の石の中に於て、この寶あるが故に、その石の色黃なり、審かに觀察すべし、是を寶喻と名く、本の如し「答へて曰く、譬へば大摩尼は……の如し」といふが故に。性淨喻とは、是くの如くの珠寶は、その體性甚極明白にして塵累を遠離するが故に、是を名けて性淨喻とす、本の如し「體性明白なれども」といふが故に。垢染喻と言ふは、是くの如くの珠寶は、能く金石等のために障へられて、明白の相を出現すること能はざるが故に、是れを名けて垢染喻とす、本の如し、「而も鑽穢の垢あり」といふが故に。人衆喻と言ふは、謂く、極めて窮貧にして極めて

懈怠なるが故に、寶ホウを求めざる人と、并びに及び精進して寶を樂求する人との故に、是を名けて人衆喩とす、本の如し「若し人寶性を念すと雖、方便を以て種々に磨鍊せざれば淨を得ること無きが如く」といふが故に。(二)已に開示譬喩善巧門を説きつ、次に合説契當安立門を説かん、寶喩の中に「大摩尼珠」と言ふは、當まさに何れの法にか喩ふべき、本覺の佛性に喩ふるが故に、所以いかんとなれば、本覺の佛性は、衆生の相續の身の中に隱藏せられて、彼の珠に似たるが故に、「黃石」と言ふは、當まさに何れの法にか喩ふべき、一切衆生の相續に喩ふるが故に、所以いかんとなれば、諸の衆生の身、佛性を藏し裹つむこと彼の石に似たるが故に、「色黃なり」とは當まさに何れの法にか喩ふべき、彼の佛性の不變の義に喩ふるが故に、所以いかんとなれば、眞如佛性は堅固不改こなること彼の金に似たるが故に、「方坐の如くして長短無し」とは、當まさに何れの法にか喩ふべき、眞如法の平等にして増減無きに喩ふるが故に、所以いかんとなれば、この眞如の法は、一味平等にして差別あること無きこと彼の坐に似たるが故に、「一丈」といふは、當まさに何れの法にか喩ふべき、眞如の法の具足圓滿して闕失無きに喩ふるが故に、所以いかんとなれば、眞如法身は萬德を具足して闕失する所無きこ

と彼の丈に似たるが故に、「是くの如くの珠寶の黃石の中に皆悉く具足して黃石として摩尼無きはあること無し」とは、當まさに何れの法にか喩ふべき、眞如の性の諸の衆生の種々の身中に逼して、衆生として眞如本覺の性無きはあること無きに喩ふるが故に、所以いかんとなれば、此の眞如の性は、不遍の過とがを離れたること彼の珠に似たるが故に、「第一には珠、第二には黃金、第三には石體」と言ふは、當まさに何れの法にか喩ふべき、俱有くの次第の法の漸々に能現するに喩ふるが故に、所以いかんとなれば、本覺智より流轉ルして四相の海を建立するとき、その次第の如く、漸々に能現すること彼の三つに似たるが故に、「此の摩尼珠に殊勝の力有ちからて一丈量なりと雖、大の中小の中に逼じて餘無し」と言ふは、當まさに何れの法にか喩ふべき、眞如本覺に、不思議の業あつて、蚊龍等の小大の身の中に逼するに、妨難無きに喩ふるが故に、所以いかんとなれば、此の眞如の法は、その性平等にして凡聖の中に逼すること彼の珠に似たるが故に、「彼の石の中に此の寶あるが故に、その石の色黃なり」と言ふは、當まさに何れの法にか喩ふべき、諸の衆生に悉く本覺あれば心相あるに喩ふるが故に、所以いかんとなれば、一切衆生に覺心あるが故に、了別識あること彼の石に似たるが故に。すでに寶喩



合説契當門を説きつ、次に淨喻合説契當門を説かん、「是くの如くの珠寶は、その體性甚極明白にして塵累を遠離す」と言ふは、當に何れの法にか喻ふべき、性淨本覺の清淨明白にして垢を離れたるに喻ふるが故に。すでに淨喻合説契當門を説きつ、次に染喻合説契當門を説かん、「是くの如くの珠寶は、能く金石等のために障へられて、明白の相を出現すること能はず」と言ふは、當に何れの法にか喻ふべき、自性清淨心の無明のため、に隱覆せられて、無漏の性徳を出現すること能はざるに喻ふるが故に。すでに染喻合説契當門を説きつ、次に人喻合説契當門を説かん、「二種の人」と言ふは、當に何れの法にか喻ふべき、佛の法寶を求めて、極精進する人と極懈怠の人とに喻ふるが故に、本の如し、「是くの如くの衆生の」と言ふが故に。已に合説契當安立門を説きつ、次に顯示法説生解門を説かん、此の門の中に於てその次第の如く法説合喻して行者の解を生ずること審かに思擇すべし、文相明かなるが故に別釋を須るす、本の如し、「眞如の法は體性空淨なれども、而も無量の煩惱の染垢あり、若し人、眞如を念すと雖、方便を以て種々に修習せざれば亦淨を得ること無し、垢無量無邊にして一切法に通し一切の善行を修して以て對治とす」と言ふが故に。已に正答決斷彼難門を説きつ、次に修善行者得益門を

(二) 論十七丁右  
表、開解第三十卷  
初丁。

説かん、謂く、若し衆生あつて一切の惡を斷じ一切の善を修すれば、自然自在に眞如の珠を得、無明の闇夜を照達して、疑畏するところ無きが故に、本の如し、「若し人一切の善法を修行すれば、自然に眞如の法に歸順するが故に」と言ふが故に。すでに修善行者得益門を説きつ、次に修行善巧方便門を説かん、この門の中に就て故に四門あり、云何が四つとする、一つには一切修行根本門、二つには制伏惡業不生門、三つには出生善根增長門、四つには誓願無邊平等門なり、是を名けて四つとす、本の如し、「略して方便を説くに四種あり」と言ふが故に、第一の門の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには般若成就無住門、二つには大悲成就無住門なり、是れを名けて二つとす、般若成就無住門と言ふは、所謂る、一切の諸法は本よりこのかた不生不滅畢竟寂滅にして、皆所有無しと觀察して生死に住せざるが故に、本の如し、「云何が四つとする、一つには行根本方便、謂く、一切の法は自性無生にして妄見を離れたりと觀じて生死に住せず」と言ふが故に。大悲成就無住門と言ふは、所謂る、一切の諸法は因縁和合の故に因果空しからず、亦有なりと觀察し、無量無邊の衆生界の海を緣じて、究竟して取攝せんがために涅槃に住せざるが故に、本の如し、「一切の法は因縁和合して

(二) 兩種。生死涅槃の兩種なり。

(三) 論十七丁右裏、開解三丁右快鈔七下(卅八册)第三重第九卷始覺情有參照。

(四) 懃ろに勤めてとせるは非なり。

業果失せずと觀じて、大悲を起し、諸の福德を修し、衆生を攝化して涅槃に住せず、法性無住に隨順するを以ての故に」といふは、即ち是れ縁を示し及び(二)兩種の不住道の行を結す、修行の法門量あること無しと雖、而も不住の道はそれ最も根本なり、是の故に説て行根本方便と言ふ。(三)すでに一切修行根本門を説きつ(四)次に制伏惡業不生門を説かん、この門は何の義をか明さんとかするや、行者當さに慚愧等の清淨の心品を發起して、一切無量の惡作を防止し、漸々に損滅して增長せしめざることを顯示せんと欲ふが故に、本の如し、「二つには能止方便、謂く、慚愧して過を悔い能く一切の惡を止めて增長せしめず、法性の諸の過を離れたるに隨順するを以ての故に」といふは、惣じてその縁を結す。すでに制伏惡業不生門を説きつ、次に出生善根增長門を説かん、この門は何の義をか明さんとかする、行者當さに一切の三寶を恭敬供養し、禮拜し讚歎し、隨喜し勸請して、信心を増長し、業障を消除して、無上大菩提を志求することを顯示せんと欲ふがための故に、本の如し、「三つには發起善根增長方便、謂く、(四)懃ろに三寶を供養し禮拜し、諸佛を讚歎し隨喜し勸請す、三寶を愛敬する淳厚の心を以ての故に信增長することを得、乃し能く無上の道を志求す、又佛

(一) 法性以下の文を指す。

(三) 勸注七の二(第十九卷)

法僧の力に護らるゝに因るが故に、能く業障を消して善根を退せず、法性の癡障を離れたるに隨順するを以ての故に」とは、惣じてその縁を結す。すでに出生善根增長門を説きつ、次に誓願無邊平等門を説かん、この門は何の義をか明さんとする、行者當さに十方世界の塵數の廣大の誓願海を發起し、十方世界の塵數の行因海を修習し、十方世界の塵數の衆生海を攝取し、十方世界の塵數の果滿海を成就して、一切皆悉く餘あること無きことを顯示せんと欲ふがための故に、本の如し、「四つには大願平等方便、所謂る、願を發して未來を盡くし、一切衆生を化度して餘あること無からしめ、皆無餘涅槃に究竟せしむ、法性の斷絶無きに隨順するを以ての故に」とは總じてその縁を結す。(二)此れより已下は隨順殊勝の相を顯示す、何の義を以ての故にか四門の結の中に、皆悉く通じて「法性の……隨順」と名くるや、法性の虚空は、その體性廣大圓滿にして邊際あること無く、その相用無礙自在にして始終あること無し、彼の四門を修する一切の行者も亦復是くの如し、順々如々にその阿世耶廣大圓滿にして分際無きことを顯示せんと欲ふがための故に、本の如し、「法性は廣大にして一切衆生に逼じて平等無二なり、彼此を念せず、究竟寂滅の故に」といふが故に。(三)すでに修行善巧方便門

(一) 相似の觀智論の「少分」に當る能見の智なり、之に就て賢位の菩薩眞理を緣するは、人空智が法空智か、異義なり、快十丁左参照。

を説きつ、次に顯示發心功德門を説かん、この文は何の義をか明さんとする、初發心住の菩薩は、法界性の中に隨順する廣大圓滿の心を起すが故に、(一)相似の觀智を以て法性身を見る、法性身を見るが故に願力自在なり、願力に由るが故に無量無邊の法界の衆生を緣じて而も大悲心を起す、大悲心極めて甚深なるに由るが故に八種の安樂の化相を出現して、時に隨ひ處に隨ひ、宜しきに隨ひ應に隨つて、順々如々に利益し安樂することを顯示せんと欲ふがための故に、本の如し、「菩薩是の心を發すが故に則ち少分法身を見ることを得、法身を見るを以ての故に、その願力に隨つて能く八種を現じて衆生を利益す、所謂る、兜率天より退すると、入胎と、住胎と、出胎と、出家と、成道と、轉法輪と、涅槃に入るとなり」といふが故に。すでに顯示發心功德門を説きつ、次に簡擇上下顯異門を説かん、この門の中に就て二門あり、云何が二つとする、一つには簡異地上門、二つには簡異具縛門なり、是れを名けて二つとす、簡異地上門と言ふは、謂く發心住の菩薩をば、唯し幻化影相の身と名く、眞如法身の菩薩と名くることを得ざるが故に、所以いかなとなれば、此の菩薩は、無始の餘業猶し未だ出離せざれば、受生の處に隨つて、微細の苦と相應して離れず、地上の菩薩はこれと相違

(二) 論二十丁右表、開解十五丁右、快鈔八丁下初丁。

(三) 五十の種子心。五十一を因果に分くる中の信住行向地の五十位を云ふ。

(四) 定分 不退分なり。

(五) 十種の眞地。十地なり。

(六) 金剛般若住地に對する語。頗梨珠に對する語。隨つて色現すは、四十心退分を指す。頗梨は玻璃とも書り、水精に似たり。

するが故に、本の如し、「然れども是の菩薩をば未だ法身と名けず、その過去の無量世よりこのかた、有漏の業未だ決斷すること能はざるを以て、その所生に隨つて微細の苦と相應す」といふが故に、簡異具縛門と言ふは、所謂る、初發心住の菩薩は、繫縛俱轉の業因の相無く、繫縛受生の果報無きが故に、所以いかなとなれば、大願の方便を具足して轉するが故に、本の如し、「亦業繫に非ず、大願自在力あるを以ての故に」といふが故に、(一)すでに簡擇上下顯異門を説きつ、次に通契經文決疑門を説かん、此の門の中に就て、自ら五種の各説の契經あり、云何が五つとする、一つには文殊師利歡喜陀羅尼契經の中に是くの如くの説を作す、余の時に文殊師利、即ち佛に白して言さく、世尊よ、常に大衆の中にして是くの如くの言を唱へ玉ふ、(二)五十の種子心は、果海を莊嚴する行因の本なり、一切の行者當さに此の道を経て等正覺を成すべしと、是くの如くの五十の種子心の中に、幾くか是れ退分、幾くか是れ(三)定分なりや、たゞ願くば世尊よ、我がために解説し玉へ、こゝに世尊、即ち文殊師利菩薩に告げて言はく、諦かに聽き、善く思ひ之を念せよ、我れ今汝がために分別し解説せん、善男子よ、(四)十種の眞地を名けて、金剛般若住地とし、前きの四十心を名けて、(五)頗梨珠隨轉廻向

地とす、汝當さに是くの如く知るべし、是くの如く觀すべしと、今此の經文は何の義をか明さんとかする、大士の十地は、すでに眞證の城なれば不退分と名け、此れより已前の四十種の心は、未だ證智を得ざれば名けて退分とすることを顯示せんと欲ふがための故に。二つには本覺大悲自然熏習契經の中に是くの如くの説を作す、復次に佛子よ、汝前の所問にいかんが名けて節退相とすとは、此の事殊勝にして不思議の中の不思議なるが故に、愚癡の凡夫、初發意の菩薩等の知ること能はざる所なりと、余の時に大明菩薩、心を至して佛に勸請したてまつる、即ち大明に告げて言はく、善男子よ、節退相と言ふは、謂く、信心、發心住、淨心地、金剛心のこの四處を皆名けて退分とす、各彼の中間をば皆名けて不退分とす、是の故に説て節退相と言ふと、今此の經文は何の義をか明さんとする、佛法の大海は廣大圓滿にして邊際無きを以ての故に、三つには大證得陀羅尼契經の中に是くの如くの説を作す、十種の安心は決定不退にして退失の理無しと、今この經文は何の義をか明さんとする、十種の菩薩は法界性の中に隨順する廣大の善根を發起するが故に、決定して金剛の位に安住することを顯示せんと欲ふがための故に。四つには五明契經の中に是くの如くの説を作す、十種の定心は

（二）異義なり、快  
五丁右左參照（八  
日下）

決定不退にして退失の理無しと、今この經文は何の義をか明さんとする、十種の菩薩は法界性の中に隨順する廣大の善根を發起するが故に、決定して金剛の位に安住することを顯示せんと欲ふがための故に。四つには五明契經の中に是くの如くの説を作す、十種の定心は退に非ず進に非ず、來に非ず去に非ず、出に非ず、入に非ず、萬德を圓滿して闕失するところ無し、是の故に説いて自然住心と言ふと、今此の經文は何の義をか明さんとする、十住の位の中に、果徳すでに滿じて更に進む所無く、復退するところ無く、自然常住にして闕事無きことを顯示せんと欲ふがための故に。五つには菩薩瓔珞大本業契經の中に是くの如くの説を作す、諸の善男子よ若しは一切二劫、乃至十劫、十信を修行して十住に入ることを得、是の人余の時に、初め一住より乃至第六住の中に至るまで、若し第六の般若波羅蜜を修すれば正觀現前す、復諸佛菩薩の知識の所護に値て、出で、第七住に到つて常住不退なり、此の七住より以前をば名けて退分とすと、今此の經文は何の義をか明さんとかする、下劣懈怠の衆生を勸策して、勇猛の心を増長せしめんとすることを顯示せんと欲ふがための故に、今此の論の中には、且く本業に據つて會通を作す、審かに觀察すべし、本の如し、「修多羅の中に、或は惡趣

(二) 解行發心此の  
釋段を指す、快鈔  
九日下の九卷には  
論の文のみに就て  
釋を施しあり。

に退墮するありと説くは、それ實の退には非ず、但し初學の菩薩の未だ正位に入らず、  
而も懈怠なる者を恐怖せしめて勇猛ならしめんがための故に」といふが故に。すでに  
通契經文決疑門を説きつ、次に讚歎發心功德門を説かん、此の門は何の義をか明さん  
とする、發心の菩薩は二の怖畏を遠離してその決定不動なることを顯示せんと欲ふが  
ための故に、云何が名けて二種の怖畏とする、一つには下生怖畏、下劣の道に生せん  
ことを極めて怖畏するが故に、二つには上生怖畏、殊勝の境を聞て、その心怯弱して  
極めて怖畏するが故に、この二怖を離る、是の故に名けて發心功德とす、本の如し、  
「又是の菩薩は、一たび發心して後は、怯弱を遠離し畢竟して二乘に墮せんことを畏  
れず、若し無量無邊阿僧祇劫に勤苦難行して、乃し涅槃を得と聞けども亦怯弱せず、  
一切の法は、本よりこのかた自ら涅槃なりと信知するを以ての故に」とは、即ち是れ  
惣じて二種の功德の因縁を結す。上よりこのかたは信成就發心の決擇分已んぬ(三)此れ  
より已下の種々の諸門は、文相明かなるが故に重釋を須ぬす。

### 國譯釋摩訶衍論卷第七終

### 國譯釋摩訶衍論卷第八

龍樹菩薩の造

すでに解釋分を説きつ、次に修行信心分を説かん、此の分の中に就て則ち七門あり、  
云何が七つとする、一つには能治所治契當門、二つには信心品類分割門、三つには修  
行方便善巧門、四つには廣釋魔事對治門、五つには讚歎三昧功德門、六つには兩輪具  
闕益損門、七つには勸劣向勝不退門なり、是れを名けて七つとす。  
能治所治契當門とは、その相いかん、本に曰く。

「(二) 是の中には未だ正定聚に入らざる衆生に依る、故に修行信心分を説く。」

論じて曰く、「是の中には未だ正定聚に入らざる衆生に依る」とは、即ち是れ能治なり、  
所謂る所化の境界なるが故に、修行信心分を説くとは、即ち是れ能治なり、所謂る、能化  
の教法なるが故に。所化の境界その量いかん、謂く二聚の衆生を攝するが故に、云何  
が二つとする、一つには邪定聚、二つには不定聚なり、是れを名けて二つとす、所以  
いかなとなれば、この二つの衆生は、皆悉く未だ正定聚に入らざるが故に、「契當」と

疏五卷廿六丁、開解  
六卷十三丁、開解  
三十一卷初丁、開解  
一十八卷初丁、開解  
快鈔初日下(第二十册)  
十册)義記下末十  
九丁右。

(二) 釋決第五第四  
分眞生二門參照。

言ふはその相いかん、謂く二つの衆生の中に各契かちふ教説なるが故に、契相はいかん、謂く、邪定聚の衆生に被らしめんと欲ふが故に信心門を説く、不定聚の衆生に被らしめんと欲ふが故に修行門を説く、所以いかんとなれば、進入の次第それ法爾の故に、謂く、未信の人は先づ信を起すが故に、その已信の人は直に修行するが故に、復次に通じて利益するが故に。

初二。宥快鈔二日下

〔二〕すでに能治所治契當門を説きつ、次に信心品しんしん分類分割門を説かん、本に曰はく。

『何等か信心ぞ、云何が修行する、略して信心を説くに四種あり、云何が四つとする、一つには根本を信ず、所謂る、樂がつて真如の法を念するが故に、二つには佛は無量の功德ありと信じて、常に念じて親近し供養し恭敬して、善根を發起し一切智を願求するが故に、三つには法は大利益ありと信じて、常に念じて諸の波羅蜜を修行するが故に、四つには僧は能く正しく自利々他を修行すと信じて、常に樂つて諸の菩薩衆に親近して如實の行を求學するが故に。』

論じて曰く、此の文の中に就て則ち三門あり、云何が三つとする、一つには直問信心品類門、二つには直問修行品類門、三つには略答顯示信心門なり、是れを名けて三つとす、

直問信心品類門と言ふは、所謂る、惣じて信心の量を問ふが故に、本の如し、「何等か信心ぞ」といふが故に、直問修行品類門と言ふは、所謂る、總じて修行の量を問ふが故に、本の如し、「云何が修行する」といふが故に、第三門の中に就て即ち三門あり、云何が三つとする。一つには惣答門、二つには惣問門、三つには廣答門なり、總答門と言ふは、所謂る、惣じてその所説を答するが故に、本の如し、「略して信心を説くに四種あり」といふが故に、惣問門と言ふは、所謂る、惣じてその所説を問ふが故に、本の如し、「云何が四つとする」といふが故に、第三の門の中に就て、故に四種の門あり、云何が四つとする、一つには信本令心平等門、二つには信佛欣有功德門、三つには信法精進修行門、四つには信僧令心無諍門なり、是を名けて四つとす、信本令心平等門と言ふは、所謂る、樂つて自の根本たる真如の理法を信じて無明の力に由つて差別なる一切の諸心を皆悉く一に會あして、平等ならしむるが故に、本の如し、「一つには根本を信ず、所謂る樂つて真如の法を念するが故に」といふが故に、信佛欣有功德門と言ふは、所謂る、樂つて無上大覺如來世尊を信じて、所有の無量無邊の一切の功德を欣求するが故に、本の如し、「二つには佛は無量の功德ありと信じて、常に念じて親近し

(二) 助道品、一切の萬行なり、一説には三十七品といふ、快二日下七丁左。

(三) 兩つの勝行、自利と利化なり。

(三) 論四丁右表、開解十三丁左、快鈔三日下初丁。

供養し恭敬して、善根を發起し、一切智を願求するが故に」といふが故に、信法精進修行門と言ふは、所謂る、樂つて三世の諸佛を自の恩父と爲し、自の恩母と爲し、自の恩師と爲して改壞すること能はず生滅すること能はず、虚空金剛の不動の軌則なり、不可思議の中の不可思議殊勝の利益ありと信じて常恒に轉々として一切時に於て一切處に於て、一切の(二)助道品を修行するが故に、本の如し、「三つには法は大利益ありと信じて、常に念じて諸の波羅蜜を修行するが故に」といふが故に、信僧令心無諍門と言ふは、所謂る、樂つて一切無量の菩薩僧衆は(三)兩つの勝行を以て自の内徳と爲玉ふと信じて、若しは遠、若しは近、自の聞く時に隨ひ、自の見る時に隨ひ、自の思ふ時に隨ひ、往詣し、心を至して種々の深經種々の深論、種々の深理を種々の妙事を聽受して、斷僧の所に絶せざるが故に、本の如し、「四つには僧は能く正しく自利々他を修行すと信じて、常に樂つて諸の菩薩衆に親近し、如實の行を求學するが故に」といふが故に。

(三)すでに信心品類分割門を説きつ、次に修行方便善巧門を説かん、本に曰く。「修行に五門あつて能く此の信を成す、云何が五つとする、一つには施門、二つには戒門、三つには忍門、四つには進門、五つには止觀門なり、云何が施門を修行する

や、若し一切を見て來つて求索せんをば、所有の財物力らに隨つて施與して、以て自ら慳貪を捨て、彼れをして歡喜せしむ、若し厄難恐怖危逼を見ては、己れが堪任せるに隨つて無畏を施與す、若し衆生の來つて法を求むるあらば、己れが能く解するに隨つて、方便をもて爲めに説て、名利恭敬を貪求すべからず、唯し自利々他を念じて菩提に廻向するが故に、云何が戒門を修行するや、所謂る、不殺、不盜、不婬、不兩舌、不惡口、不妄語、不綺語、貪嫉、欺詐、諂曲、瞋恚、邪見を遠離す、若し出家ならば、煩惱を折伏せんがための故に、亦憤闘を遠離して常に寂靜に處すべし、少欲知足頭陀等の行を修習して、乃至小罪心にも怖畏を生じ、慚愧改悔して、如來所制の禁戒を輕しむることを得ざれ、當さに讒嫌を護つて、衆をして妄りに過罪を起さしめざるが故に。云何が忍門を修行するや、所謂る、他人の惱を忍んで心に報を懷かざるべし、亦當さに利衰、毀譽、稱譏、苦樂等の法を忍ぶべきが故に。云何が進門を修行するや、所謂る、諸の善事に於て心懈退せず、立志堅強にして怯弱を遠離す、當さに念すべし、過去久遠より已來虚しく一切の身心の大苦を受けて利益あること無しと、是の故に諸の功德を勤修し、自利々他して速かに衆苦を離るべ





門の數を建立するが故に、本の如し、「一つには施門、二つには戒門、三つには忍門、四つには進門、五つには止觀門なり」といふが故に、何が故に次第是くの如くなるや、謂く(一)修行者の六度の次第、法として是くの如くなるが故に、次に略問廣答散說門の中に就て故より五門あるが故に、故に五門あり、審かに觀察すべし、此の五種の門の中に各々に二門を具す、云何が二つとする、一つには略問門、二つには廣答門なり、是を名けて二つとす、その次第の如く數量を亂らす、審かに思擇すべし、第一の修行施門の中に「云何が施門を修行するや」とは、即ち是れ略問門なり、所謂る問を開くが故に、後々の諸門も是くの如く知るべし、廣答門の中に就て即ち三種の施あり、云何が三つとする、一つには財物施、二つには隨應施、三つには教法施なり、財物施と言ふは、謂く若し衆生あつて我が所に來到して、我が所有を乞はば、則ち疑はずして時に隨ひ處に隨つて、皆悉く施與して顧惜する所無きが故に、何等の物をか名けて財物とするや、幾ばく種の物があるや、所謂る二種の財物あるが故に、云何が二つとするや、一つには内物、二つには外物なり、是を名けて二つとす、内物の中に就て亦二種あり、云何が二つとするや、一つには無色、二つには有色なり、無色と言ふは即ち是れ心識なり、

(二) 有色の妙根  
五根をいふ。

有色と言ふは即ち是れ諸根なり、若し衆生あつて、我が所に來到して我が心識を乞はば、則ち惜まずして時に隨つて施與して彼を歡喜せしむ、若し衆生あつて我が所に來到してその所用に隨つて我が一々の(一)有色の妙根を乞はば、則ち惜まず、時に隨つて施與して彼れをして歡喜せしむ、是を名けて二種の内財物とす、外物の中に就て亦二種あり、云何が二つとするや、一つには有識、二つには無識なり、有識と言ふは、即ち是れ妻子奴婢等の類なり、無識と言ふは即ち是れ宮殿、舍宅、衣服、嚴具等の類なり、若し衆生あつて我が所に來到して此れ等の物を乞はば、則ち惜まず時に隨つて施與して彼れをして歡喜せしむ、是を名けて二種の外財物とす、本の如し、「若し一切を見て、來つて求索せんをば、所有の財産、力らに隨つて施與して、以て自ら慳貪を捨て彼れをして歡喜せしむ」といふが故に。すでに財物施を説きつ、次に隨應施を説かん、云何が名けて隨應施とするや、謂く、或は衆生あつて五根壞失して具足すること能はず、或は衆生あつて病苦無量にして安穩なることを得ず、或は衆生あつてその心愚癡にして明了なること能はず、行者その時に(二)賢士なるを以て、則ちその所應に隨ひ、その所當に隨ひ、その所宜に隨ひ、その所用に隨つて、能善く簡擇し、能善く分別し

(一) 賢士、大乘の  
行相の意、然に若  
し賢士を以ては  
他の賢士たるべきは  
他の賢士たるべきは  
隨つて除苦歡喜せ  
しむるの意と見る  
(快三日下八丁)

て、彼れの苦惱を除いて歡喜せしむるが故に、是の故に隨應施と言ふ、本の如し、「若し厄難、恐怖、危逼を見ては、己れが堪任せるに隨つて無畏を施與すといふが故に」、すでに隨應施を説きつ、次に教法施を説かん、云何が名けて教法施とするや、謂く、衆生あつて、若しは時不時、若しは親不親、若しは貴不貴、若しは愚不愚、若しは夫不夫、若しは女不女、若しは惡不惡、若しは人不人、是くの如く等の類、我が所に來到して法を欲求せん時に、則便ち惜ますして、無量無邊の廣大圓滿の大慈悲心を發起して、彼れの疑を決斷し、分に煩惱を除て徐く智恵を増し、彼の人を攝取して惡道に墮さず、無上大菩提に到らしむるが故に、是の故に説て教法施と言ふ、本の如し、「若し衆生有て來つて法を求むるあらば、己れが能く解するに隨つて、方便をもて爲めに説て、名利恭敬を貪求すべからず、唯し自利々他を念じて菩提に廻向するが故に」といふが故に。(二)すでに修行施門を説きつ、次に修行戒門を説かん、この門の中に就て則ち四門あり、云何が四つとするや、一つには建立戒相標宗門、二つには成就戒品勝處門、三つには具足戒行不輕門、四つには守護不令誹謗門なり、是を名けて四つとす、建立戒相標宗門と言ふは、所謂る、十種の清淨防轉戒を建立するが故に、本の如し、「云何が

快鈔四日丁初

(一)師母の戒は師匠軌範となる故に師さいひひ功徳を生ずるが故に母さいふ。(二)頭陀斗數にりて座垢を去るが如く戒によりて垢を去るものなれば頭陀といふ戒の頭陀は十二頭あり十六頭陀等の行あり(三)眼精戒人か眼精を大切にすべし(四)顯はせ(五)釋第十六卷(六)伏我無我參照

戒門を修行するや、所謂る、不殺、不盜、不婬、不兩舌、不惡口、不妄語、不綺語、貪嫉欺詐誣曲、瞋恚、邪見を遠離す」といふが故に。成就戒品勝處門と言ふは、所謂る、若し戒品を具足せんが爲めには、常に當さに散亂の雜處を遠離すべし、常に當さに寂靜勝處に親近し、その中に安住して捨離せざるべきが故に、本の如し、「若し出家ならば、煩惱を折伏せんがための故に、亦慣鬧を遠離して常に寂靜に處すべし」といふが故に。具足戒行不輕門と言ふは、所謂る、種々の妙行を修行し、深信の心を起して、如來所制の(一)師母の戒を輕賤することを得ざるが故に、本の如し、「少欲知足(二)頭陀等の行を修習して、乃至小罪心にも怖畏を生じ、慚愧改悔して如來所制の禁戒を輕しむることを得ざれ」といふが故に、守護不令誹謗門といふは、所謂る、佛の(三)眼精戒を護持し、終に破失せず、自利を具足し、種々の放逸譏嫌の衆生に妄想の過罪を發起せしめずして利他を具足し、大覺の海を圓滿し莊嚴するが故に、本の如し、「當さに譏嫌を護つて、衆生をして妄りに過罪を起さしめざるが故に」といふが故に。すでに修行戒門を説きつ、次に(四)修行忍門を説かん、この門の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには顯示畧忍伏我門、二つには顯示廣忍無我門なり、是を名けて二とす、顯示畧忍伏我門

(一) 阿世耶 Askyat 意樂  
と譯す、依て惡の  
阿世耶とは惡の意  
樂(想)なり。

(二) 依正 依報た  
る宮殿舎宅等と  
正報たる自身及び  
眷屬をいふ。

(三) 正住 菩薩な  
り、快十四丁左に  
涅槃經を引て釋せ  
り。

(四) 須彌 須彌山  
をいふ。  
右(二十一)卷(快鈔  
五)下初丁。

と言ふは、所謂る、若し衆生あつて惡の(一)阿世耶の境を造作して我が心を惱まさしめば、行者爾の時にその心能く忍んで動惱せざるが故に、本の如し「云何が忍門を修行するや、所謂る、他人の惱を忍んで心に報を懐かざるべし」といふが故に、顯示廣忍無我門と言ふは、所謂る、或は衆生あつて、飲食 衣服等の種々の財物を以て我が所に施與して、利益し歡樂せしめ、或は衆生あつて、劔杖等の種々の怖相を以て、我が所に來到して、我が(二)依正を損滅して自在なることを得ざらしめ、或は衆生あつて、兪惡、誹謗等の種々の穢語を以て、若しは遠、若しは近にして、我れを毀嫌し、或は衆生あつて(三)正住等の種々の徳を以て我が身を讚歎せん、是くの如く等の種々の事の中に於て、その心平等にして堅固不動なること(四)須彌の如くなるが故に、本の如し「亦當さに利衰、毀譽、稱譏、苦樂等の法を忍ぶべきが故に」といふが故に。(五)すでに修行忍門を説きつ、次に修行進門を説かん、この門の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには通示修行精進門、二つには別釋修行精進門なり、通示修行精進門と言ふは、所謂る、諸の種々の妙事に於て、この心轉勝し、勤欲精進して終に息まざるが故に、本の如し「云何が進門を修行する、所謂る諸の善事に於て心懈退せず、立志堅強にして怯弱を遠離す」といふが故に、別釋修行精進門の中に就て、故らに二門あり、云何が二つとする、一つには無障修行精進門、二つには有障修行精進門なり、無障修行精進門と言ふは、所謂る、行者是くの如くの念を作す、我れ無始過去の時よりこのかた、唯し虚妄不實の身心をのみ受けて、都べて金剛不壞の身心を受くること能はざることは、餘の因縁無し、唯し妙行の中に勤行せざるが故なり、我れ若し懈怠にして前の如く行せざれば、未來に向つて去るとも、また復都べて利益あること無き虚妄の身心を受けて出離の期無けん、我が自身すら尙し出離することを得ずして都べて自利を失す、何に況んや所餘の種々の有苦の衆生を救濟して利他を具足せんや、是の念を作し已つて、則便ら大精進の心を發起して行因の海を修行し、滿徳の果を莊嚴す、兩利を建立して缺偏無きが故に、本の如し「當さに念すべし、過去久遠より已來、虚しく一切の身心の大苦を受けて利益あること無しと、是の故に諸の功德を勤修し、自利々他して速かに衆苦を離るべし」といふが故に、有障修行精進門と言ふは、所謂る、若し衆生あつて、無始過去の餘業障あるが故に、魔外道及び惡鬼神のためめに惱亂せられて修行すること能はず、或は衆生あつて現在世の種々の事務のために

三二五

(一) 釋決第十四卷  
滅相品初信頓斷難  
の義  
(二) 八風 利衰毀  
譽稱讚苦樂なり  
靜心不動する故に  
八風さいふ  
(三) 九結 受、恚、  
慢、無明、見、取、  
疑、癡、憍、慳なり。

(四) 六時 晝三時  
夜三時の常行三昧  
なり。

(五) 論十丁左裏、  
開解卅二卷初丁、  
勸法廿一卷(八之  
二)初丁(有鈔六  
日)初丁(四十一  
册)釋決十四卷止  
觀事理止觀雙修  
同十六卷懺悔重罪  
參照。

牽纏せられて修行すること能はず、或は衆生あつて一切諸の種々の病苦のために逼惱せられて修行すること能はず、是くの如く等の諸の衆生は、耳に軌則の尊辭を聽聞し、眼の中に文教の説相を觀見すと雖、勤めて修行し默求の心を生ずること能はず、然れども若しその心勇猛精進して、種々の勝妙の方便を發起し堪任の心を存すれば、業障の海漸々波息み、功德の嶽彌々峰高うして、八風にも飄せられず、九結にも縛せられざるが故に、本の如し、「復次に、若し人信心を修行すと雖、先世より已來多く重罪惡業障あるを以ての故に、魔邪諸鬼の爲めに惱亂せられ、或は世間の事務の爲めに種々に牽纏せられ、或は病苦の爲めに惱まざる、是くの如く等の衆多の障礙あり、是の故に應さに勇猛精勤して、晝夜六時に諸佛を禮拜し、誠心に懺悔し勸請し隨喜して、菩提に廻向すべし、常に休廢せざれば諸障を免るゝことを得て、善根増長するが故に」といふが故に、すでに修行進門を説きつゝ、次に修行止觀門を説かん、この門の中に就て即ち四門あり、云何が四つとする、一つには惣標惣釋止觀門、二つには惣標惣釋觀輪門、三つには略釋決擇隨順門、四つには廣釋決擇止觀門なり、是れを名けて四つとす、惣標惣釋止觀門と言ふは、謂く、慮知の心を止め、散亂の思ひを礙へ、一中寂靜の性に

(一) 第三重第九  
主觀佛參照、標陀  
は主と譯し、阿羅  
如く根本定、加行  
定を顯はせるもの  
なり。

(二) 第三重第九、  
十信理觀參照。  
Samahāra  
(三) 奢摩他 止、  
寂止、寂靜等の意。  
(四) 釋決十六卷觀  
主定件參照。  
Vipassana  
(五) 毘跋舍那 觀  
又は正見と譯す。

(六) 第三重第九卷  
廣釋觀輪參照。

(七) 第三重第九卷  
止觀通局參照。

安住して、一切境界の相に出でず、定標陀に隨順する阿羅觀の義の故に、本の如し、「云何が止觀門を修行するや、言ふ所の止とは、謂く、一切の境界の相を止めて、奢摩他に隨順する觀の義の故に」といふが故に。惣標惣釋觀輪門と言ふは、謂く、明かに因縁の道理を簡擇して、審かに無常の形相を分別し、能善通達し能善く、遍知して觀標陀に隨順する阿羅觀の義の故に、本の如し、「言ふ所の觀とは、謂く、因縁生滅の相を分別して、毘跋舍那に隨順する觀の義の故に」といふが故に、略釋決擇隨順門と言ふは、謂く、定に隨ふ時にも彼の觀に即ち順じ、觀に隨ふ時の中にも彼の定に即ち順じて具足く離れずして轉ずるが故に、本の如し、「云何が隨順する、この二義を以て漸々に修習し、相捨離せずして雙べて現前するが故に」といふが故に、廣釋決擇止觀門の中に就て即ち四門あり、云何が四つとする、一つには成就止觀因縁門、二つには、直示修行止觀門、三つには修行止觀得益門、四つには簡入不入分際門なり、是れを名けて四つとす、第一の成就止觀因縁門の中に就て即ち十五種あり、云何が十五とする、一つには住處寂靜の因縁、二つには獨一不共の因縁、三つには所居方善の因縁、四つには衣服具足の因縁、五つには飲食具足の因縁、六つには結界護淨の因縁、

(二) 論十二丁左  
表、快鈔七丁初  
空なり。

(三) 覺輪 覺は尋  
伺の義、南北は寒熱  
の義、南は北に尋増  
等ある故に尋増  
長動轉して定を修  
し難き意、更ら  
下に説あり、快  
二丁又參照。七日  
語不明。毘又羅虫  
譯

七つには舍宅造立の因縁、八つには言語不出の因縁、九つには座像造立の因縁、十には坐其座中の因縁、十一には出入時節の因縁、十二には知識善友の因縁、十三には印知邪正の因縁、十四には植善林樹の因縁、十五には字輪服膺の因縁なり、是を十五種の大因縁と名く、住處寂靜の因縁と言ふは、謂く若し彼の止輪門を修せんがためには、山林等の空閑の處の中に居して、散亂聚落の處を遠離するが故に、所以いかんとなれば、散亂の處の中には彼の止輪門成就し難きが故に。(一) 獨一不共の因縁と言ふは、謂く、若し彼の止輪門を修せんがためには、(二) 一界内の中に二人共住すれば理を得ざるが故に。所以いかんとなれば、互に動煩するが故に。所居方善の因縁と言ふは、謂く、若し彼の止輪門を修せんがためには、東西の兩方の中に居止して南北の方の中には居することを得ざるが故に、所以いかんとなれば、(三) 覺輪あるが故に。衣服具足の因縁と言ふは、謂く、若し彼の止輪門を修せんがためには、必ず三種の衣を用るべきが故に、云何が三つとする、一つには黄色、二つには赤色、三つには白色なり、是くの如くの三衣は一時に同じく用るが故に、所以いかんとなれば、(四) 毘又羅虫入ること能はざるが故に。飲食具足の因縁と言ふは、謂く、若し彼の止輪門を修せんがためには、

(一) 伽摩伊陀耶  
合集譯す、即ち  
粘食なり。  
(二) 婆尼羅 散離  
と譯す、即ち糲食  
なり。  
(三) 中より 日中  
以前なり。  
(四) 定 異説なる  
も食する時間の規  
定を見るを以て文  
に親し。  
(五) 俱盧舍 淨穢  
中間と譯す、五百  
弓量(わが十町に  
當る)の間を結界  
するが如きない  
ふ。  
(六) 咒 具さに呪  
禁といふ支那に行  
はれたる神驗法な  
り、佛教の陀羅尼  
を譯せる字なり。  
(七) 一丈四方即ち  
方丈といふ。  
(八) 品重 品は類  
別の義、定室の門  
戸牆壁各を十重に  
する意にして喧嘩  
を防ぐなり、而し  
これは下の第七第  
八の總説なり。

必ず當さに乾練せる(一) 伽摩伊陀耶を用ふべし、所餘の穀等是用ること能はざるが故に、所以いかんとなれば、彼の伽摩伊陀耶は仙性あるが故に、復次に、(二) 若し婆尼羅等を用るべきこと無きが故に、受用の時節は唯し(三) 中よりを用ゆ、(四) 定あること無きが故に。結界護淨の因縁と言ふは、謂く、若し彼の止輪門を修せんがためには、自居の室を離ること(五) 一俱盧舍量の中にて、一百十遍の大神呪を誦すべし、その相いかん、謂く、即ち(六) 呪を誦じて曰く。  
坦哇吡那羅帝婆又尼阿摩哪迦陀帝婆婆阿婆囉囉陀闍佉那郎阿伊陀帝奄々々帝哆  
跋陀々哪摩那尸只帝奢陀笈尼又羅尼鳩阿訶鳩多呬奄阿陀々帝摩訶伽耶帝摩訶阿伽  
耶帝健多尼阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅  
若しこのを誦じ呪已訖れば、即便ち結界し護淨す、所以いかんとなれば、種々の毒類  
入ること能はざるが故に。舍宅造立の因縁と言ふは、謂はく、若し修定の舍宅を造ら  
んがためには、當さに十事を具すべし、云何が十とする、一つには門戸の事、唯し東  
方に向つて餘方に非ざるが故に、二つには高下の事、東方は漸く高く西方は漸く下る  
が故に、三つには方角の事、(一) 一方の中に於て各一丈なるが故に、四つには(二) 品重の

事、十重を重ねるが故に、五つには作物の事、唯し五種を用ゐて餘種に非ざるが故に、云何が五つとする、一つには金、二つには銀、三つには銅、四つには鐵、五つには松木なり、是れを名けて五つとす、六つには戸摺コウワンの事、その地の量と等しくして差別無きが故に、七つには戸重の事、十戸を重ねるが故に、八つには戸樞ジュの事、音聲無きが故に、九つには壁牆の事、その高さ一丈にして十重を重ねるが故に、十には出入の事、彼の諸戸の中に各の呪を誦するが故に、その相いかん、謂はく、若し出でんとするときは即ち呪を誦して言はく。

喃摩唵帝摩訶鳩毘那阿羅婆提陀々阿伽度般枳阿枳尸遮婆訶諾帝婆枳摩毘摩婆枳摩阿那阿那尸枳尼尸枳娑婆呵。

若しこの神呪一千遍を誦すれば即便ち時に順じて皆悉く開通す、若し入らんとするときは、即ち呪を誦して言はく。

南無喃枳那南無筏尸陀南無誦阿帝、南無誦阿嚩那、南無鍵陀尼娑婆呵。

若しこの神呪一千五百遍を誦じ已訖れば、即便ち時に順じて皆悉く開閉す、言語不出の因縁と言ふは、謂はく、若し彼の止輪門を修せんがためには、一切時に於て一切處

丁。快鈔八日下初

(三) 陀羅帝 譯名不明、古來半疊の類ならんと推定せり。

(四) 賊綱 かままりつゝまる。

(四) 根の上 脚の上をいふ。  
(五) 定 一説には止定を建立する義、又一説には定の字は言の誤ならんあり。

に於て言を出さざる故に、所以いかんとなれば、その言説に隨つて心識出づるが故に、(一) 座像造立の因縁と言ふは、謂はく、若し修定の座像を造らんがためには、當さに五事を具すべし、云何が五つとする、一つには作物の事、松木を用るが故に、二つには高量の事、自身の半の如くして増減せざるが故に、三つには方角の事、一方の中に於て各四尺なるが故に、四つには方向の事。唯し東方に向つて餘方に非ざるが故に、五つには座上の具の事、唯し(三) 黃陀羅帝と及び黃坐具とを用るが故に、是を名けて五つとす。坐其座中の因縁と言ふは、謂はく、若し彼の止輪門を修せんがためには、當さに十事を具してその座の中に坐すべし、云何が十とする、一つには足等の事、兩膝の末に其兩の母指を中て、互相に契當して差無からしむるが故に、二つには膝等の事、兩膝を平攝ヒキツメして差無からしむるが故に、三つには腰端の事、その腰を端直にして(四) 賊綱無きが故に、四つには手累の事、兩手相對して右手を下になし左手を上になし、左手を下になし右手を上になすこと一日を經已つて、互々に易變かへて忘失せざるが故に、亦復其の手を(五) 根の上に置くが故に、五つには頸端の事、その頸の質端直不動にして(五) 定めて建立するが故に、六つには面端の事、その面の相貌仰がず俯ぶかず平相ならしむ

(一) 大虚空字輪  
輪相を見て餘を視  
ざる意。

(二) 辰午 朝食と  
晝食の時なり。辰  
には粥、晝は齋な  
り。

(三) 金剛印、所現  
の字輪なり、字輪  
を以て邪正の相を  
堅固に決定する義  
なり。

るが故に、七つには口相の事、その口の相廣からず狭からず中間を開くが故に、八つには鼻相の事、その氣息を出すこと差違無からしめて一より出ださるが故に、九つには眼相の事、その眼根の量は上がらず下がらず平等に舒ぶるが故に、十には止眼の事、その眼根を置く處は、(一)大虚空字輪の中に安置して恒に離れざるが故に、是れを名けて十とす。出入時節の因縁と言ふは、謂く、若し彼の止輪門を修せんがためには、唯し(二)辰と及び午の二時を用ふ、この餘時の中には出入せざるが故に。知識善友の因縁と言ふは、謂はく、若し彼の止輪門を修せんがためには、深智恵の人を以て友とするが故に。印知邪正の因縁と言ふは、謂はく、若し彼の止輪門を修せんがためには、その像の量に随つて(三)金剛印を須めて則ち邪及び正を了知するが故に、その相いかん、謂はく、即ち呪を誦じて曰く。

坦陁唎嚩那鄔陀帝、婆羅枳陀尼、遮迦囉哆耶、掩阿尸帝那、娑婆呵。

若しこの神呪四千六百五十遍を誦じ已訖れば、即ち彼の像の中に二つの字輪を付す、謂はく、若し邪人なれば邪字輪を付し、若し正直の人なれば正字輪を付す、之を以て別とす。植善林樹の因縁と言ふは、謂はく、若し止輪門を修せんとせん人は、自室の

(一) 圓 此の字は  
非梵非漢の文字な  
り、依て傳教大師  
は釋論に斯かる  
文字ある故に偽作  
となすも東密にて  
は之を會通す。  
(二) 方寸 胸中な  
り。

(三) 論十五丁左  
表、快鈔九日下初

前の中に二種の大吉祥草を植うるが故に、云何が二つとする、一つには松木、二つには石榴木なり、是を名けて二つとす。字論服膺の因縁と言ふは、謂はく、若し彼の止の輪門を修せんとする人は、必ず當さに(一)圓字輪を服すべし、何れの處にか服する、謂はく、(二)方寸の處なるが故に、何の義を以ての故にか必ずこの輪を付するや、謂はくこの字輪は、三世諸佛と無量無邊の一切菩薩との大恩の師長、大恩の父母、大恩の天地、大恩の海なるが故に、この因縁の故に止を修せんとせん人は、當さにこの輪を付すべし、是くの如くの因縁無量ありと雖、而も今この摩訶衍論の中には第一の因縁を明して餘を明さることは、初を擧げて後を攝するが故に是くの如きのみ、本の如し、「若し止を修する者は靜處に住し」といふが故に。(三)すでに成就止輪因縁門を説きつ、次に直示修行止輪門を説かん、この門の中に就て則ち七門あり、云何が七つとする、一つには存心決定門、不生不滅の真空の理の中にその心を定むるが故に、本の如し、「端坐し正意して」といふが故に、二つには不着身體門、能善くこの身は空無にして、それ本より自性不可得なりと通達するが故に、本の如し、「氣息にも依らず、形色にも依らず、空にも依らず、地水火風にも依らず」といふが故に、三つには不着心識門、能

(二) 無相 當論の  
標文には「無想」と  
せり。

善く慮知の心は自性空無にして、所有無しと通達するが故に、本の如し、「乃至見聞覺知にも依らず、一切の諸想と隨念とを皆除き、亦除想をも遣る」といふが故に、これより已下はその身心の空無の因縁を作す、本の如し、「一切の法は本よりこのかた(三)無相にして念々に生ぜず念々に滅せず、亦心に隨つて外に境界を念することを得ざれ」といふが故に、四つには不着不着門、能遣の心をも亦遣除するが故に、本の如し、「後には心を以て心を除け」といふが故に、五つには集散會一門、散動の心を攝して一中に置くが故に、本の如し、「心若し馳散せば即ち當さに攝束して正念に住すべし」といふが故に、六つには顯示正念門、諸法は唯一心なることを顯示するが故に、本の如し、「是の正念とは、當さに知るべし、唯心にして外の境界無し、即ち復此心も亦自相無くして念々不可得なり」といふが故に、七つには不離恒行門、是くの如くの定心は、一切の時に於て、一切の處に於て、常恒に相續して捨離せざるが故に、本の如し、「若し坐起去來進止の所作に従つて、一切の時に於て、常に方便を念じて隨順し觀察すべし」といふが故に、すでに直示修行止輪門を説きつ、次に修行止輪得益門を説かん、謂はく、若し人あつて能くこの定を修すれば(三)漸々に轉々して煩惱の海を竭くし、業障の岳(カク)を崩して真如

(三) 釋決四十信  
斷煩惱難の證文。

(二) 論十六丁左表  
快鈔十丁下初丁。

定に入り、一切の法に達して不退に到るが故に、本の如し、「久習淳熟すればその心住することを得、心住するを以ての故に、漸々猛利にして真如三昧に隨順得入し、深く煩惱を伏し信心増長して、速かに不退を成ず」といふが故に、(二)すでに修行止輪得益門を説きつ、次に簡入不入分際門を説かん、この門の中に就て即ち二意あり、云何が二つとする、一つには入趣意、二つには不入意なり、入趣意と言ふは、所謂る、或は衆生の深法に趣入して心に疑ふところ無きあり、或は衆生の甚深の法を聞て、その心決定して不信を生ぜざるあり、或は衆生の甚深の法を聞て、即便ち尊重して誹謗を生ぜざるあり、或は衆生の重業障無きあり、或は衆生の我慢の心無きあり、或は衆生の懈怠の心無きあり、是くの如くの六人は、佛の種性に入るより決定して疑はず、是を入趣意と名く、不入意と言ふは、所謂る、若し衆生あつて、この六つと相違すれば、永く三寶の種子を斷絶すること決定して疑はず、是れを不入意と名く、本の如し、「唯し疑惑、不信、誹謗、重罪業障、我慢、懈怠とを除く、是くの如く等の人に入ることを能はざる所なり」といふが故に。すでに略問廣答散説門を説きつ、次に讚歎三昧功德門を説かん、この門の中に然し即ち二門あり、云何が二つとする、一つには體大無邊殊勝門、



二つには眷屬無盡殊勝門なり、是を名けて二つとす、體大無邊殊勝門と言ふは、此の三昧を修すれば、一切の無量の諸法は、同體一相にして差別無しと通達するが故に、本の如し、「復次に、是の三昧に入るが故に、則ち法界の一相を知る、謂く、一切諸佛の法身と衆生の身と平等無二なるを、則ち(一)一行三昧と名く」といふが故に、眷屬無盡殊勝門と言ふは、所謂る、即ち是の眞如三昧は、能く一切無量無邊の(二)金剛三昧のために正根本と作つて、而も能く出生し増長するが故に、本の如し、「當さに知るべし、眞如は是れ三昧の根本なり、若し人修行すれば、漸々に能く無量の三昧を生ず」といふが故に。

(一) 一行三昧 眞如法身の異名なり  
 香象の釋は之と異なる  
 (二) 金剛三昧 眞實を顯す。

國譯釋摩訶衍論卷第八終

國譯釋摩訶衍論卷第九

龍樹菩薩の造

すでに修行方便善巧門を説きつ、次に廣釋魔事對治門を説かん、本に曰く。

『或は衆生あつて善根力無ければ、即ちもろくの魔と外道と鬼と神とのために惑亂せらる、若しは坐中に於て形を現じて恐怖せしめ、或は端正と男女との等相を現す、當さに唯心を念すれば境界則ち滅して終に惱を爲さじ、或は天像と菩薩の像を現じ、亦是如來の像を作して相好具足し、若しは陀羅尼を説き、若しは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を説き、或は平等にして、空、無相、無願、無怨、無親、無因、無果と畢竟空寂なる是れ眞の涅槃なりと説き、或は人をして宿命過去の事を知り、亦未來の事を知て、他心智を得しめ、辯才無礙にして、能く衆生をして世間の名利の事に貪着せしめ、又人をして數瞋り數喜んで性常准なること無く、或は慈愛多く睡り多く病多く、その心懈怠に、或は卒に精進を起して後には便ち休廢して不信を生じ、疑ひ多く慮り多く、或は本の勝行を捨て、更に雜業を修し、或は世事に着し

疏第五卷卅四丁  
 左記第六卷卅三丁  
 丁右開解卅二卷  
 初丁(十九册)快鈔  
 初日下(四十二册)  
 義記下末二十七丁  
 右

て種々に牽纏せしめ、亦能く人をしてもろくの三昧を得しむ、少分相似すれば皆是れ外道の所得にして眞の三昧に非ず、或は復、人をして若しは一日若しは二日若しは三日乃至七日定中に住して自然の香美の飲食を得、身心適悦して飢えず渴せざらしめ、人をして愛着せしむ、或は亦人をして食に分齊無く、乍に多く乍に少なくして顔色變異ならしむ、是の義を以ての故に、行者常に智慧をして觀察して此の心をして邪網に墮せしむること勿るべし、當さに勤めて正念なるべし、不取不着なれば則ち能く是の諸の業障を遠離すべし、應さに知るべし、外道所有の三昧は、みな見、愛、我慢の心を離れず、世間の名利恭敬に貪着するが故に、眞如三昧とは見相にも住せず得相にも住せず、乃至出定にも亦懈怠無く、所有の煩惱漸々に微薄なり、若しもろくの凡夫この三昧法を習はずして、如來種性に入ることを得といはば、この處りあること無し、世間の諸禪三昧を修すれば、多く味着を起し我見に依るを以て、三界に繫屬して外道と共す、若し善知識の所護を離れぬれば則ち外道の見を起すが故に。』

二鈔四卷廿四丁  
右已下。

論じて曰く、則ちこの門の中に自ら二門あり、云何が二つとする、一つには略説略

一受樂 佛法を  
受樂するなり。  
二守護 佛法を  
守護するなり。

三快鈔二日下初

四 March  
覺 殺者と譯す。

示惣持門、二つには廣説廣示散割門なり、第一の門の中に即ち五門あり、云何が五つとする、一つには衆生勝劣不同門、二つには能作障事假人門、三つには顯示所作業用門、四つには顯示對治行法門、五つには因治之力得益門なり、是を名けて五つとす、衆生勝劣不同門といふは、二種の衆生の各異なるが故に、云何が二とする、一つには因縁具足の衆生、二つには因縁闕失の衆生なり、具足の衆生とは、五事を具するが故に、闕失の衆生とは四事を闕するが故に、云何が五具なりや、一つには信具、深く愛樂するが故に、二つには人具、能く守護するが故に、三つには法具、能善く正邪の區を通達するが故に、四つには時具、應に隨つて當るが故に、五つには性具、眞性あるが故に、是を名けて五つとす、若し衆生あつてこの五事を具しつれば終に障礙無し、云何が四闕なりや、謂はく、彼の前の四つと相違するが故に、若し衆生あつて眞性ありと雖この四事を闕すれば、終に障を離ること無し、今この文の中には闕を取ること知ぬべし、本の如し、「或は衆生あつて善根力無ければ」といふが故に。

すでに衆生勝劣不同門を説きつ、次に能作障事假人門を説かん、障を作す假人無量ありと雖、而も四つを出でず、云何が四つとする、一つには魔、二つには外道、三

△四種の大鬼  
天、陰、死、鬼、類、を、い、ふ、。

△出現經一説  
には、陀、夷、(出、現、の、經、に、は、陀、夷、と、い、ふ、) 外、道、を、説、く、但、し、魔、明、な、ら、ず、一、説、に、は、世、間、流、布、の、經、の、意、に、し、て、別、に、一、經、を、指、す、に、非、ず、(開、解、八、丁、左、快、四、丁、參、照、)

△伊、異、本、に、は、伴、と、せ、り。

△節、四、季、の、相、を、現、す、る、を、い、ふ、。

△飛、騰、の、境、を、行、者、に、む、る、の、意、一、説、に、は、行、者、を、飛、騰、せ、し、む、の、意、と、す、(三、六、根、六、識、通、即、の、境、を、作、す、の、意、或、は、親、し、ま、し、め、或、は、不、和、な、ら、し、む、る、と、い、ふ、六、親、と、は、一、説、に、よ、れ、ば、父、母、兄、弟、妻、子、)

△相、捨、離、せ、ず、行、者、を、離、れ、ざ、る、な、り、(四、) 増、異、本、に、は、境、と、す、若、し、増、と、せ、ば、力、用、の、増、大、と、い、ふ、意、な、り、(五、) 提、鬼、の、名、を、指、す、(六、) 第一、遮、昆、多、

つには鬼、四つには神なり、是を名けて四つとす、言ふ所の「魔」とは、(二)四種の大魔と三萬二千の眷屬の魔衆となり、「外道」と言ふは、九十六種のもろくの<sup>ダ</sup>大外道と九萬三千の眷屬の外道となり、言ふ所の「鬼」とは、十種の大鬼と五萬一千三百二種のもろくの眷屬の鬼となり、言ふ所の「神」とは、十五の大神と五萬一千三百二種のもろくの眷屬の神となり、是くの如くの諸類は、一切皆悉く正教を礙亂して非道に向はしむるが故に邪道と名く、魔及び外道の名義差別は、(三)出現經の中に分明に説くが故に、且らく略して釋せず、鬼及び神の事は出現經の中に分明なること無きが故に、更らに釋を造作して綱要を略説すべし、十鬼と言ふは、名字いかん、一つには遮毘多提鬼、二つには伊伽維尸鬼、三つには伊提伽帝鬼、四つには婆那健多鬼、五つには余羅爾黎提鬼、六つには班尼陀鬼、七つには阿々彌鬼、八つには閻佉婆尼鬼、九つには多阿多伊多鬼、十には埴惕鬼なり、是を名けて十とす、是くの如くの十鬼の用、おの／＼いかなぞ、若し第一の鬼は、或は晝の境を作し、或は夜の境を作し、或は日月及び星宿の境を作し、或は(四)節の境を作し、應に隨つて變轉す、若し第二の鬼は、種々の香味と、種々の衣具と、種々の草木との境を作して應に隨つて變轉す、若し第

三の鬼は、地水火風の境を作して應に隨つて變轉す、若し第四の鬼は(五)飛騰の境を作して應に隨つて無礙なり、若し第五の鬼は、もろくの(六)根識閉開の境を作して、應に隨つて無礙なり、若し第六の鬼は、(七)六親眷屬の亦有亦無の境を作して、應に隨つて無礙なり、若し第七の鬼は、老少の境を作して應に隨つて無礙なり、若し第八の鬼は、有智無智の境を作して應に隨つて無礙なり、若し第九の鬼は有る無きの境を作して、應に隨つて無礙なり。若し第十の鬼は、蝎、蠅、蟻、龍、虎、狼、獅子の種々の音聲等の境界を作して、應に隨つて無礙なり、是れを名けて因とす、是くの如くの諸用は、おの／＼何の力に因つてか而も成就することを得るや、おの／＼三事に因つて而も成就することを得、いかなが三つとする、一つには師、二つには教、三つには習なり、師とは、謂はく教人なり、教とは、謂はく所學なり、習とは、謂はく宿熏なり、是を名けて三つとす、是くの如くの十鬼は、恒に一切の時に(八)相ひ捨離せず、俱行俱轉して障礙の事を作す、用の名字は、(九)増に従つて建立す、(十)第一の稱の如し。十五の神とは、名字いかん、一つには筏羅々健多提神、二つには阿只陀彌黎尼神、三つには補多帝陀訶々婆神、四つには閻毗摩只尼神、五つには那多婆奢神、六つには多

々地々神、七つには阿里摩羅神、八つには尸及尼帝婆竭那神、九つには班彌陀羅多  
 提神、十には唵々吟々神、十一には阿々訶帝神、十二には修利彌尼神、十三には頭々  
 牛頭神、十四には婆鳩神、十五には精媚神、是を名けて十五と名く、この十五の神の  
 用、おのおのいかん、(一)若し第一の神は聰明の境を作し、若し第二の神は、闇鈍の境を  
 作し、(二)若し第三の神は、樂有光明の境界を作し、(三)若し第四の神は、樂空光明の境界  
 を作し、若し第五の神は、(四)浮散の境を作し、若し第六の神は、(五)專注の境を作し、若し  
 第七の神は、空を惡み有を善する境界を作し、若し第八の神は、一切覺者の境界を作  
 し、若し第九の神は、我覺他惑の境界を作し、若し第十の神は、具さに修行せざる境  
 界を作し、第十一の神は、無を無する境を作し、第十二の神は、速かに進退する境界  
 を作し、第十三の神は、(六)移轉の境を作し、第十四の神は、堅固の境を作し、第十五の  
 神は、應時の境を作す、是くの如くの十五の大神王は、恒に一切の時に相ひ捨離せず、  
 俱行俱轉して而も礙事を作して行者を惱亂す。魔と及び外道といかんが差別ありや、  
 いふ所の魔とは、惡事を作さしめ、外道といふは善事を捨てしむ、二種の差別是くの  
 如く知るべし、鬼と并びに神といかんが差別ありや、身を障ゆるを鬼とし、心を障

(一) 第一第二の神は聰明闇鈍なるが之の同異に依りて鬼の同異に依りて能作の人は異れども所作の境は同と(快九丁左)  
 (二) 第三神は光明あるところを樂ふ神  
 (三) 第四神は光明無きところを樂ふ神  
 (四) 浮散 散亂の義  
 (五) 專注 寂靜の義  
 (六) 移轉 轉變の義

(一) 論五丁左表、快三日下。

(二) 外人 四種の邪類を指す。

(三) 俱行 順逆並存する故に爾か云ふ。

ゆるを神とす、二種の差別是くの如く知るべし、(一)是くの如くの四障を當さにいかんが對治すべきや、この中の對治に即ち四種あり、いかんが四つとする、一つには隨順隨轉對治、二つには相逆相違對治、三つには俱行對治、四つには俱非對治なり、隨順隨轉對治といふは、即ちこれ無礙自在對治なり、所謂る、若し彼の(二)外人、是くの如くの事を作して行者の心を亂さば、所亂の行者即ちこの念を作すべし、無始よりこのかたこの事はくの如くなれども終に破せざる事なり、所以いかんとなれば、是くの如くの諸見は、本有本覺の自家の實徳にして過患に非ざるが故に、若し是の解を作さば、もろくの邪見の類、伏從して化の如し、所以いかんとなれば、見の増損に隨つて無漏の性徳も亦大小なるが故に、是れを隨順隨轉對治と名く、相逆相違對治と言ふは、則ち是れ簡擇別相の對治なり、所謂る、若し彼の外人、是の如くの事を作して行者の心を亂さば、所亂の行者則ち方便を求めて逆廻し、遠移し、相反し、相違して簡擇せしむるが故に、是を相逆相違對治と名く、(三)俱行對治と言ふは、即ち是れ具足俱轉の對治なり、所謂る、一時に逆と順との二の治を具足して離れずして轉するが故に、是を名けて俱行對治の相とす、俱非對治といふは、即ち是れ無念無依の對治なり、所謂る、一切法に於

(二) 後の文一義  
には下の通達對治  
行法門とし、一義  
には通達治行法門  
及び簡擇眞偽令了  
門とせり。  
(三) 第三重第十虛  
科實科參照。  
(四) 惣相門 是惣  
門なり。

(四) 同品 同類な  
り依正まは依法正  
法なり。

て、所念あること無く所慮あること無く、所着あること無く、所求あること無し、その心寂靜にして無住に住するが故に、是を名けて俱非對治の相とす、是くの如くの對治の相は、(二) 後の文の中に於て說相明なるが故に、この決擇の中には略去す、本の如し、「即ちもろくの魔と外道と、鬼と神とのために」といふが故に。すでに能作障事假人門を説きつ、(三) 次に顯示所作業用門を説かん、この門の中に就て即ち二種あり、いかに二つとする、一つには是惣、二つには是別なり、(四) 惣相門の中に即ち二門あり、いかに二つとする、一つには惣相所作業用門、二つには通達對治行法門なり、第一の門とはその相いかん、所謂る、如上所說の一切の邪類、六道の像を現じて行者の心を亂すが故に、今當さに釋を作して分明に散說すべし、若し鬼と及び神とは、多分は地獄と餓鬼と畜生と阿修羅との四道を造作して、行者の心を亂す、本の如し、「若しは坐中に形を現じて恐怖せしめ」といふが故に、若し魔は、多分天道を造作して行者の心を亂す、本の如し、「或は端正と……現す」といふが故に、若し外道の衆は、多分分人道を造作して行者の心を亂す、本の如し、「男女との」といふが故に、「等相」といふは、則ち是れ同相なり、所謂る、(五) 同品の依正を造作して行者の心を亂すが故に、す

(一) 一心の法 行  
者の邊なり。  
(二) 一心の法 障  
障の邊なり。  
(三) 解脱の事 對  
治なり。

(四) 中々 至極中  
實の義、或は初の  
中は契當の義、後  
の中は中道の義  
と。  
(五) 一種の光明  
一心照了の義。  
(六) 心地 一心な  
り。  
(七) 風々 障礙な  
り波々亦障礙に喩  
ふ。

(八) 論七丁右裏、  
快鈔四日下。  
(九) 顯示所作業用  
門に總別の二門あ  
る中の別を指す。

でに惣相所作業用門を説きつ、次に通達對治行法門を説かん、謂はく、衆生あつて、是くの如くの觀を作す、一切諸法は唯一心量にして心外の法無し、すでに外の法無ければ、豈に(一) 一心の法と(二) 一心の法と障礙の事を作さんや、亦一心の法と一心の法と(三) 解脱の事を作さんや、障礙あること無く解脱あること無き一心の法は、一即ち是れ心なり、心即ち是れ一なり、一に別なる心無く、心に別なる一無し、一に法界を攝し、心に法界を攝す、無量無邊の妄想の境界は寂靜にして起すること無く、(四) 中々にして相を離れたり、一切の諸法は平等一味にして一相無相なり、(五) 一種の光明を作せば、(六) 心地の海には(七) 風々永く止んで波々盡く住まる、是を通達對治の相と名く、所以いかんとなれば、一切の行者若しこの對治門に歸せざれば、以て邪道を摧き謬執を伏すること無きが故に、本の如し、「當さに唯心を念すれば境界則ち滅して、終に惱を爲さじ」といふが故に。

(八) すでに通達對治行法門を説きつ、次に(九) 別相所作業用門を説かん、この門の中に就て則ち八門あり、いかに八つとする、一つには出現人相令信門、二つには出現言說亂識門、三つには得三世智惑人門、四つには不離世間縛纏門、五つには心性無常生亂門、

(二) 三の像  
像、菩薩像、如來天

(三) 阿呼門 外道  
所用の不共の言語  
なりと云ふ。

六つには令得邪定非真門、七つには勸請行者離邪門、八つには簡擇真偽令了門なり、是れを名けて八つとす、その次第の如く説相觀つべし、第一門の中に就て即ち三種の人あり、云何が三つとする、一つには天人、二つには菩薩人、三つには如來人なり、是を名けて三つとす、若し外道の人、(三) 三の像を作さんとするには、おの／＼幾くつの門をか用ゐる、おの／＼六門の故に、いかんが六つとする、一つには造像門、二つには禱祀門、三つには神呪門、四つには誦經門、五つには阿呼門、六つには勸請門なり、是を名けて六つとす、造像門といふは、何れの人の像をも用ゐんとする處に隨つて、その人の像を作るが故に、禱祀門といふは、種々の飲食と種々の衆生の身命とを以て、而も祀事を作すが故に、神呪門といふは、應に隨ひ處に當つて陀羅尼を誦するが故に、誦經門といふは、八陀多等の諸經を讀誦するが故に、(三) 阿呼門と言ふは、所作の事に隨つて餘語を須ゐず、唯し是の言を作して阿呼阿といふが故に、勸請門といふは、自の世尊に向つて神力を勸請するが故に、造像といふは、その相いかん、且らく天像を作る時の中には當さに如何がすべきや、謂はく、頭と面と眼と耳と鼻と舌と身と手と足と此の九種の處の中に、各々に一萬八千遍陀羅尼呪を誦してこの處を成

立す、謂はく、若し眼の像を作さんとする時の中には、即ち呪を誦して言く。

(一) 遮阿那尸帝、筏郎多、阿確、娑阿確、又娑帝跋迦帝、多陀々那、尸娑尸及那、隴陀郎  
遮尸、羅々々、々々々、々々々、諸々々、々々々、々々々、跋多々々帝、佉只囉、  
迦結那、囉々佉只那、遮尸訶々帝、加々々々、遮跋尸、毗健々々尸、那及娑婆婆健  
跋帝、阿多那尸、阿多那尸、跋多那、尸跋多那尸、訶娑訶伊多、梨々婆梨帝、遮々々  
々々、伊々々々々、多々々々々、尸々々々、隴々々々帝々々、那尸那、  
阿伊阿伊跋阿帝、跋多提、多々跋多提娑婆阿訶阿。

若しこの神呪、一萬八千遍を誦じ已訖れば、即ち眼の像、清淨に具さに成じて、精動  
き根轉じて、更らに轉明利なり、若し耳の像を造作せんとする時の中には、即ち呪を  
誦して言はく。

唵摩娑只伊那、唵摩娑只伊多、跋陀陀提郎阿郎阿那、揭囉揭那、那々囉々、那々囉、  
阿々々々々、阿々々々々、阿々、々々々、阿々、々々、遮々、遮々々、々々、々々々、  
陀々、々々々、々々々々、只々、々々、々々々々、帝々々々、々々々々、哪々、々  
々、々々々、囉々、々々々々、陀嗽、々々、陀々嗽、郎哆提、々々々、跋陀郎多提、

(一) 以下に列ぬる  
咒文は外道所用の  
咒なり。

毗嚩婆摩阿、跋陀娑揭那尸、娑婆訶、阿訶。

若しこの神呪、一萬八千遍を誦じ已訖れば、即ち耳の像、清淨に具さに成じて、開動し理轉して、更らに轉明利なり、若し鼻の像を造作せんとする時の中には、即ち呪を誦じて言はく。

婆枳囉囉帝、阿摩囉陀確嵐婆、阿尸提、枳鄒揭哪尸、呼々々々、阿々、毗遮鍵那、尸提樓、摩々、尸摩囉、鄒遮哪、薩婆提梨帝、鄒陀尼、竭坦哆陀毗、尸那、遮訶囉帝、阿訶、阿呼、那囉、那囉尸、枳阿囉喇婆、及々々々々々、々々々々々々、婆及、阿陀哆、伊那、嘶々、々々、々々、々々、々々、鍵々、々々、々々、々々、々々、々々、々々、阿訶、婆々々々、阿訶、訶枳噉、摩枳噉、陀枳噉、阿尸帝、鍵婆囉、閻々々々、囉々、々々、娑跋尸、吐々娑婆訶、阿訶。

若しこの神呪、一萬八千遍を誦じ已訖れば、即ち鼻の像、清淨に具さに成じて、隨動し導轉して、更らに轉明利なり、若し舌の像を造作せんとする時の中には、即ち呪を誦じて言はく。

阿摩、阿伊噉、佉那、尸帝、提跋、多提、阿枳婆哆哆、摩陀哆、阿囉帝、哪鄒婆哪

鄒、々々、尸鄒々、枳跋伊坦提阿枳、阿枳尼、毗奢鄒枳那、皓々々々、哪舒帝鄒舒帝、阿哆枳、槃踰枳、尸呵噉、摩闍阿哆帝、竭那呵婆那、訶鄒尸帝尸帝、迦毗提那阿枳陀、摩那尸、摩那尸、闍枳闍枳毗闍枳、娑婆訶、阿訶。

若し此の神呪、一萬八千遍を誦じ已訖れば、即ち舌の像、清淨に具さに成じて、了動し業轉して、更らに轉明利なり、若し身の像を造作せんとする時の中には、即ち呪を誦じて言はく。

佉阿伊帝、迦伊阿迦伊、阿迦伊婆婆、毗婆婆、婆々、々々、提舒、鄒摩舒鄒、跋哆阿跋陀、婆竭哪、訶伊、々々、訶々々々伊、唎鄒帝、摩那尸剖帝哆、佉枳囉鄒帝、噫々婆、噫々阿、曼尼婆婆、阿曼尼闍訶摩闍訶婆帝、竭那尸、阿囉帝、阿囉囉娑、阿訶、阿訶、阿訶訶。

若しこの神呪、一萬八千遍を誦じ已訖れば、即ち身の像、清淨に具さに成じて、方作し面變す、若し手の像を造作せんとする時の中には、即ち呪を誦じて言はく。

掩摩鄒噉帝、阿鄒阿曼踰、鄒哪婆毗哪尸、舒轉婆、迦囉囉鄒、(二)訶陀囉尸、摩囉尸、囉尸囉尸囉尸、枳唎帝、婆毗摩、阿毗摩訶、鍵跋帝、鄒哆那、婆囉那、娑婆阿訶、

(二)訶陀囉尸、本には阿陀囉尸とせり。







らに勸請するが故に、この義を以ての故に勸請門を立つ、(二)すでに造作天像差別門を説きつ、次に造作菩薩形相門を説かん、この門の中に就て亦六門を具す、然れども通と及び別と差別なるのみ、通は謂はく、禱祀門と神呪門と阿呼門と勸請門となり、別は謂はく、造像門と誦經門となり、別相の二つの中に、初めの造像門その相いかん、謂はく、前の説の如く九種の處の中に、おの／＼陀羅尼神呪を誦するが故に、おの／＼その相いかん、若し頭像を造作せんとする時の中には、即ち呪を誦して言はく。

哆々々々、阿哆哆帝、婆々々々、伊婆々々々帝、及娑及娑囉羅帝、闍闍々々々阿阿々々、摩阿帝娑婆訶、阿阿訶訶。

若しこの神呪、八千四百五十遍を誦じ已訖れば、即ち頭の像具足し成立す、若し面の像を造作せんとする時の中には、即ち呪を誦して言はく。

卍哪哪婆帝、阿々々々那々那々、摩佉噉鳩駄尸陀帝、摩阿阿摩阿唎那帝、娑婆訶阿阿訶訶。

若しこの神呪、三千七百遍を誦じ已訖れば、即ち面の像具足し成立す、若し眼の像を造作せんとする時の中には、即ち呪を誦して言はく。

駄跋尸哪摩尼、佉娑坦囉帝、遮閑哆、毘坐囉阿摩尸、陀摩尸陀、尼迦那迦那、僧佉囉、訶娑尼娑婆訶、阿阿訶。

若しこの神呪、八千四百五十遍を誦じ已訖れば、即ち眼の像具足し成立す、若し耳の像を造作せんとする時の中には、即ち呪を誦して言はく。

阿摩摩伊摩摩、娑摩摩、哆摩摩、鍵鳩提迦鳩帝、毗那尸、迦々々々々々、娑婆訶阿阿訶訶。

若しこの神呪、六萬一千遍を誦じ已訖れば、即ち耳の像具足し成立す、若し鼻の像を造作せんとする時の中には、即ち呪を誦して言はく。

娑婆々々毗娑婆、娑婆帝、鍵那尸娑婆訶阿訶訶。

若しこの神呪、十萬八千遍を誦じ已訖れば、即ち鼻の像具足し成立す、若し舌の像を造作せんとする時の中には、即ち呪を誦して言はく。

黑帝々々、闍帝々々、那陀々々、那提々々娑婆訶、阿阿訶訶。

若しこの神呪、五萬七千遍を誦じ已訖れば、即ち舌の像具足し成立す、若し身の像を造作せんとする時の中には、即ち呪を誦して言はく。

坦毗提、坦毗提、哆々坦毗提、那囉尸帝、娑婆訶、阿阿訶訶。

若しこの神呪、十萬四千遍を通じ已訖れば、即ち身の像具足し成立す、若し手の像を造作せんとするの中には、即ち呪を誦じて言はく。

唵提唵提、喃帝喃帝、呬陀呬陀、哪囉哪囉、娑婆訶、阿阿訶訶。

若しこの神呪、八萬一千遍を誦じ已訖れば、即ち手の像具足し成立す、若し足の像を造作せんとするの時には、即ち呪を誦じて言はく。

嚩𑖀𑖂𑖁𑖃𑖅𑖆𑖇𑖈𑖉𑖊𑖋𑖌𑖍𑖎𑖏𑖐𑖑𑖒𑖓𑖔𑖕𑖖𑖗𑖘𑖙𑖚𑖛𑖜𑖝𑖞𑖟𑖠𑖡𑖢𑖣𑖤𑖥𑖦𑖧𑖨𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛𑙜𑙝𑙞𑙟𑙠𑙡𑙢𑙣𑙤𑙥𑙦𑙧𑙨𑙩𑙪𑙫𑙬𑙭𑙮𑙯𑙰𑙱𑙲𑙳𑙴𑙵𑙶𑙷𑙸𑙹𑙺𑙻𑙼𑙽𑙾𑙿𑚀𑚁𑚂𑚃𑚄𑚅𑚆𑚇𑚈𑚉𑚊𑚋𑚌𑚍𑚎𑚏𑚐𑚑𑚒𑚓𑚔𑚕𑚖𑚗𑚘𑚙𑚚𑚛𑚜𑚝𑚞𑚟𑚠𑚡𑚢𑚣𑚤𑚥𑚦𑚧𑚨𑚩𑚪𑚫𑚬𑚭𑚮𑚯𑚰𑚱𑚲𑚳𑚴𑚵𑚷𑚶𑚸𑚹𑚺𑚻𑚼𑚽𑚾𑚿𑛀𑛁𑛂𑛃𑛄𑛅𑛆𑛇𑛈𑛉𑛊𑛋𑛌𑛍𑛎𑛏𑛐𑛑𑛒𑛓𑛔𑛕𑛖𑛗𑛘𑛙𑛚𑛛𑛜𑛝𑛞𑛟𑛠𑛡𑛢𑛣𑛤𑛥𑛦𑛧𑛨𑛩𑛪𑛫𑛬𑛭𑛮𑛯𑛰𑛱𑛲𑛳𑛴𑛵𑛶𑛷𑛸𑛹𑛺𑛻𑛼𑛽𑛾𑛿𑜀𑜁𑜂𑜃𑜄𑜅𑜆𑜇𑜈𑜉𑜊𑜋𑜌𑜍𑜎𑜏𑜐𑜑𑜒𑜓𑜔𑜕𑜖𑜗𑜘𑜙𑜚𑜛𑜜𑜝𑜞𑜟𑜠𑜡𑜢𑜣𑜤𑜥𑜦𑜧𑜨𑜩𑜪𑜫𑜬𑜭𑜮𑜯𑜰𑜱𑜲𑜳𑜴𑜵𑜶𑜷𑜸𑜹𑜺𑜻𑜼𑜽𑜾𑜿𑝀𑝁𑝂𑝃𑝄𑝅𑝆𑝇𑝈𑝉𑝊𑝋𑝌𑝍𑝎𑝏𑝐𑝑𑝒𑝓𑝔𑝕𑝖𑝗𑝘𑝙𑝚𑝛𑝜𑝝𑝞𑝟𑝠𑝡𑝢𑝣𑝤𑝥𑝦𑝧𑝨𑝩𑝪𑝫𑝬𑝭𑝮𑝯𑝰𑝱𑝲𑝳𑝴𑝵𑝶𑝷𑝸𑝹𑝺𑝻𑝼𑝽𑝾𑝿𑞀𑞁𑞂𑞃𑞄𑞅𑞆𑞇𑞈𑞉𑞊𑞋𑞌𑞍𑞎𑞏𑞐𑞑𑞒𑞓𑞔𑞕𑞖𑞗𑞘𑞙𑞚𑞛𑞜𑞝𑞞𑞟𑞠𑞡𑞢𑞣𑞤𑞥𑞦𑞧𑞨𑞩𑞪𑞫𑞬𑞭𑞮𑞯𑞰𑞱𑞲𑞳𑞴𑞵𑞶𑞷𑞸𑞹𑞺𑞻𑞼𑞽𑞾𑞿𑟀𑟁𑟂𑟃𑟄𑟅𑟆𑟇𑟈𑟉𑟊𑟋𑟌𑟍𑟎𑟏𑟐𑟑𑟒𑟓𑟔𑟕𑟖𑟗𑟘𑟙𑟚𑟛𑟜𑟝𑟞𑟟𑟠𑟡𑟢𑟣𑟤𑟥𑟦𑟧𑟨𑟩𑟪𑟫𑟬𑟭𑟮𑟯𑟰𑟱𑟲𑟳𑟴𑟵𑟶𑟷𑟸𑟹𑟺𑟻𑟼𑟽𑟾𑟿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂𑥃𑥄𑥅𑥆𑥇𑥈𑥉𑥊𑥋𑥌𑥍𑥎𑥏𑥐𑥑𑥒𑥓𑥔𑥕𑥖𑥗𑥘𑥙𑥚𑥛𑥜𑥝𑥞𑥟𑥠𑥡𑥢𑥣𑥤𑥥𑥦𑥧𑥨𑥩𑥪𑥫𑥬𑥭𑥮𑥯𑥰𑥱𑥲𑥳𑥴𑥵𑥶𑥷𑥸𑥹𑥺𑥻𑥼𑥽𑥾𑥿𑦀𑦁𑦂𑦃𑦄𑦅𑦆𑦇𑦈𑦉𑦊𑦋𑦌𑦍𑦎𑦏𑦐𑦑𑦒𑦓𑦔𑦕𑦖𑦗𑦘𑦙𑦚𑦛𑦜𑦝𑦞𑦟𑦠𑦡𑦢𑦣𑦤𑦥𑦦𑦧𑦨𑦩𑦪𑦫𑦬𑦭𑦮𑦯𑦰𑦱𑦲𑦳𑦴𑦵𑦶𑦷𑦸𑦹𑦺𑦻𑦼𑦽𑦾𑦿𑧀𑧁𑧂𑧃𑧄𑧅𑧆𑧇𑧈𑧉𑧊𑧋𑧌𑧍𑧎𑧏𑧐𑧑𑧒𑧓𑧔𑧕𑧖𑧗𑧘𑧙𑧚𑧛𑧜𑧝𑧞𑧟𑧠𑧡𑧢𑧣𑧤𑧥𑧦𑧧𑧨𑧩𑧪𑧫𑧬𑧭𑧮𑧯𑧰𑧱𑧲𑧳𑧴𑧵𑧶𑧷𑧸𑧹𑧺𑧻𑧼𑧽𑧾𑧿𑨀𑨁𑨂𑨃𑨄𑨅𑨆𑨇𑨈𑨉𑨊𑨋𑨌𑨍𑨎𑨏𑨐𑨑𑨒𑨓𑨔𑨕𑨖𑨗𑨘𑨙𑨚𑨛𑨜𑨝𑨞𑨟𑨠𑨡𑨢𑨣𑨤𑨥𑨦𑨧𑨨𑨩𑨪𑨫𑨬𑨭𑨮𑨯𑨰𑨱𑨲𑨳𑨴𑨵𑨶𑨷𑨸𑨹𑨺𑨻𑨼𑨽𑨾𑨿𑩀𑩁𑩂𑩃𑩄𑩅𑩆𑩇𑩈𑩉𑩊𑩋𑩌𑩍𑩎𑩏𑩐𑩑𑩒𑩓𑩔𑩕𑩖𑩗𑩘𑩙𑩚𑩛𑩜𑩝𑩞𑩟𑩠𑩡𑩢𑩣𑩤𑩥𑩦𑩧𑩨𑩩𑩪𑩫𑩬𑩭𑩮𑩯𑩰𑩱𑩲𑩳𑩴𑩵𑩶𑩷𑩸𑩹𑩺𑩻𑩼𑩽𑩾𑩿𑪀𑪁𑪂𑪃𑪄𑪅𑪆𑪇𑪈𑪉𑪊𑪋𑪌𑪍𑪎𑪏𑪐𑪑𑪒𑪓𑪔𑪕𑪖𑪗𑪘𑪙𑪚𑪛𑪜𑪝𑪞𑪟𑪠𑪡𑪢𑪣𑪤𑪥𑪦𑪧𑪨𑪩𑪪𑪫𑪬𑪭𑪮𑪯𑪰𑪱𑪲𑪳𑪴𑪵𑪶𑪷𑪸𑪹𑪺𑪻𑪼𑪽𑪾𑪿𑫀𑫁𑫂𑫃𑫄𑫅𑫆𑫇𑫈𑫉𑫊𑫋𑫌𑫍𑫎𑫏𑫐𑫑𑫒𑫓𑫔𑫕𑫖𑫗𑫘𑫙𑫚𑫛𑫜𑫝𑫞𑫟𑫠𑫡𑫢𑫣𑫤𑫥𑫦𑫧𑫨𑫩𑫪𑫫𑫬𑫭𑫮𑫯𑫰𑫱𑫲𑫳𑫴𑫵𑫶𑫷𑫸𑫹𑫺𑫻𑫼𑫽𑫾𑫿𑬀𑬁𑬂𑬃𑬄𑬅𑬆𑬇𑬈𑬉𑬊𑬋𑬌𑬍𑬎𑬏𑬐𑬑𑬒𑬓𑬔𑬕𑬖𑬗𑬘𑬙𑬚𑬛𑬜𑬝𑬞𑬟𑬠𑬡𑬢𑬣𑬤𑬥𑬦𑬧𑬨𑬩𑬪𑬫𑬬𑬭𑬮𑬯𑬰𑬱𑬲𑬳𑬴𑬵𑬶𑬷𑬸𑬹𑬺𑬻𑬼𑬽𑬾𑬿𑭀𑭁𑭂𑭃𑭄𑭅𑭆𑭇𑭈𑭉𑭊𑭋𑭌𑭍𑭎𑭏𑭐𑭑𑭒𑭓𑭔𑭕𑭖𑭗𑭘𑭙𑭚𑭛𑭜𑭝𑭞𑭟𑭠𑭡𑭢𑭣𑭤𑭥𑭦𑭧𑭨𑭩𑭪𑭫𑭬𑭭𑭮𑭯𑭰𑭱𑭲𑭳𑭴𑭵𑭶𑭷𑭸𑭹𑭺𑭻𑭼𑭽𑭾𑭿𑮀𑮁𑮂𑮃𑮄𑮅𑮆𑮇𑮈𑮉𑮊𑮋𑮌𑮍𑮎𑮏𑮐𑮑𑮒𑮓𑮔𑮕𑮖𑮗𑮘𑮙𑮚𑮛𑮜𑮝𑮞𑮟𑮠𑮡𑮢𑮣𑮤𑮥𑮦𑮧𑮨𑮩𑮪𑮫𑮬𑮭𑮮𑮯𑮰𑮱𑮲𑮳𑮴𑮵𑮶𑮷𑮸𑮹𑮺𑮻𑮼𑮽𑮾𑮿𑯀𑯁𑯂𑯃𑯄𑯅𑯆𑯇𑯈𑯉𑯊𑯋𑯌𑯍𑯎𑯏𑯐𑯑𑯒𑯓𑯔𑯕𑯖𑯗𑯘𑯙𑯚𑯛𑯜𑯝𑯞𑯟𑯠𑯡𑯢𑯣𑯤𑯥𑯦𑯧𑯨𑯩𑯪𑯫𑯬𑯭𑯮𑯯𑯰𑯱𑯲𑯳𑯴𑯵𑯶𑯷𑯸𑯹𑯺𑯻𑯼𑯽𑯾𑯿𑰀𑰁𑰂𑰃𑰄𑰅𑰆𑰇𑰈𑰉𑰊𑰋𑰌𑰍𑰎𑰏𑰐𑰑𑰒𑰓𑰔𑰕𑰖𑰗𑰘𑰙𑰚𑰛𑰜𑰝𑰞𑰟𑰠𑰡𑰢𑰣𑰤𑰥𑰦𑰧𑰨𑰩𑰪𑰫𑰬𑰭𑰮𑰯𑰰𑰱𑰲𑰳𑰴𑰵𑰶𑰷𑰸𑰹𑰺𑰻𑰼𑰽𑰾𑰿𑱀𑱁𑱂𑱃𑱄𑱅𑱆𑱇𑱈𑱉𑱊𑱋𑱌𑱍𑱎𑱏𑱐𑱑𑱒𑱓𑱔𑱕𑱖𑱗𑱘𑱙𑱚𑱛𑱜𑱝𑱞𑱟𑱠𑱡𑱢𑱣𑱤𑱥𑱦𑱧𑱨𑱩𑱪𑱫𑱬𑱭𑱮𑱯𑱰𑱱𑱲𑱳𑱴𑱵𑱶𑱷𑱸𑱹𑱺𑱻𑱼𑱽𑱾𑱿𑲀𑲁𑲂𑲃𑲄𑲅𑲆𑲇𑲈𑲉𑲊𑲋𑲌𑲍𑲎𑲏𑲐𑲑𑲒𑲓𑲔𑲕𑲖𑲗𑲘𑲙𑲚𑲛𑲜𑲝𑲞𑲟𑲠𑲡𑲢𑲣𑲤𑲥𑲦𑲧𑲨𑲩𑲪𑲫𑲬𑲭𑲮𑲯𑲰𑲱𑲲𑲳𑲴𑲵𑲶𑲷𑲸𑲹𑲺𑲻𑲼𑲽𑲾𑲿𑳀𑳁𑳂𑳃𑳄𑳅𑳆𑳇𑳈𑳉𑳊𑳋𑳌𑳍𑳎𑳏𑳐𑳑𑳒𑳓𑳔𑳕𑳖𑳗𑳘𑳙𑳚𑳛𑳜𑳝𑳞𑳟𑳠𑳡𑳢𑳣𑳤𑳥𑳦𑳧𑳨𑳩𑳪𑳫𑳬𑳭𑳮𑳯𑳰𑳱𑳲𑳳𑳴𑳵𑳶𑳷𑳸𑳹𑳺𑳻𑳼𑳽𑳾𑳿𑴀𑴁𑴂𑴃𑴄𑴅𑴆𑴇𑴈𑴉𑴊𑴋𑴌𑴍𑴎𑴏𑴐𑴑𑴒𑴓𑴔𑴕𑴖𑴗𑴘𑴙𑴚𑴛𑴜𑴝𑴞𑴟𑴠𑴡𑴢𑴣𑴤𑴥𑴦𑴧𑴨𑴩𑴪𑴫𑴬𑴭𑴮𑴯𑴰𑴱𑴲𑴳𑴴𑴵𑴶𑴷𑴸𑴹𑴺𑴻𑴼𑴽𑴾𑴿𑵀𑵁𑵂𑵃𑵄𑵅𑵆𑵇𑵈𑵉𑵊𑵋𑵌𑵍𑵎𑵏𑵐𑵑𑵒𑵓𑵔𑵕𑵖𑵗𑵘𑵙𑵚𑵛𑵜𑵝𑵞𑵟𑵠𑵡𑵢𑵣𑵤𑵥𑵦𑵧𑵨𑵩𑵪𑵫𑵬𑵭𑵮𑵯𑵰𑵱𑵲𑵳𑵴𑵵𑵶𑵷𑵸𑵹𑵺𑵻𑵼𑵽𑵾𑵿𑶀𑶁𑶂𑶃𑶄𑶅𑶆𑶇𑶈𑶉𑶊𑶋𑶌𑶍𑶎𑶏𑶐𑶑𑶒𑶓𑶔𑶕𑶖𑶗𑶘𑶙𑶚𑶛𑶜𑶝𑶞𑶟𑶠𑶡𑶢𑶣𑶤𑶥𑶦𑶧𑶨𑶩𑶪𑶫𑶬𑶭𑶮𑶯𑶰𑶱𑶲𑶳𑶴𑶵𑶶𑶷𑶸𑶹𑶺𑶻𑶼𑶽𑶾𑶿𑷀𑷁𑷂𑷃𑷄𑷅𑷆𑷇𑷈𑷉𑷊𑷋𑷌𑷍𑷎𑷏𑷐𑷑𑷒𑷓𑷔𑷕𑷖𑷗𑷘𑷙𑷚𑷛𑷜𑷝𑷞𑷟𑷠𑷡𑷢𑷣𑷤𑷥𑷦𑷧𑷨𑷩𑷪𑷫𑷬𑷭𑷮𑷯𑷰𑷱𑷲𑷳𑷴𑷵𑷶𑷷𑷸𑷹𑷺𑷻𑷼𑷽𑷾𑷿𑸀𑸁𑸂𑸃𑸄𑸅𑸆𑸇𑸈𑸉𑸊𑸋𑸌𑸍𑸎𑸏𑸐𑸑𑸒𑸓𑸔𑸕𑸖𑸗𑸘𑸙𑸚𑸛𑸜𑸝𑸞𑸟𑸠𑸡𑸢𑸣𑸤𑸥𑸦𑸧𑸨𑸩𑸪𑸫𑸬𑸭𑸮𑸯𑸰𑸱𑸲𑸳𑸴𑸵𑸶𑸷𑸸𑸹𑸺𑸻𑸼𑸽𑸾𑸿𑹀𑹁𑹂𑹃𑹄𑹅𑹆𑹇𑹈𑹉𑹊𑹋𑹌𑹍𑹎𑹏𑹐𑹑𑹒𑹓𑹔𑹕𑹖𑹗𑹘𑹙𑹚𑹛𑹜𑹝𑹞𑹟𑹠𑹡𑹢𑹣𑹤𑹥𑹦𑹧𑹨𑹩𑹪𑹫𑹬𑹭𑹮𑹯𑹰𑹱𑹲𑹳𑹴𑹵𑹶𑹷𑹸𑹹𑹺𑹻𑹼𑹽𑹾𑹿𑺀𑺁𑺂𑺃𑺄𑺅𑺆𑺇𑺈𑺉𑺊𑺋𑺌𑺍𑺎𑺏𑺐𑺑𑺒𑺓𑺔𑺕𑺖𑺗𑺘𑺙𑺚𑺛𑺜𑺝𑺞𑺟𑺠𑺡𑺢𑺣𑺤𑺥𑺦𑺧𑺨𑺩𑺪𑺫𑺬𑺭𑺮𑺯𑺰𑺱𑺲𑺳𑺴𑺵𑺶𑺷𑺸𑺹𑺺𑺻𑺼𑺽𑺾𑺿𑻀𑻁𑻂𑻃𑻄𑻅𑻆𑻇𑻈𑻉𑻊𑻋𑻌𑻍𑻎𑻏𑻐𑻑𑻒𑻓𑻔𑻕𑻖𑻗𑻘𑻙𑻚𑻛𑻜𑻝𑻞𑻟𑻠𑻡𑻢𑻣𑻤𑻥𑻦𑻧𑻨𑻩𑻪𑻫𑻬𑻭𑻮𑻯𑻰𑻱𑻲𑻳𑻴𑻵𑻶𑻷𑻸𑻹𑻺𑻻𑻼𑻽𑻾𑻿𑼀𑼁𑼂𑼃𑼄𑼅𑼆𑼇𑼈𑼉𑼊𑼋𑼌𑼍𑼎𑼏𑼐𑼑𑼒𑼓𑼔𑼕𑼖𑼗𑼘𑼙𑼚𑼛𑼜𑼝𑼞𑼟𑼠𑼡𑼢𑼣𑼤𑼥𑼦𑼧𑼨𑼩𑼪𑼫𑼬𑼭𑼮𑼯𑼰𑼱𑼲𑼳𑼴𑼵𑼶𑼷𑼸𑼹𑼺𑼻𑼼𑼽𑼾𑼿𑽀𑽁𑽂𑽃𑽄𑽅𑽆𑽇𑽈𑽉𑽊𑽋𑽌𑽍𑽎𑽏𑽐𑽑𑽒𑽓𑽔𑽕𑽖𑽗𑽘𑽙𑽚𑽛𑽜𑽝𑽞𑽟𑽠𑽡𑽢𑽣𑽤𑽥𑽦𑽧𑽨𑽩𑽪𑽫𑽬𑽭𑽮𑽯𑽰𑽱𑽲𑽳𑽴𑽵𑽶𑽷𑽸𑽹𑽺𑽻𑽼𑽽𑽾𑽿𑾀𑾁𑾂𑾃𑾄𑾅𑾆𑾇𑾈𑾉𑾊𑾋𑾌𑾍𑾎𑾏𑾐𑾑𑾒𑾓𑾔𑾕𑾖𑾗𑾘𑾙𑾚𑾛𑾜𑾝𑾞𑾟𑾠𑾡𑾢𑾣𑾤𑾥𑾦𑾧𑾨𑾩𑾪𑾫𑾬𑾭𑾮𑾯𑾰𑾱𑾲𑾳𑾴𑾵𑾶𑾷𑾸𑾹𑾺𑾻𑾼𑾽𑾾𑾿𑿀𑿁𑿂𑿃𑿄𑿅𑿆𑿇𑿈𑿉𑿊𑿋𑿌𑿍𑿎𑿏𑿐𑿑𑿒𑿓𑿔𑿕𑿖𑿗𑿘𑿙𑿚𑿛𑿜𑿝𑿞𑿟𑿠𑿡𑿢𑿣𑿤𑿥𑿦𑿧𑿨𑿩𑿪𑿫𑿬𑿭𑿮𑿯𑿰𑿱𑿲𑿳𑿴𑿵𑿶𑿷𑿸𑿹𑿺𑿻𑿼𑿽𑿾𑿿𑀀𑀁𑀂𑀃𑀄𑀅𑀆𑀇𑀈𑀉𑀊𑀋𑀌𑀍𑀎𑀏𑀐𑀑𑀒𑀓𑀔𑀕𑀖𑀗𑀘𑀙𑀚𑀛𑀜𑀝𑀞𑀟𑀠𑀡𑀢𑀣𑀤𑀥𑀦𑀧𑀨𑀩𑀪𑀫𑀬𑀭𑀮𑀯𑀰𑀱𑀲𑀳𑀴𑀵𑀶𑀷𑀸𑀹𑀺𑀻𑀼𑀽𑀾𑀿𑁀𑁁𑁂𑁃𑁄𑁅𑁆𑁇𑁈𑁉𑁊𑁋𑁌𑁍𑁎𑁏𑁐𑁑𑁒𑁓𑁔𑁕𑁖𑁗𑁘𑁙𑁚𑁛𑁜𑁝𑁞𑁟𑁠𑁡𑁢𑁣𑁤𑁥𑁦𑁧𑁨𑁩𑁪𑁫𑁬𑁭𑁮𑁯𑁰𑁱𑁲𑁳𑁴𑁵𑁶𑁷𑁸𑁹𑁺𑁻𑁼𑁽𑁾𑁿𑂀𑂁𑂂𑂃𑂄𑂅𑂆𑂇𑂈𑂉𑂊𑂋𑂌𑂍𑂎𑂏𑂐𑂑𑂒𑂓𑂔𑂕𑂖𑂗𑂘𑂙𑂚𑂛𑂜𑂝𑂞𑂟𑂠𑂡𑂢𑂣𑂤𑂥𑂦𑂧𑂨𑂩𑂪𑂫𑂬𑂭𑂮𑂯𑂰𑂱𑂲𑂳𑂴𑂵𑂶𑂷𑂸𑂺𑂹𑂻𑂼𑂽𑂾𑂿𑃀𑃁𑃂𑃃𑃄𑃅𑃆𑃇𑃈𑃉𑃊𑃋𑃌𑃍𑃎𑃏𑃐𑃑𑃒𑃓𑃔𑃕𑃖𑃗𑃘𑃙𑃚𑃛𑃜𑃝𑃞𑃟𑃠𑃡𑃢𑃣𑃤𑃥𑃦𑃧𑃨𑃩𑃪𑃫𑃬𑃭𑃮𑃯𑃰𑃱𑃲𑃳𑃴𑃵𑃶𑃷𑃸𑃹𑃺𑃻𑃼𑃽𑃾𑃿𑄀𑄁𑄂𑄃𑄄𑄅𑄆𑄇𑄈𑄉𑄊𑄋𑄌𑄍𑄎𑄏𑄐𑄑𑄒𑄓𑄔𑄕𑄖𑄗𑄘𑄙𑄚𑄛𑄜𑄝𑄞𑄟𑄠𑄡𑄢𑄣𑄤𑄥𑄦𑄧𑄨𑄩𑄪𑄫𑄬𑄭𑄮𑄯𑄰𑄱𑄲𑄳𑄴𑄵𑄶𑄷𑄸𑄹𑄺

來到せんときに、邪正の差別いかんが知るや、これはいかんぞ疑ふ、雜亂に由るが故に、この義いかん、謂はく、無量光明契經の中に是くの如くの説を作す、若し修行者、その心清淨なれば、無量無邊のもろくの天子、無量無邊のもろくの天女あつて、種々の妙花を雨さん、種々の所有の名香を燒き、種々微妙の伎樂を出現し、種々勝妙の莊嚴の具を開布し、甚だ愛樂すべき貌にて行者の所に來到して行者を供養す、所以いかんとなれば、その法を重んずるが故なり、かの外道の人、亦天像を作して行者の所に來到すること前の如くして異なること無くば、その邪正の差別了知すべきこと難きが故に、この疑を解釋するに、則ち六門あり、云何が六つとする、一つに呪知根壞不壞門、二つには嚴具圓珠有無門、三つには身光眼入不入門、四つには頭髮末結不結門、五つには雙背無所取着門、六つには俱取攝不除遣門なり、これを名けて六つとす、呪知根壞不壞門と言ふは、謂はく、對治の陀羅尼呪を誦するに、若し眞實の天は、その根を壞せず、若し虚偽の天は、諸根失壞してみな所有無し、之を以て別とす、呪を誦する形相その相いかん、謂はく、二意あるが故に、いかんが二つとする、一つには外呪を誦するが故に、二つには、内呪を呪するが故に、外呪を誦する時に、若し眞實

の天なれば増減異なること無し、若し虚偽の天なれば、その諸根の相漸々に増長す、神呪を誦する相は、その次第の如く數量を超えず、如々に誦するが故に、之を以て別とす、内呪と言ふは、その相いかん、謂はく、且らく眼を呪するときは、即ち呪を誦して言はく。

坦陁哆、摩訶鳩尸帝、迦那毗只帝、囉多尼嘶郎婆、唵陀尼、娑坦奢毗、呵哪帝、阿  
 枳尼、摩枳尼、陀々帝、娑婆呵帝、摩訶娑婆訶帝、娑婆呵。

若しこの神呪三七遍を誦すれば、眼根壞失して、みな所有無し、所餘の諸處にも、おのゝ神呪あり、而れども要無きが故に略去して釋せず。すでに呪知根壞不壞門を説きつ、次に嚴具圓珠有無門を説かん、その相いかん、謂はく、若し眞實の天は、その莊嚴の具の中に十の圓珠あり、若し虚偽の天なれば、その莊嚴の具の中にこの珠無きが故に、之を以て別とす。すでに嚴具圓珠有無門を説きつ、次に身光眼入不入門を説かん、その相いかん、謂はく、且らく彼の行者、眼を閉づる時の中に、若し眞實の天は、その身の光明、眼内に入る、若し虚偽の天なれば、眼内に入らず、之を以て別とす、すでに身光眼入不入門を説きつ、次に頭髮末結不結門を説かん、その相いかん、謂はく

髮相を見るに、若し眞實の天は、兩つの末相結べり、若し虚偽の天なれば、兩つの末互に解けたり、之を以て別とす。すでに頭髮末結不結門を説きつ、次に雙背無所取着門を説かん、その相いかん、謂はく、若しは眞實の天にもあれ、若しは虚偽の天にもあれ、唯し自の妄心の現量の境界なり、その實あること無しと觀じて所着無きが故に、之を以て治とす。すでに雙背無所取着門を説きつ、次に俱取攝不除遣門を説かん、その相いかん、謂はく、若しは眞實の天にもあれ、若しは虚偽の天にもあれ、みな一眞如なり、みな一法身なり、別異なること無しと觀じて斷除せざるが故に、之を以て治とす。すでに天像除遣門を説きつ、次に對治菩薩形像門を説かん、この門の中に就て即ち二門あり、いかんが二つとする、一つには誦呪了知邪正門、二つには智慧觀察無着門なり、誦呪門といふはその相いかん、謂はく、且らく心を呪するときは、即ち呪を誦じて言はく。

坦阿哆那、毗提摩鳩帝、婆尸婆婆尼、嘶唎提闍那那、尸郎摩、呵只陀、阿只陀娑婆呵。

若しこの神呪、八百十遍を誦じ已訖れば、即ちかの菩薩漢々として動せず、譬へば木

石の如し、之を以て治とす、一切の根及び莊嚴の具の中におのゝ神呪等の多種の門あり、而れども要無きが故に略して而も説かず。すでに誦呪了知邪正門を説きつ、次に智慧觀察無有門を説かん、その相いかん、謂はく、智慧を以て諸法の空無相の理を觀察して執着無きが故に。すでに對治菩薩形像門を説きつ、次に對治如來形像門を説かん、その相いかん、この門の中に就て亦二門を具す、名は前の説の如し、神呪門といふはその相いかん、謂はく、且らく光明を呪するときは、即ち呪を誦じて言はく。

哆唎坦、唵那羅帝、訶折羅、呬馱尼、闍鍵尼、婆健尼、摩那囉、鄔婆帝闍摩羅、娑婆呵。

若しこの神呪四百遍を誦すれば、若し實の如來ならば、その身の光明則ち損減せず、若し偽の如來ならば、その身の光明則ち損減して闇の色を作す、之を以て別とす、彼の第二の門は、前に説く所を觀じて審かに思惟すべし、外道の人あつて一切種々の異類を造作して、行者の所に來到して行者の心を亂さば、爾の時に當さにおのゝ何等の呪を誦すべきや、謂はく、神呪あり、是れ通にして別に非ず、所謂る、如來惣持法藏因緣契經の中に説く所の神呪大陀羅尼なり、彼の契經の中に如何が説くや、謂はく、

彼の契經の中に是くの如くの説を作す、爾の時に文殊師利、即ち佛に白して言さく、世尊一切種々の邪道の類、行者の所に來到して行者の心を亂さん時は、當さに何等の門を須るてか而も以て除遣すべきや、是に於て如來則ち文殊師利に告げて言はく、深法門あり、能善通じて一切の邪道を治す、所謂る、諸佛無盡藏無礙自在印陀羅網隨隨轉惣持大陀羅尼法門なり、文殊師利よ、諦かに聽き諦かに聽き、善く思ひ之を念せよ、我れ當さに汝が爲めに分別し解説すべし、文殊師利よ、言ふ所の通達無礙自在惣持大陀羅尼法門とは、十方三世の一切諸佛の護念し玉ふ所の寶藏なり、十方三世一切菩薩の常に誦持し玉ふ所の大軌則なり、十方三世の一切の神王及び一切天人の皆悉く禮拜し供養する所の廣大の福田なり、こゝに於て世尊、即ち呪を誦じて言はく。

坦啞𑖀、那羅尸伽諾郎帝、遮𑖀𑖀、娑毘提、阿呵囉陀尼、婆伽尸帝、駄𑖀𑖀囉𑖀𑖀  
 那筏尼帝、伽坦尼娑哪𑖀、鳩𑖀𑖀那婆提、娑訶囉伊婆娑尼毘舒訶、郎佉𑖀𑖀陀尼、𑖀𑖀𑖀  
 提及、阿囉鍵那尸娑婆呵。

若しこの神呪、八千七百五十一遍を誦じ已訖れば、その所應に隨つて、一切の邪類みな悉く退失して惱亂すること能はざるが故に、本の如し、「或は天像と菩薩の像を現じ、

Diārami  
 (二) 陀羅尼 惣持  
 と譯す、無邊の妙  
 徳功驗を持する意  
 支那の呪に少分似  
 たる故に呪とも譯  
 せり。

亦は如來像を作して相好具足し」といふが故に。すでに出現人相令信門を説きつ、次に出現言説亂識門を説かん、この門の中に就て即ち三門あり、いかに三つとする、一つには、説陀羅尼門、二つには説修行因門、三つには説果滿徳門なり、是を名けて三つとす、是くの如くの三説は、おのゝ何れの人の説ぞや、所謂る、若し天の像は多く陀羅尼を説き、若し菩薩の像は多く行因を説き、若し如來の像は多く果徳を説く、所以いかにとなれば、おのゝ自得を説けば行者信するが故に、所説の陀羅尼その相いかん、所謂る、而も能く光明連續陀羅尼を説くが故に、若しこの呪を誦じて當さにいかなる利かあるべきや、謂はく、若しこの呪を誦すれば、自身の光明、他身に續くが故に、是の故に天像彼の修行者の所の中に來到してこの陀羅尼門を説き已訖れば、即ち彼の行者古へは光明無けれども、今光明あつて、極めて歡喜するが故に是くの如くの念を作す、我れ今修行の力を承くるが故に、今是くの如くの殊勝の光明ありとおもうて、自の正行を亂して外の邪網に入る、この義を以ての故に、彼の天像、陀羅尼門を説く、即ち呪を誦じて言はく。

阿𑖀𑖀囉𑖀𑖀阿婆尸、那佉耶郎婆娑尼、帝佉囉、𑖀𑖀𑖀囉伽帝、担𑖀𑖀婆尸、呵筏那、鳩

筏帝、迦摩嚩囉及、囉但尼、陀哪哆陀尼娑婆呵、囉婆娑婆娑、呵囉阿哆尼、娑哆尼娑婆阿呵。

若しこの神呪五千三百遍を誦じ已訖れば、即便ち光明相續して一となる、爾の時に行者、即ち呪を誦じて言はく。

坦陁唎、遮唎尼、阿婆囉陀帝、及跋那尸哪、摩耶提婆佉那羅帝、毗呵耶帝、跋跋那提、多筏陀阿摩囉娑婆呵。

若しこの神呪一百遍を誦すれば、彼の身の光明斷絶して着かず、終に惱を爲さず、本の如し、「若しは陀羅尼を説き」といふが故に、(一)すでに説陀羅尼門を説きつ、次に説修行因門を説かん、修行因門無量なることありと雖も、而も六種の(二)波羅蜜に出せず、是の故に彼の像、修行者のために(三)六資糧を説て彼の行者を亂して邪網に入れしむ、彼の外道の人、當さに何の利あつてか是くの如くの説を作して行者を亂すや、彼の修行者、當時意樂、一切の惡を斷じ一切の善を修し、因行を圓滿せんとして闕失する所無きをもて、彼の外道の人、同心を示現して正道を捨離し邪道に趣向せしむるが故に、本の如し、「若しは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を説き」といふが故に、す

(一)論廿一丁右表、快鈔九日下初丁。  
Paramish  
(二)波羅蜜、波羅蜜多の略、古來到彼岸を譯せり。  
(三)六資糧、六度なり六度は佛果に至る資糧なるが故に爾がいふ。

(一)三達智、三世了達の智なり。

(二)現達智、現在了達智なり。

(三)世論の辯、世智辯なり。

に説修行因門を説きつ、次に説果滿德門を説かん、圓滿果門無量なることありしと雖、而も寂靜涅槃界に出せず、是の故に彼の像、修行者の爲めに涅槃の德を説いて、彼の行者を亂して邪網に入れしむ、彼の外道の人、當さに何の利あつて、是くの如くの説を作して行者を亂すや、彼の修行者、因を修する意趣は、當さに果を證すべきが故に、是の故に外道、行者の欲求する所の殊勝の果德を出現して、彼の行者の心をして、能く邪道に愛着し趣向せしむ、本の如し、「或は平等にして空、無相、無願と、無怨、無親、無因、無果と畢竟空寂なる、是れ眞の涅槃なりと説く」といふが故に。すでに出現言説亂識門を説きつ、次に得三世智惑人門を説かん、是くの如くの(一)三達智おの／＼その相いかん、所謂る、若し過未の二達智は、おの／＼自境に達することについて、その最高遠際は八萬劫量なり、その最近際は、能善經一生の事を通達す、本の如し、「或は人をして宿命過去の事を知り、亦未來の事を知て」といふが故に、(二)現達智といふは則ち是れ他心智なり、所謂る、而も能く現在の人の種々の心に達するが故に、本の如し、「他心智を得しめ」といふが故に。すでに得三世智惑人門を説きつ、次に不離世間縛纏門を説かん、謂はく、外道の人、一億四萬六千種のもろ／＼の(三)世論の

(一) 無常の心  
が一定せぬないふ  
(二) 無性 無佛性  
の意。

(三) 二十一種邪三  
味 名義不明。

辯と、十萬八千種のもろくの戲論の才とを成就して、衆生を縛纏し世間に止住して  
出離を得ざらしむるが故に、本の如し、「辯才無礙にして、能く衆生をして世間の名利  
の事に貪着せしめ」といふが故に。すでに不離世間縛纏門を説きつ、次に心性無常生  
亂門を説かん、所謂る、堅固の信を破壊して、而も能く(一)無常の心を發して修行の足  
を斷ち、趣入の路を絶して邪網に引入し(二)無性に及ばしむるが故に、本の如し、「又人  
をして數暎り、數喜んで性常なること無く、或は慈愛多く、睡り多く、病多く、そ  
の心懈怠に、或は卒に精進を起して後には便ち休廢して不信を生じ、疑多く、慮り多  
く、或は本の勝行を捨て、更に雜業を修し、若は世事に着して種々に牽纏せしめ」と  
いふが故に。すでに心性無常生亂門を説きつ、次に令得邪定非眞門を説かん、謂はく、  
外道の人の(三)二十一種の邪三味を得しめ、修行者を亂して邪網に入るが故に、本の如  
し、「亦能く人をして、もろくの三味を得しむ、少分相似すれば、皆是れ外道の所得  
にして眞の三味に非ず、或は復、人をして若しは一日、若しは二日、若しは三日、乃  
至七日、定中に住して自然の香味の飲食を得、身心適悦して飢えず渴せざらしめ、人  
をして愛着せしむ、或は亦人をして食に分齊無く、乍ちに多く乍ちに少くして顔色變

異ならしむ」といふが故に。すでに令得邪定非眞門を説きつ、次に勸請行者離邪門を説  
かん、勸請行者離邪門といふは、智慧を勸修し、もろくの善分別をもて、愚癡の病  
を除て邪論の謬を遣るが故に、本の如し、「是の義を以ての故に、行者常に智慧をして  
觀察して、この心をして邪網に墮せしむること勿るべし、當さに勤めて正念なるべし、  
不取不着なれば則ち能く是のもろくの業障を遠離すべし」といふが故に、すでに勸  
請行者離邪門を説きつ、次に簡擇眞僞令了門を説かん、所謂る、世間の中に隨順するを  
僞の三味と名け、若し出世間の中に隨順するを眞の三味と名く、二種の三味、是くの  
如く知るべし、本の如し、「應さに知るべし、外道所有の三味は、みな悉く見、愛、我慢の  
心を離れず、世間の名利恭敬に貪着するが故に、眞如三味とは見相にも住せず、得相に  
も住せず、乃至出定にも亦懈怠無く、所有の煩惱漸々に微薄なり、若しもろくの凡夫、  
この三味法を習はずして如來種性に入ることを得といはば、この處りあること無し、  
世間の諸禪三味を修すれば、多く味着を起し、我見に依るを以て三界に繫屬して外道と  
共ず、若し善知識の所護を離れぬれば、則ち外道の見を起すが故に。」といふが故に。  
(一)すでに廣釋魔事對治門を説きつ、次に讚歎三昧功德門を説かん、本に曰く。

(二) 論二十三丁左  
表開解二十七丁  
(世) 卷) 快鈔十日  
下初丁。



（二）常開解等に  
は當とせるも不可  
なり

「復次に、精勤して専心に此の三昧を修學する者は、現世に當さに十種の利益を得べし、云何が十とする、一つには（一）常に十方の諸佛菩薩の爲めに護念せらる、二つには諸魔惡鬼の爲めに能く恐怖せられず、三つには九十五種の外道と鬼神との爲めに感亂せられず、四つには甚深の法を誹謗せる重罪業障を遠離して漸々に微薄なり、五つには一切の疑と、もろくの惡覺觀とを滅す、六つには如來の境界に於て、信增長することを得、七つには憂惱を遠離し、生死の中に於て勇猛にして怯からず、八つにはその心柔和にして、憍慢を捨て他人のために惱まされず、九つには未だ定を得ずと雖、一切時一切の境界の處に於て、則ち能く煩惱を損滅して世間を樂はず、十には若し三昧を得れば、外縁の一切の音聲のために驚動せられず。」

論じて曰く、この文の中に就て即ち二門あり、云何が二つとする、一つには是れ惣標門、二つには是れ散說門なり、惣標門といふは、惣じて所説を標するが故に、本の如し「復次に、精勤して専心に此の三昧を修學する者は、現世に當さに十種の利益を得べし」といふが故に。散說門の中に自ら二門あり、いかに二つとする、一つには是れ惣問門、二つには是れ別說門なり、惣問門といふは、惣じて所説を問ふが故に、本

の如し「云何が十とする」といふが故に、別說門の中に就て、故らに十種の勝妙の功德あり、一の眞定に由つて成就する所なり、云何が十とする、一つには守護の功德、常に一切無量無邊の諸佛と菩薩とのために護念せらるゝが故に、本の如し「一つには常に十方の諸佛菩薩の爲めに護念せらる」といふが故に、二つには怖魔の功德、能善一切の魔を降伏するが故に、本の如し「二つには諸魔惡鬼の爲めに能く恐怖せられず」といふが故に、三つには出道の功德、能善一切の外道ともろくの邪道とを遠離するが故に、本の如し「三つには九十五種の外道と鬼神との爲めに感亂せられず」といふが故に、四つには離謗の功德、能善大乘等を誹謗する諸罪を遠離するが故に、本の如し「四つには甚深の法を誹謗せる重罪業障を遠離して漸々に微薄なり」といふが故に、五つには決疑の功德、能善もろくの疑惑を決斷するが故に、本の如し「五つには一切の疑と、もろくの惡覺觀とを滅す」といふが故に、六つには深信の功德、勝妙の境に於て樂信の心を起して、更らに轉深きが故に、本の如し「六つには如來の境界に於て信增長することを得」といふが故に、七つには勇猛の功德、衆生界を緣じて大悲心を起し、萬行を集成して懈怠無きが故に、本の如し「七つには憂惱を遠離し、生

死の中に於て勇猛にして怯からず」といふが故に、八つには無我の功德、能善一切我慢の作意を斷除す、みな是れ佛の清淨の意なるが故に、本の如し「八つにはその心柔和にして、憍慢を捨て他人のために惱まされず」といふが故に、九つには厭離の功德、一切時處等のもろくの境界の中に於て、能善種々の煩惱を伏除して世間生死の海を樂はざるが故に、本の如し「九つには未だ定を得ずと雖、一切時一切の境界の處に於て、則ち能く煩惱を損滅して世間を樂はず」といふが故に、十には寂靜の功德、一切もろくの散動の境界に於て、その心安定にして動あること無きが故に、本の如し、「十には若し三昧を得れば、外縁の一切の音聲のために驚動せられず」といふが故に、その次第の如く數量を亂さず、心の波を止めて審かに思擇すべし。

國譯釋摩訶衍論卷第九終

疏五卷四十三丁  
 右、記六卷廿九丁  
 左、開解三十五卷  
 初、丁、廿册、快抄  
 三、卷、初、丁、廿册  
 日、下、末、三十一丁  
 記、下、末、三十一丁

國譯釋摩訶衍論卷第十

龍樹菩薩の造

すでに讚歎三昧功德門を説きつ、次に兩輪具闕益損門を説かん、本に曰く。

「復次に、若し人、止をのみ修すれば則ち心沈没し、或は懈怠を起し、衆善を樂はず大悲を遠離す、是の故に觀を修すべし、觀を修習すとは、當さに一切世間と有爲との法は、久しく停まること得ること無し、須臾に變壞し、一切の心行は念々に生滅す、是の故に苦なりと觀すべし、過去所念の諸法は、恍惚として夢の如しと觀すべし、現在所念の諸法は、猶し電光の如しと觀すべし、未來所念の諸法は、猶し浮雲の如しと觀すべし、猶し電光の如しと觀すべし、世間一切有ゆる身は、悉く不淨なり、種々の穢汚ありて、一として樂ふべきこと無しと觀すべし、是くの如く當さに念すべし、一切衆生は無始よりこのかた、みな無明に熏習せらるゝが故に、心をして生滅せしめて、すでに一切の身心の大苦を受く、現在にも即ち無量の逼迫あり、未來の世苦も亦分齊無し、捨て難く離れ難くして而も覺知せず、衆生は是くの如し、甚

(二) 忽爾作釋には忽然とせり。

だ惑む可しとす、この思惟を作して即ち勇猛に大誓願を立つべし、願くは我が心を  
 して分別を離れしむる故に、遍く十方に於て一切の諸善功徳を修行してその未來を  
 盡くし、無量の方便を以て一切苦惱の衆生を救拔して、涅槃第一義の樂を得しめん  
 と、是くの如くの願を起すを以ての故に、一切時一切處に於て、所有の衆善己れが  
 堪るに隨つて能く捨てずして修學し、心に懈怠無し、唯し坐時に止を專念するをの  
 み除く、若し餘の一切には、悉く當さに應作と不應作とを觀すべし、若しは行、若  
 しは住、若しは臥、若しは起、みな止と觀とを俱行すべし、所謂る、諸法は自性不  
 生なりと念すと雖、而も復即ち因縁和合善惡の業と苦樂等の報とは不失不壞なりと  
 念すべし、因縁善惡の業報を念すと雖、而も亦即ち性不可得なりと念すべし、若し  
 止を修せば、凡夫の世間に住着するを對治し、能く二乘法弱の見を捨つ、若し觀を  
 修せば、二乘の大悲を起さざる狭劣の心過を對治し、凡夫の善根を修せざるを遠離  
 す、この義を以ての故に、是の止觀門は、共に相助成して相捨離せざるべし、若し  
 止と觀と具せざれば則ち能く菩提の道に入ること無し。」  
 論じて曰く、この文の中に就て即ち六門あり、いかに六つとする、一つには示闕觀

(二) 以下妙第四卷  
 卅六丁右、摩訶訶  
 尸とは氣盛瓦爐と  
 翻ぜり。

(三) 阿那吽提  
 風  
 病と翻ぜり。

(四) 婆多訶彌尸  
 無根と翻ぜり。

(五) 壞根 五根壞  
 失の人なり。

(六) 快妙二日下初  
 丁。

止輪失門、二つには顯示修行觀輪門、三つには緣衆生界立願門、四つには兩輪俱轉不  
 離門、五つには顯示兩輪所治門、六つには惣結兩輪俱轉門なり、是を名けて六つとす、  
 第一門の中に就て則ち四つの過失あり、いかに四つとする、一つには沈淪の過失、  
 その心昧略にして覺了すること能はざること、(一) 摩訶訶尸開室の中に入るが如くなる  
 が故に、本の如し、「復次に、若し人、唯し止をのみ修すれば則ち心沈沒し」といふが  
 故に、二つには不動の過失、その心懈怠にして精進なること能はざるが故に、(二) 阿那  
 吽提人の如くなるが故に、本の如し、「或は懈怠を起し」といふが故に、三つには背善  
 の過失、その心專一にして應作と不應作とを分別すること能はざること、(三) 婆多訶彌尸  
 人の如くなるが故に、本の如し、「衆善を樂はず」といふが故に、四つには離悲の過失、  
 その心安寂にして大慈悲心を發起すること能はざること、(四) 壞根の人の所自欲の中に更  
 らに増せざるが如くなるが故に、本の如し、「大悲を遠離すといふが故に、是の故に觀  
 を修すべし」とは、則ち是れ觀と俱轉するなり、(五) すでに示闕觀止輪失門を説きつ、  
 次に顯示修行觀輪門を説かん、この門の中に就て則ち三門あり、いかに三つとする、  
 一つには苦相觀門、二つには無常觀門、三つには不淨觀門なり、是を名けて三つとす、

(一) 釋決十七卷二種世間參照。

(二) 一自作一入なり之に就て滅所入とする義を眞生二所入に通ずる義あり。

初めの苦相觀門の中に就て則ち二種あり、いかに二つとする、一つには壞苦、二つには行苦なり、壞苦といふは、一切の有爲の清淨の法は能く一切の不清淨の法を壞し、亦一切のもろくの不清淨の法は、能く一切の清淨の法を壞するが故に、復次に二種の世間は互相に破壞するが故に、いかに二つとする、(一)一つには具足一切世間、二つには妄想有爲世間なり、是くの如くの二種の世間の法は、相に破壞するが故に、是の故に説いて壞苦と言ふ、若しこの觀を修しては、當さに何の利をか得べき、所謂る、(二)一自作一の甚深の法を成就するが故に、本の如し、「觀を修習すとは、當さに一切世間と有爲との法は、久しく停まること得ること無し、須臾に變壞し」といふが故に、行苦と言ふは、一切の心行は、念々の中に於て常恒に遷轉して速生速滅す、この處よりの處に至ること能はざるが故に、本の如し、「一切の心行は念々に生滅す、是の故に苦なり」と觀すべし」といふが故に、すでに苦相觀門を説きつ、次に無常觀門を説かん。この門の中に就て則ち三種あり、いかに三つとする、一つには已過の無常、過去の諸法は、前には有れども後には無し、譬へば彼の夢の熟眠の時には有れども、已に乃ち覺悟しぬる時は有ること無きが如くなるが故に、本の如し、「過去所念の諸

(一) 忽然上の際文には忽爾とせり

(二) 種々身三師異説なり、記は自身他身非一の故に爾がいふさし、疏は一身の上に種々の不淨を觀する義とせし、鈔は五種不淨を觀する義とせり。

法は、恍忽として夢の如しと觀すべし」といふが故に、二つには今有の無常、現在の諸法は、古へは無けれども今は有なり、譬へば電光の即時に便ち滅して久しく停まること能はざるが如くなるが故に、本の如し、「現在所念の諸法は、猶し電光の如しと觀すべし」といふが故に、三つには當有の無常、未來の諸法は自性あること無けれども、而も忽然として至る、譬へば浮雲の有所を知らざれども、而も忽然として起して十方に遍するが如くなるが故に、本の如し、「未來所念の諸法は、猶し浮雲の(一)忽然として起するが如しと觀すべし」といふが故に、すでに無常觀門を説きつ、次に不淨觀門を説かん、不淨觀門と言ふは(二)種々の身を緣じて不淨の解を作す、貪を遠離するが故に、本の如し、「世間一切有ゆる身は、皆悉く不淨なり、種々の穢汚ありて、一として樂ふべきこと無し」と觀すべしといふが故に、すでに顯示修行觀輪門を説きつ、次に緣衆生界立願門を説かん、この門の中に就て即ち二種あり、いかに二つとする、一つには緣衆生作思惟門、二つには建立誓願遍布門なり、是を名けて二つとす、緣衆生作思惟門と言ふは、所謂る、三界の中の無量無邊の一切衆生を緣じて是くの如くの念を作す、無始よりこのかた、根本無明に覆藏せらるゝが故に、自の本覺清淨の佛を棄背して、原に

歸へるに日無く、無明藏を出づること更に復遠し、我れ若し悲心を發さずして攝取せざれば、又も之き、又も之いて、唯し劫數を過ぐとも正覺を取らん期、實にその際り無きをもて、無邊の大悲心を發起するが故に、本の如し、「是くの如く當さに念すべし、一切衆生は無始世よりこのかた、みな無明に熏習せらるゝが故に、心をして生滅せしめて、すでに一切の身心の大苦を受く、現在にも則ち無量の逼迫あり、未來の世苦も亦分齊無し、捨て難く離れ難くして而も覺知せず、衆生は是くの如し、甚だ惑むべし」といふが故に、建立誓願遍布門と言ふは、所謂る、是くの如く思惟を作し已訖つて、則ち大誓願を立つ、十方世界の微塵數の光明般若を起し、十方世界の微塵數の種々の心相に達し、十方世界の微塵數の一切の諸煩惱業障海を對治し、十方世界の微塵數の行因海を圓滿し、十方世界の微塵數の果徳を證得し、みな悉く餘無からしむるが故に、本の如し、「この思惟を作して則ち勇猛に大誓願を立つべし、願くば我が心をして分別を離れしむる故に、遍く十方に於て一切の諸善功徳を修行して、その未來を盡くし、無量の方便を以て一切苦惱の衆生を救拔して、涅槃第一義を得しめん」といふが故に、(二)すでに緣衆生界立願門を説きつ、次に兩輪俱轉不離門を説かん、所謂る、是くの如

(二)論五丁右裏、快抄三丁下初丁。

(一)行因の海當段所説の兩輪をいふ。  
(二)願海 前段の立願門をいふ。

(三)異本には次の問字無し、而して大覺世尊とあり。

Gaṇḍa 調頌と譯す。伽陀

くの願を起し已訖つて、則ち直に(一)行因の海を修習するが故に、若し(二)願海を起して勤るに修行せざれば、圓滿の果を莊嚴すること能はざるが故に、若し修行を爲さんには當さに如何がすべきや、謂はく、兩輪を具して偏なからしむるが故に、兩輪を具する相は、何れの契經の中に分明に顯示するや、謂はく、文殊師利發起十萬一千種甚深廣大圓滿陀羅尼開問(三)々大覺尊益大衆海契經なり、彼の契經の中に如何が説くや、所謂る彼の契經の中に是くの如くの説を作す、爾の時に文殊師利、即ち佛に白して言さく、世尊よ、云何が名けて止觀俱行不離門と爲る、我れ及び一切の無量無邊の大衆の海みな悉く不知不覺無明の海に入つて通達すること能はず出離すること能はず、如宜しく世尊、我れ等諸迷の子女を欲ふがために分明に顯示玉へ、爾の時に世尊、即ち文殊師利に告げて言はく、諦かに聽きく、善く思ひ之を念せよ、我れ當さに汝が爲めに、分別し解説すべし、こゝに世尊、則ち(四)伽陀を説いて言く。

譬へば翼闕けたる鳥と 及び一輪の車と 一足の人同分と  
眼闕けて險しきを之く馬と 高く遠く翔り 所應に隨つて運載し  
その道路を遊行し 惡趣の坑に墮せざるあること無きが如く 若し一輪を具足

して

一輪を闕せる行者も 亦復是くの如く知るべし 　　それ實に  
 法性虚空の中に 　　如量智に乗じて翔けり 　　法藏海に入つて  
 義理の寶を運載し 　　眞如平道の中に 　　周遍く通じて遊行し  
 一切の魔と外道との 　　邪見の深坑の中に 　　坑に倒墮せざるあること無きを以  
 ての故に

是の故にもろくの行者 　　兩輪具足し轉じて 　　終に捨離すべからず  
 若し修行者あつて 　　この兩輪を具せざれば 　　終に無上大覺地に  
 通達すること能はず

今この經文は、何の義を明さんとかする、謂はく、(一)三昧を修習して寂靜の境に達し、  
 (二)智慧を修習して散動の境を照して、寂靜の中に在りても動を捨てず、散亂の中に在  
 りても寂を捨てずして、而も相捨離せず、俱行俱轉することを顯示せんがための故に、  
 復次に三昧を修習して空無の境に達し、智慧を修習して在有の境を照して、空に在り  
 ても有に着せず、有に在りても無に染せず、有無雙べて照し、偏邊あること無くして

(一) 慧行所覽の本  
 は功は到墮...  
 ありしと思はる、  
 (鈔四の廿八丁右  
 参照)

Samadhi  
 (一) 三昧 止論な  
 り。  
 (二) 智慧 觀輪た  
 り。

(一) 亦の字唐本に  
 は無し。

而も相捨離せず、俱行俱轉することを顯示せんと欲ふが爲めの故に、復次に、三昧を修  
 習して平等の理に達し、智慧を修習して差別の事を照らして、理事雙べて達し、偏邊あ  
 ること無くして而も相捨離せず、俱行俱轉することを顯示せんと欲ふがための故に、復  
 次に、止は當さに觀を待つて方さに建立することを得、自性の止に非ず、觀は當さに  
 止を待つて方さに建立することを得、自性の觀に非ず、亦止あること無ければ、(一)亦  
 觀無きことを顯示せんと欲ふがための故に、復次に、止則ち是れ觀、觀則ち是れ止、  
 止觀一體にして差別無きことを顯示せんと欲ふがための故に、その次第の如く、審か  
 に思擇すべし、本の如し、「是くの如くの願を起すを以ての故に、一切時一切處に於て、  
 所有の衆善己れが堪るに隨つて、能く捨てずして修學し心に懈怠無し、唯し坐時に止  
 を專念するをのみ除く、若し餘の一切には、悉く當さに應作と不應作とを觀察すべし、  
 若しは行、若しは住、若しは臥、若しは起、みな止と觀とを俱行すべし、所謂る、諸法  
 は自性不生なりと念すと雖、而も復則ち因縁和合善惡の業と、苦樂等との報とは、不  
 失不壞なりと念すべし、因縁善惡の業報を念すと雖、而も亦則ち性不可得なりと念す  
 べし」といふが故に、すでに兩輪俱轉不離門を説きつ、次に顯示兩輪所治門を説かん、

止觀俱起參照。九卷  
記廿一丁右(卅五卷)  
廿八丁右(卅五卷)  
快鈔四丁下(卅五卷)  
心法異譯に云く、  
菩薩に値偶すべか

若し行者あつて、止輪を修習しては、當さに何れの過失を對治せんとかするや、謂はく凡夫の衆生の着有の過失と、二乗の衆生の樂空の過失とを對治して、俱に絶離せんがための故に、本の如し、「若し止を修せば、凡夫の世間に住着するを對治し、能く二乗怯弱の見を捨つ」といふが故に、若し行者あつて、觀輪を修習しては、當さに何れの過失を對治せんとかするや、謂はく、二乗の衆生の大悲を遠離して衆苦を救はざる下劣の過失と、凡夫の衆生の常恒に懈怠にして精進なること能はず、善品を修せずして惡を樂ふ過失とを對治して、俱に出離せんがための故に、本の如し、「若し觀を修せば、二乗の大悲を起さる狭劣の心過を對治し、凡夫の善根を修せざるを遠離す」といふが故に、すでに顯示兩輪所治門を説きつ、次に總結兩輪俱轉門を説かん、所謂る、惣じて如上所説の(一)輪闕の行者の大なる過失を結するが故に、本の如し、「この義を以ての故に、(二)是の止觀門は、共に相助成して相捨離せざるべし、若し止と觀と具せざれば、則ち能く菩提の道に入ること無し」といふが故に。  
(三)すでに兩輪具闕益損門を説きつ、次に勸劣向勝不退門を説かん、本に曰く。  
「復次に、衆生初めて是の法を學して正信を求めんと欲ふに(四)その心怯弱なり(五)以て

止觀俱起參照。九卷  
記廿一丁右(卅五卷)  
廿八丁右(卅五卷)  
快鈔四丁下(卅五卷)  
心法異譯に云く、  
菩薩に値偶すべか

この娑婆世界に住しては、自ら常に諸佛に値て親承し供養すること能はじと畏れ、懼らく信心成就すべきこと難しと謂ふて、意退せんと欲は、當さに知るべし、如來に勝方便あつて信心を攝護し玉ふ、謂はく、意を専らにして佛を念する因縁を以て願に隨つて他方の佛土に生ずることを得て、常に佛を見たてまつりて、永く惡道を離る、修多羅に説くが如し、若し人、西方極樂世界の阿彌陀佛を專念して、所修の善根を廻向して、彼の世界に生せんと願求すれば、即ち往生することを得て、常に佛を見るが故に、終に退あること無し、若し彼の佛の眞如法身を觀じて、常に勤めて修習すれば、畢竟して生ずることを得て、正定に住するが故に。」  
論じて曰く、この文の中に就て即ち七門あり、いかんが七つとする、一つには顯示趣向假人門、二つには歸依所學教法門、三つには厭惡處所退信門、四つには如來方便殊勝門、五つには承力得勝妙處門、六つには得善處定不退門、七つには引經證自所說門なり、是を名けて七つとす、顯示趣向假人門といふは、(一)所謂る、十信の位の前四種の心を得て、更らに勝進せざる下品の衆生を顯示するが故に、本の如し、「復次に衆生」といふが故に。歸依所學教法門と言ふは、彼の十信の位の(二)下品の衆生は、甚深無極

(一) 上品 上の四  
 (二) 心法を以て諸佛  
 (三) 廣短冊、釋決  
 (四) 十七教法無常參照

(五) 娑婆堪忍と  
 釋す、依て娑婆世  
 界を忍土とも譯せ  
 り、不自由なれど  
 も忍ぶ世の中さ  
 ふ意。

の大乗に歸依して初めて學習するが故に、所謂る、一切諸佛の(一)師とし玉ふ所なり、  
 (二)世も動せず四相も遷さず、自然常住なる地前地上の大道路なるが故に、本の如し、  
 「初めて是の法を學して」といふが故に。狀惡處所退信門と言ふは、彼の十信の位の下  
 品の衆生の親り甚深の法門を聽受すと雖、而もその心根極めて下劣なるが故に、二つ  
 の大事を怖れて勝進すること能はずして、退せんと欲ふがための故に、云何が二つとす  
 る、一つには國土、二つには勝緣なり、國土と言ふは、即ち此の(三)娑婆世界は、處所能惡  
 に、衆生濁亂なり、淨心を發起して勤るに修行せんとするに、甚極切難なる故に、所以  
 かんとなれば、彼の心中に於て、違逆の境界一切時に於て、一切の處に於て常恒に現前  
 し(四)心面の中に進んで捨離せざるが故に、勝緣と言ふは、この世界に於ては、(五)依止濁  
 亂し、一切諸佛の出世すること極めて尠なく、無量の菩薩の感に趣く時節極めて遠し、  
 諸佛菩薩の世に出現し玉ふことは(六)清心の鏡の淨と不淨とに隨順するが故に、この義  
 を以ての故に、彼の修行者、勝緣に値はざることは極めて怖畏するが故に退意を發す  
 のみ、本の如し、「正信を求めんと欲ふに、その心怯弱なり、以てこの娑婆世界に住し  
 ては、自ら常に諸佛に値て親承し供養すること能はじと畏れ、懼らくは信心成就すべ

(二) 論九丁右表、  
 開解卅三丁左、  
 注廿四卷初丁、  
 鈔五丁下初丁、  
 快勸

(三) 廣短冊、釋決  
 十七、惡趣往生參  
 照。(四) 同他方佛土參  
 照。(五) 同身體明白參  
 照。(六) 同永離惡道參  
 照。

きこと難しと謂ふて、意退せんと欲は(一)といふが故に(二)如來方便殊勝門と言ふは、  
 謂はく、如來に不可思議甚深極妙の大方便あるが故に、能善、彼の人の信心を攝護し  
 玉ふて、轉勝進せしむるが故に、いかに名けて勝妙の方便とする、所謂る、如來を  
 專念する方便なり、いかに專念する、謂はく、專注の意をもて、他方淨土の種々の  
 依正を憶念す、その念を相續し絶えざらしむるが故に、本の如し、「當さに知るべし、  
 如來に勝方便あつて信心を攝護し玉ふ、(三)謂はく、意を専らにして佛を念する因縁を  
 以て」といふが故に。承力得勝妙處門と言ふは、もろくの如來の不可思議の方便力を  
 以ての故に、自の所願に隨つて、(四)則ち往生妙樂土を得るが故に、本の如し、「(五)願に  
 隨つて他方の佛土に生ずることを得て」といふが故に。得善處定不退門と言ふは、彼  
 の土に生じ已つて、眼に如來の相好を具し玉へる像を見、耳に聖の深妙を説き玉ふ梵  
 音を聞て、永く惡名を離れ、定めて動せざるに従りて、(六)心海澄淨にして身體明白なり、  
 依妙へに、正清きが故に、本の如し「(七)常に佛を見たてまつりて、永く惡趣を離る」と  
 いふが故に。引經證自所說門と言ふは、所謂る、說相を屬當せる經本の辭を該攝して  
 自の所說の解釋の文を贅るが故に、所引の經文は、說相明かなるが故に、重釋を須む



す、本の如し、<sup>(一)</sup>修多經に説くが如し、若し人、西方極樂世界の阿彌陀佛を專念して、<sup>(二)</sup>所修の善根を廻向して、彼の世界に生せんと願求すれば、則ち往生することを得て、常に佛を見るが故に、終に退あること無し、<sup>(三)</sup>若し彼の佛眞如法身を觀じて、常に勤めて修習すれば、畢竟して生ずることを得て、<sup>(四)</sup>正定に住するが故に」といふが故に。<sup>(五)</sup>すでに修行信心分を説きつ、次に勸修利益分を説かん、本に曰く。

『是くの如くの摩訶衍は、諸佛の祕藏なり、我れすでに惣説しつ、若し衆生あつて、如來甚深の境界に於て正信を生ずることを得て、誹謗を遠離し大乘道に入らんと欲は、當さにこの論を持して思量し修習すべし、究竟して能く無上の道に至る、若し人、この法を聞き已つて怯弱を生ぜざれば、當さに知るべし、この人は定めて佛種を紹ぎ、必ず諸佛のために授記せらるべし、假使、人あつて、能く三千大千世界の中に滿てる衆生を化して十善を行せしめんよりは、如かじ人あつて一食の項に於て正しくこの法を思はんには、前の功德に過ぎたり、喩とすべからず、復次に、若し人、この論を受持し觀察し修行せんこと、若しは一日、一夜の所有の功德無量無邊にして説くこと得べからず、假令、十方一切の諸佛、おの／＼無量無邊阿僧祇劫

譯す、而して茲に淨土三部經を引解り、次にこの文に就て廣短冊、釋論七あり、なほ第十論第九方報土參照。廣短冊、釋論十七、無明所發參照。同四心理觀參照。正定、異説には正位とせり。本論下末卅五丁左、開解卅六卷初丁、快鈔六日下、(四十

Asankhyakadpā  
(六)阿僧祇劫  
僧祇は無數と譯し、劫は劫波の略にして一般に時又は時分と譯す。

に於てその功德を歎すとも、亦盡すこと能はじ、何を以ての故に、謂はく、法性の功德は盡くすることあること無きが故に、この人の功德も亦復是くの如し、邊際あること無し、其れ衆生あつて、この論の中に於て毀謗して信せざらん、所獲の罪報は無量劫を経て大苦惱を受るべし、是の故に衆生、但し仰信すべし、誹謗すべからず、深く自を害し、亦他人を害して、一切三寶の種を斷絶するを以てなり、一切の如來は、みなこの法に依て涅槃を得るが故に、一切の菩薩は、之に因て修行して佛智に入るを以ての故に、當さに知るべし、過去の菩薩は、すでにこの法に依つて淨信を成ずることを得、現在の菩薩は、今この法に依つて淨信を成ずることを得、未來の菩薩は、當さにこの法に依つて淨信を成ずることを得べし、是の故に衆生、勤めて修學すべし。』

論じて曰く、この文の中に就て則ち八門あり、いかんが八つとする、一つには舉前所說惣結門、二つには舉益勸人令修門、三つには顯離疑信功德門、四には比類爲對示勝門、五つには舉受持功讚揚門、六つには舉誹謗過令怖門、七つには殊勝廣說離謗門、八つには惣結修行勸人門なり、是を名けて八つとす、舉前所說惣結門と言ふは、謂は

11011  
記の説(卅五  
丁参照)

八 前重八所入  
種 前後八所入

餘 廿四門法  
前後能入

瑜、快之可  
さす

(三) 瑜、快の正義  
によれば、本は  
前後兩重の所入に  
末は其の能入に  
當る。

く、一の「總」の字を以て、八種の摩訶衍を總結するが故に、何が故に(三)餘法を略して結せざるや、所謂(三)本を擧げてその末を攝するが故に、本の如し、「是くの如くの摩訶衍は、諸佛の祕藏なり、我れすでに惣説しつ」といふが故に。擧益勸人令修門と言ふは、所謂、行因の海を集成して、而も法身の果を莊嚴せんがためには、この論を受持して義理を思惟し、常恒に相續して斷絶せざるが故に、本の如し、「若し衆生あつて、如來甚深の境界に於て正信を生ずることを得て、誹謗を遠離し大乘道に入らんと欲は、當さにこの論を持して思量し修習すべし、究竟して能く無上の道に至る」といふが故に、顯離疑信功德門と言ふは、謂はく、衆生あつて、この摩訶衍の甚深極妙の廣大の法門を聞き已つて、即ちその心の中に亦疑畏せず、亦怯弱せず、亦輕賤せず、亦誹謗せず、決定の心を發し、堅固の心を發し、尊重の心を發し、愛信の心を發さば、當さに知るべし、是の人は實に眞の佛子なり、法種を斷せず、佛種を斷せず、常恒に相續し、轉々増長して未來を盡し、亦諸佛のために親り授記せられ、亦一切無量の菩薩のために護念せらる、故に、本の如し、「若し人、この法を聞き已つて怯弱を生ぜざれば、當さに知るべし、この人は定めて佛種を紹ぎ、必ず諸佛のために授記せらるべし」といふが故に。比類爲對示勝門と言ふは、謂はく、若し人あつて能善、三千大千世界の中に遍滿せる衆生を攝化して、みな悉く餘無く十善を行せしめ、或は衆生あつて、一食の項に於て、この甚深の法に於て觀察し思量せんに、若しこの二人の功德を授量せば、彼の第一の人の所得の功德は、甚極微少なること、譬へば芥子を碎きて百分に作せる一分の量の如し、この第二の人の所得の功德は、甚極廣大なること、譬へば十方世界を碎ける微塵數量の如くなるが故に、本の如し、「假使、人あつて、能く三千大千世界の中に滿てる衆生を化して、十善を行せしめんよりは、如かじ人あつて一食の項に於て、正しくこの法を思はんには、前の功德に過ぎたり、喩とすべからず」といふが故に。(二)擧受持功讚揚門と言ふは、謂はく、若し人あつて、この論を受持し義理を觀察せんこと、若しは一日、若しは一夜の中間所得の功德無量無邊にして言説すべからず、思量すべからず、若し假使、十方三世一切の諸佛、十方三世一切の諸菩薩、十方世界微塵數の舌を以て、各々にみな悉く十方世界の微塵數の量の不可説劫に於てその人の所有の功德を讚揚すとも、亦盡すこと能はじ、所以いかんとなれば、法身眞如の功德は、虛空界に等しうして邊際無きが故に、何に況んや凡夫二乘の人、能く之を

(二) 論十二丁右表  
快鈔七丁下初丁。

國譯釋摩訶衍論卷第十

稱歎せんや、一日一夜の多からざる中間受持の人すら尙し所得の功德不可思議なり、  
 いか況んや、若しは二日、若しは三日、乃至百日の中に、受持、讀誦、思惟、觀察  
 せば、不可思議の中の不可思議、不可説の中の不可説の故に、本の如し、「復次に、若  
 し人、この論を受持し觀察し修行せんこと、若しは一日、一夜の所有の功德、無量無  
 邊にして説くこと得べからず、假令十方一切の諸佛、おの／＼無量無邊阿僧祇劫に於て  
 その功德を歎ずとも亦盡くすこと能はじ、何を以ての故に、謂はく、法性の功德は盡く  
 ることあること無きが故に、この人の功德も亦復是くの如し、邊際あること無し」と  
 いふが故に。舉誹謗過令怖門と言ふは、謂はく、衆生あつてこの論教に於て不信の心を  
 生じ、破謗して行せざらん、是くの如くの衆生の所得の罪報は、もろ／＼の(二)不可  
 説不可説劫の中に於て、苦の中の重き大苦を受くべきが故に、本の如し、「其れ衆生あ  
 つて、この論の中に於て毀謗して信せざらん、所獲の罪報は、無量劫を経て大苦  
 惱を受くべし」といふが故に。「是の故に衆生、但し仰信すべし、誹謗すべからず」と  
 は、則ち是れ上説の決擇を總結して、行者を勸請するなり、(三)これより已下は、その  
 因縁を作して重き過失を示す、謂はく、この世の中において、信せずして誹謗すれば

(二) 數をいふこと  
の出來ざる程の長  
年月の意。

(三) 「深く自を」以  
下の文をいふ。

自の善根を失し、他の功德を損し、一切三寶の種を斷絶して續く期無きが故に、本の  
 如し、「深く自を害し、亦他人を害して、一切三寶の種を斷絶するを以てなり」といふ  
 が故に、殊勝廣説離謗門と言ふは、謂はく、十方三世のもろ／＼の如來は、一切みな  
 悉く摩訶衍を以てその根本として正覺を成じ玉ふが故に、十方三世の無量の菩薩は、  
 一切みな悉く摩訶衍を以てその根本として因海を具するが故に、是くの如くの重深の  
 摩訶衍の法を、若し衆生あつて不信の心を生じて手論し誹謗せんか、是くの如くの衆  
 生をば、亦一切諸佛を斷伐すと名け、亦一切菩薩を斷伐すと名け、亦自の如來藏の本  
 覺の佛を斷絶すと名くるが故に、本の如し、「一切の如來は、みなこの法に依つて涅槃  
 を得るが故に、一切の菩薩は、之に因つて修行して佛智に入るを以ての故に、當さに  
 知るべし、過去の菩薩は、すでにこの法に依つて淨信を成ずることを得、現在の菩薩  
 は、この法に依つて淨信を成ずることを得、未來の菩薩は、當さにこの法に依つて淨  
 信を成ずることを得べし」といふが故に、「是の故に衆生、勤めて修學すべし」とは、  
 即ち是れ惣結修行勸人門なり、審かに思擇すべし。  
 (二) すでに勸修利益分を説きつ、次に廻向遍布門を説かん、本に曰く、

丁。(二) 快鈔八日下初

〔二〕異譯に云く、深廣大の義を解に施したる功徳を群生に見せしめん。

〔三〕以下二教論上卷に引證。〔四〕第三重第十、形於彼佛參照。〔五〕彼の佛とは因佛の德なり。〔六〕圓々海徳師各異解なり。〔七〕快師各異解なり。〔八〕快師各異解なり。〔九〕快師各異解なり。〔十〕快師各異解なり。〔十一〕快師各異解なり。〔十二〕快師各異解なり。〔十三〕快師各異解なり。〔十四〕快師各異解なり。〔十五〕快師各異解なり。〔十六〕快師各異解なり。〔十七〕快師各異解なり。〔十八〕快師各異解なり。〔十九〕快師各異解なり。〔二十〕快師各異解なり。〔二十一〕快師各異解なり。〔二十二〕快師各異解なり。〔二十三〕快師各異解なり。〔二十四〕快師各異解なり。〔二十五〕快師各異解なり。〔二十六〕快師各異解なり。〔二十七〕快師各異解なり。〔二十八〕快師各異解なり。〔二十九〕快師各異解なり。〔三十〕快師各異解なり。〔三十一〕快師各異解なり。〔三十二〕快師各異解なり。〔三十三〕快師各異解なり。〔三十四〕快師各異解なり。〔三十五〕快師各異解なり。〔三十六〕快師各異解なり。〔三十七〕快師各異解なり。〔三十八〕快師各異解なり。〔三十九〕快師各異解なり。〔四十〕快師各異解なり。〔四十一〕快師各異解なり。〔四十二〕快師各異解なり。〔四十三〕快師各異解なり。〔四十四〕快師各異解なり。〔四十五〕快師各異解なり。〔四十六〕快師各異解なり。〔四十七〕快師各異解なり。〔四十八〕快師各異解なり。〔四十九〕快師各異解なり。〔五十〕快師各異解なり。〔五十一〕快師各異解なり。〔五十二〕快師各異解なり。〔五十三〕快師各異解なり。〔五十四〕快師各異解なり。〔五十五〕快師各異解なり。〔五十六〕快師各異解なり。〔五十七〕快師各異解なり。〔五十八〕快師各異解なり。〔五十九〕快師各異解なり。〔六十〕快師各異解なり。〔六十一〕快師各異解なり。〔六十二〕快師各異解なり。〔六十三〕快師各異解なり。〔六十四〕快師各異解なり。〔六十五〕快師各異解なり。〔六十六〕快師各異解なり。〔六十七〕快師各異解なり。〔六十八〕快師各異解なり。〔六十九〕快師各異解なり。〔七十〕快師各異解なり。〔七十一〕快師各異解なり。〔七十二〕快師各異解なり。〔七十三〕快師各異解なり。〔七十四〕快師各異解なり。〔七十五〕快師各異解なり。〔七十六〕快師各異解なり。〔七十七〕快師各異解なり。〔七十八〕快師各異解なり。〔七十九〕快師各異解なり。〔八十〕快師各異解なり。〔八十一〕快師各異解なり。〔八十二〕快師各異解なり。〔八十三〕快師各異解なり。〔八十四〕快師各異解なり。〔八十五〕快師各異解なり。〔八十六〕快師各異解なり。〔八十七〕快師各異解なり。〔八十八〕快師各異解なり。〔八十九〕快師各異解なり。〔九十〕快師各異解なり。〔九十一〕快師各異解なり。〔九十二〕快師各異解なり。〔九十三〕快師各異解なり。〔九十四〕快師各異解なり。〔九十五〕快師各異解なり。〔九十六〕快師各異解なり。〔九十七〕快師各異解なり。〔九十八〕快師各異解なり。〔九十九〕快師各異解なり。〔百〕快師各異解なり。

「諸佛と甚深と廣大義と、我れ今分に随つて惣持して説きつ、此の功徳を如と法と性とに廻して、普く一切の衆生界を利せん」

論じて曰く、この一頌の中に就て即ち三種の門あり、いかに名けて三種の門とするや一つには攝前所説惣結門、二つには展舒功徳令廣門、三つには施於衆生普利門なり、是を名けて三つとす、初門の中に就て則ち二種あり、いかに二つとする、一つには通惣攝前所説門、二つには顯示能説字相門なり、その次第の如く、審らかに觀察すべし「諸佛と甚深と廣大義」とは、則ち是れ通じて前の所説を惣攝する門なり、所謂る通じて三十三種の本數の法を攝するが故に、この義いかに、「諸佛」といふは、則ち是れ不二摩訶衍の法なり、所以いかにとなれば、この不二の法を、彼の佛に形らぶるに、其徳勝れたるが故に、大本花嚴契經の中に是くの如くの説を作す、その圓々海徳の諸佛は勝れたり、その一切の佛は、圓々海を成就すること能はず、劣なるが故に、若し余らば、何が故に、分流花嚴契經の中には是くの如くの説を作す、盧舍那佛は、三種世間をその身心とし玉ふ、三種世間に法を攝すること餘無しと、彼の佛の身心も亦復攝せざる所あること無し、盧舍那佛は、三世間を攝すと雖、而も攝と不攝との故に、是の故に過無し、

〔二〕兩重 前後兩重なり。

〔三〕種々の説三十三種の法門なり

「甚深」といふは、即ち是れ兩重の八種の摩訶衍の本法なり、何の義を以ての故にか名けて甚深とする、是くの如くの兩重の摩訶衍の法は、能入門に望むるに、極めて甚深なるが故に、この義を以ての故に「甚深」の稱を立つ、審かに思擇すべし、「廣大義」といふは、則ち是れ兩重の能入門の法なり、何の義を以ての故にか「廣大義」と名くる、是くの如くの兩重の能入門の法は、皆悉く各々によく自法を廣じ、能く自法を「大」し、能く自法のために「名義」と作るが故に、この義を以ての故に「廣大義」の名字を建立す。すでに通惣攝前所説門を説きつ、次に顯示能説字相門を説かん、「我れ今分に随つて惣持して説く」と言ふは、即ち是れ顯示能説字相門なり、謂はく、「惣」の字を以て通じて一切種々の説を持するが故に、立義分の中に、「摩訶衍とは惣なり」といふは則ち是れなり、何が故にか一字に通じて諸説を持するや、摩訶衍論は如意論とすることを顯示せんと欲ふがための故に。すでに攝前所説惣結門を説きつ、次に展舒功徳令廣門を説かん、此の功徳を如と法と性とに廻らして」と言ふは、則ち是れ展舒功徳令廣門なり、謂はく、自所作の功徳を三處に廻向するが故に、いかに三つとする、一つには眞如、二つには一心法、三つには本覺の佛性なり、是れを名けて三つとす、